

2024年度

授業の自己評価報告書

奥羽大学 薬学部

目 次

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
現代の社会福祉 B	本 田 ルミ子	4
高齢者の健康 B	小 池 勇 一	5
言語学 B	伊 藤 頼 位	6
文化学 B	幕 田 順 子	7
文学 B	柴 田 尚 子	8
経済学 B	後 藤 康 夫	9
社会学 B	高 橋 嘉 代	10
歴史学 B	柳 田 春 子	11
薬学英语 I a	柴 田 尚 子	12
薬学英语 I b	柴 田 尚 子	13
薬学英语 III	伊 藤 頼 位	14
薬学英语 IV	伊 藤 頼 位	15
実用英語 I (英語検定 I)	伊 藤 頼 位	16
実用英語 II (英語検定 II)	伊 藤 頼 位	17
中国語 I	劉 芳	18
中国語 II	劉 芳	19
中国語 III	劉 芳	20
体育 A	二 瓶 美智子	21
体育 B	伊 藤 頼 位	22
リメディアル英語	伊 藤 頼 位	23
数学 II	渡 邊 哲 也	24
化学 I	石 山 玄 明	25
化学 II	西 村 良 夫	26
生物学 I b	櫻 井 敏 博	27
フレッシュマンセミナー	伊 藤 頼 位	28
日本語表現 I	伊 藤 頼 位	29
日本語表現 II	伊 藤 頼 位	30
心理学	竹ヶ原 靖 子	31
医療コミュニケーション論	竹ヶ原 靖 子	32
臨床コミュニケーション演習	竹ヶ原 靖 子	33
機能形態学 A	高 野 真 澄	34
機能形態学 B	高 野 真 澄	35
機能形態学 C	高 野 真 澄	36
解剖学	高 野 真 澄	37
微生物学	三 宅 正 紀	38
細胞生物学	古 泉 博 之	39
分子生物学	古 泉 博 之	40
生物系実習 II	三 宅 正 紀	41
有機化学 II	金 原 淳	42
有機化学 III	西 村 良 夫	43
有機化学 IV	石 山 玄 明	44

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
有機化学演習	石 山 玄 明	45
機器分析学	石 山 玄 明	46
薬用植物学	村 田 清 志	47
生薬学	村 田 清 志	48
医薬品化学Ⅰ	石 山 玄 明	49
医薬品化学Ⅱ	石 山 玄 明	50
化学系実習	石 山 玄 明	51
基礎分析化学	鈴 木 康 裕	52
薬品分析化学	鈴 木 康 裕	53
臨床分析化学	鈴 木 康 裕	54
物理化学Ⅰ	小 野 哲 也	55
物理化学Ⅱ	小 野 哲 也	56
物理系実習	柏 木 良 友	57
物理化学Ⅲ	柏 木 良 友	58
環境衛生学Ⅰ	熊 本 隆 之	59
環境衛生学Ⅱ	佐 久 間 勉	60
栄養化学	櫻 井 敏 博	61
食品衛生学	佐 久 間 勉	62
公衆衛生学Ⅰ	佐 久 間 勉	63
公衆衛生学Ⅱ	櫻 井 敏 博	64
衛生薬学実習	佐 久 間 勉	65
薬の効き方と作用点(薬理系1)	佐 藤 栄 作	66
末梢神経に作用する薬と生体反応(薬理系2)	西 屋 禎	67
生体内で生み出される生理活性物質(薬理系3)	西 屋 禎	68
薬と病態(精神疾患)(薬理系6)	関 健 二 郎	69
薬と病態(神経・筋疾患)(薬理系7)	関 健 二 郎	70
薬と病態(感染症)(薬理系8)	三 宅 正 紀	71
薬と病態(心・血管・呼吸器疾患)(薬理系9)	佐 藤 栄 作	72
薬と病態(腎・泌尿器・生殖器疾患)(薬理系10)	佐 藤 栄 作	73
薬と病態(消化器疾患)(薬理系12)	西 屋 禎	74
薬と病態チュートリアル(神経疾患) 1	小 池 勇 一	75
薬と病態チュートリアル(循環器疾患・代謝性疾患) 2	小 池 勇 一	76
薬と病態チュートリアル(消化器疾患) 3	小 池 勇 一	77
臨床検査学	高 野 真 澄	78
薬理学実習	西 屋 禎	79
医薬品毒性学	佐 藤 栄 作	80
医療統計学	熊 本 隆 之	81
薬剤学Ⅰ	渡 邊 哲 也	82
製剤学	柏 木 良 友	83
薬剤学Ⅱ	杉 野 雅 浩	84
薬剤学実習	柏 木 良 友	85

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
薬 剤 学 Ⅲ	渡 邊 哲 也	86
薬 物 相 互 作 用 学	渡 邊 哲 也	87
薬 物 送 達 シ ス テ ム	渡 邊 哲 也	88
薬 物 代 謝 学	小 池 勇 一	89
セ ル フ メ デ ィ ケ ー シ ョ ン 学	伊 藤 鍛	90
漢 方 医 学	村 田 清 志	91
薬 局 管 理 学	伊 藤 鍛	92
薬 学 演 習 Ⅰ	石 山 玄 明	93
薬 学 演 習 Ⅱ	櫻 井 敏 博	94
薬 学 演 習 Ⅲ	佐 久 間 勉	95
薬 学 演 習 Ⅳ	鈴 木 康 裕	96
薬 学 演 習 Ⅵ	佐 藤 栄 作	97
からだと生命の基礎原理	柏 木 良 友	98
健 康 食 品 学	佐 久 間 勉	99
遺 伝 医 学 概 論	熊 本 隆 之	100
臨 床 心 理 学	竹ヶ原 靖 子	101
セ ン サ ー 概 論	柏 木 良 友	102
医 療 英 会 話	伊 藤 頼 位	103
臨床治験コーディネーター総論	橋 本 ひろ美	104
科学コミュニケーション演習	熊 本 隆 之	105
法 医 学 概 論	阿 部 すみ子	106
新 薬 概 論	西 屋 禎	107

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	現代の社会福祉B	第1～4学年
科目責任者（記載者）	本田 ルミ子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

社会福祉、特に社会保障制度に関する基礎的知識を理解すること。特に公的扶助、社会保険を理解する事で患者さんをめぐる社会問題が理解できるように到達目標を考えていた。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

自然科学分（理系）の学生が社会科学の視点で、制度を学ぶには課題が多いと思われる。大体の学生は大卒の所の理解は出来ていたが、理解できない学生がわずかだが見受けられた。自分のことに置き換えて、考えられるようになっていけば良いのではと思う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

社会福祉、社会保障制度を学ぶ意義について、初回の講義で、学生自らが語ることで、十分理解できるような進捗を検討したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

社会への関心を持ってもらうため、新聞記事のコピーを配布。社会の課題を考えてもらうようにしている。その上で、講義はシラバスに沿って講義と板書で進行。なお、机間巡回は適宜実施している。

2) 自己点検・評価

アンケートに「学生は興味を持って聞いている」という言葉があったが、「理系の学生」への私自身の信頼が小さかったこと、以前、質問しても答えられなかったことから、質問を投げかけることをしなかった。学生への信頼を持ちながら、やり取りをし、講義すべきと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義では意識をし、社会問題や、制度、法律について質疑を通して講義をしていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

教養としての授業と考えている為、持ち込み可として、作文形式の試験を実施している。制度の理解と作文についても評価としている。普段の講義では、出席票への記載などを通して確認している。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

アンケートに「学生は興味を持って聞いている」という言葉があり、学生への私自身の信頼がなかったと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

- 1, 初回講義の時の授業の目的について、学生への提示
- 2, 試験の内容について精査検討
- 3, 毎回の授業の時の理解の確認シート作成

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者の健康 B	第 1 ～ 3 学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者に多い疾患について症候と病態の特徴を把握し、薬物療法、麻酔に関する留意点を学ぶ。また、老年医学と社会について理解を深める。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

学生へのアンケート調査結果からは、授業はよく準備がなされ、理解しやすいように工夫されていた、教員の話し方は聴き取りやすかった、教員の授業に対する熱意を感じた、教員は効果的に学生の参加を促した、教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた、この授業の関連分野に関心を持つことができたなどの項目の評価が高いことから見て、目標は達成できたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

一方で、知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれたおよび教員は質問に対して的確にわかりやすく答えてくれたの項目についてはやや評価が低く、改善の余地があると考えられた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教育方法としては、全て講義であり、配付資料をもとにシラバスの授業内容について出来るだけわかりやすく、また、講義時点でのトピックスを盛り込みつつ資料を作成し、学生に講義するようにした。また、講義中に出来るだけ学生に内容を理解しているかどうかを質問したりして、双方向性に留意した。

2) 自己点検・評価

授業はシラバスに沿って、系統だっておこなわれたや、理解しやすいように工夫されていた、重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた、などのアンケート項目が高評価であったことから、教育方法に関しては教員の意図をくみ取って理解しているものと考えている。一方で、質問に対しての回答が的確であるとの項目ならびに知的好奇心が刺激されたの項目ははやや評価が低かった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度の改善方策として、高齢者の健康に関わる最近のトピックスなどを効果的に取り入れ、学生の知的好奇心を刺激することも考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価については、形成的評価は特におこなっておらず、定期試験結果に基づいて総括的評価をおこなった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験結果の合格率が100%であったことから見て、当初の目的は達成できていると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度の成績評価も本年度と同様にしたいと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	言語学B	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

言葉に対するより鋭敏な感覚を養うために、言語を科学的に分析する言語学の中心的な研究対象とその研究成果を知り、自ら言語を客観的にとらえる態度を養成することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：講義 100%。
自作の教科書（A4サイズ20ページ）を初回授業時に配付。講義時には毎回スライドを使用。スライドの枚数は各回20枚前後。スライドには必要に応じて音声やビデオを活用した。毎回の授業終了前に、リアクションペーパーに授業内容に関するコメントや質問を記入して提出するよう求め、次の授業時に追加解説を行った。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価：行っていない。
総括的評価：レポート 100%

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 76%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

履修放棄者を除き、評価の対象となった学生は全員合格した。選択科目のため、一定数の履修放棄者があるのは想定内と評価する。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	文化学B	第一学年
科目責任者(記載者)	幕田 順子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

自文化中心主義と相対文化主義を中心に据えて授業を進めた。授業の前半は、学生自身が異文化の世界に入ったことを想定した話題とし、後半は、日本にいる外国人を取り上げ、学生自身と地域に暮らす外国人との共生という話題とした。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

異文化を持つ人々と遭遇した際の感情が、否定や排除といった方向に向かうのではなく、コミュニケーションを図り他者を理解しようという方向に向かうことが重要であることへの理解を深めることができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

異文化を持つ外国人との接点が今後増えることは、先の話ではなく身近な話であることがより実感できるような内容を提示していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、講義と演習を半々ずつ程度で進めた。演習では、海外滞在経験者の話、グループディスカッション、ロールプレイ、ワークシート記入など様々な手法を用いた。また、最後の授業では、学生が今後経験するであろう薬局窓口での外国人対応を想定したロールプレイも行った。

2) 自己点検・評価

学生は、演習を通じて体験的感情的に学ぶことができた、演習の中では学生間で活発な意見交換がなされ、学生のより深い学びにつなげることができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義時間が少なかった分、学生の知的好奇心を高めることはあまりつながらなかった。今後は講義時間とのバランスを考えていく。また、演習では正解を導き出せないものも多々あり、学生がモヤモヤ感しか残らなかった恐れがある。今後はその趣旨をしっかりと説明していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回提出する課題レポート（50%）や振り返りシート（50%）の記載内容を基本に、その他授業態度などにより総合的に判断し手評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 95%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

毎回授業の終わりに提出する振り返りシートは、学生が授業内容を自分なりに咀嚼して考えることにつなげることができた。また、毎回翌週に提出する課題レポートは、学生自身が関心を持ったことについてより詳しく調べる自主学习につなげることができた。なお、履修登録したものの受講しなかった2名を除く合格率は100%だった

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業科目の達成目標の内容から、レポート等による評価が適していると考えている。なお、振り返りシートでは、分かったことだけではなく、考えたことや気づいたことも記入し、より深い学びにつなげていく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	文学B	第一学年
科目責任者(記載者)	柴田 尚子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

早急に解決できない問題に忍耐強く取り組むネガティブ・ケイパビリティという考え方を学習し、シェイクスピアの『リア王』とジョディ・ピコーの『わたしのなかのあなた』という全く違うジャンルの作品を通じて、正解のない答えについて考えてもらいました。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

正解のない問題に戸惑う学生もありますが、医療の現場では特に何が正しいのか、答えのない問題に耐える力が必要であるということを実感する学生も多くいました。『リア王』については老いるリア王と家族の問題、『わたしのなかのあなた』では、デザイナーベビー、患者のQOLや終末期医療、患者と家族等について考え、自分なりの答えを考えてもらうことが出来ました。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

さらに、関連した映像作品や他の文学作品などを提示できるようにしたいと思います。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

DVD視聴後、感想や意見、疑問点をまとめ、フィードバックをしながら解説し、問題を提起し、再度DVDを視聴し、問題点に注目し、考え、意見をまとめるという形で授業を行いました。

2) 自己点検・評価

一度DVDを視聴するだけでは分からない部分もあるので、解説をし、再度視聴することで理解が深められたと思います。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

シェイクスピア時代という古い作品と現代の作品と2作品を授業で取り上げましたが、古い作品にも興味、関心を持ってもらえてよかったと思います。他のシェイクスピア作品、また現代医療の作品も取り上げられればと思います。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業毎に問題や文学作品に関して意見や感想を提出。その後、フィードバックをし、補足説明を行いました。試験では授業で扱った問題のいくつかを取り上げ、エッセイを作成します。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 92%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

受講生全員が熱心に自分の考えをまとめられて良かったと思います。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

更に様々な作品を扱えればと考えています。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	経済学B	第一学年
科目責任者(記載者)	後藤 康夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

21世紀の世界市民という広い視野から、社会認識を深めるという目的からすれば、昨今の凄まじい世界と日本の動きがあるせいか、教員側が話をして働きかけをすれば、受講生の知的関心は、広く、深くなっていく可能性が極めて高い。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

但し、残念ながら、受講生がみずから新聞やテレビを通して世界の出来事を知ったり、友人と議論する機会は、絶対に減少している事態は、如何ともし難い。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

したがって、これまで通り、教員側が新聞や雑誌の記事を印刷、配布し、読み合わせをしていくことが必要。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

アクティヴ・ラーニング方式：①受講生を5人一組のグルーピング。②テキストや資料の読み合わせ。③まず、グループ内で討論し、意見をまとめる。④グループ代表者が教壇に立って説明し、質疑応答を行う。⑤最後に教員が取りまとめを行う。

2) 自己点検・評価

上記のアクティヴ・ラーニング方式は、受講生から、一方通行ではなく双方向で、“自分の意見が言える”、“活気がある”、とおおむね好評で、受講生の参加意識も高い。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

但し、グループ内で一言も発言できない、しない、受講生も少なからず存在している。こうした積極的な学生と消極的な学生との格差をどう埋めていくのか。これはグループ別の討論を行う際、避けがたいが、受講生の意見を聞きながら、試行錯誤を繰り返すしかない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は、レポート評価。課題は、“テキストと討論から、一番関心を持った問題について、自由に展開しなさい”。自由に展開できるので、知識や暗記ではなく、伸び伸びと書いていることが覗かれる。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

問題関心が鮮明で、論理が明快であれば、合格点をつけている。毎年、自信がないのか、受講していてもレポートを提出してこない学生が数名いる、

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

毎年、記述式レポートに慣れていないのか、問題の入り口で終始しているものがある。やはり、講義のどこかで、レポートの作成について、丁寧に説明する必要があると痛感している。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	社会学B	第一学年
科目責任者(記載者)	高橋 嘉代	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2024年度の社会学Bでは、「社会学の基礎理論と中心的な論者について知識を深める」こと、「健康／疾病と生活についての今日的な課題を理解する」こと、「生活者そして医療者として、社会学的な分析力および考察力を身に付ける」ことを目標としていた。期末試験の合格率高かったこと、そして合格者の中でも高得点者が大半を占めていたことという2点から、概ね目標は達成できたと思われる。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

社会学は一般的な受講生にとっては馴染みの薄い学問分野と思われる。そこで授業の内容に興味を持ってもらうことを目的としてイラストを多用した授業運営を行なった。しかし「教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した」という質問項目のポイントが低い。コメントペーパーで受講生の意見や質問を受け付けているが、現状とは異なった参加方式が必要と思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業における学生の発言や作業としては、その週の授業の内容に関するグループワークを取り入れることなどが改善方策として考えられる。また、ディスカッションを行った上でのコメントペーパーの作成、および発表なども有効な方策と考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教員作成の資料を教材として授業を実施した。授業の際には毎回10分程度の時間を設け、授業内容についての意見や質問、感想等を記述してもらっている。この10分間の時間を使って、前の週に提出された意見や質問等について記述者の氏名その他個人が特定される蓋然性のある情報は伏せた状態で一部情報を共有している。

2) 自己点検・評価

授業についての意見・質問等を記述してもらい、その内容を共有することについては、受講生からは自身の意見と違う意見に興味を抱いたという趣旨のコメントもあり、次年度以降も継続の予定である。もっと双方向的な授業を求める意見もあったことから、この点の改善が次年度以降の課題と認識している。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特定のテーマに沿った形で簡単な調査などをしてもらうことも考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は記述式の定期試験の成績による。定期試験では授業時の配布資料の限り持ち込み可能とした。試験問題は設問中の空欄に該当する語句を選択して記入してゆく設問、重要概念につき説明する設問、設問の内容に該当する概念を記述する設問、および複数のテーマから任意のひとつを選び論述する設問によって構成される。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

9割以上の得点率の合格者が多く合格率と合格者の得点率から鑑みる限り科目の目標は達成できたと認識している。しかし論述形式の設問の解答作成が不十分な受講生もあった。また、「任意の一つを選択すること」と明記してあるにもかかわらず、選択肢の全てを選ぶといった初歩的なミスも少数ながらあったことから、通常の授業時から設問の意図を捉え、自身の言葉でもってそれに回答する能力の向上につながる指導を行う所存である。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

毎回授業の都度、授業の内容についての意見・質問を10分程度の時間を設けて受講生に書いてもらっているが、グループワークを行いグループレポートという形で作業をしてもらうことなどを今後目指している。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歴史学B	第1学年
科目責任者(記載者)	柳田 春子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

安積疏水は、明治政府が大規模な東北地方開発政策を掲げるなかでこれをその中心に据え、国営事業第一号として総力をあげて完成させた一大土木遺産である。安積疏水の恵みは、農業用水のほか、発電、工業用水・飲料水など広範囲に及んでいる。
安積疏水が産業の近代化に果たした役割にスポットをあて、この時代の商工業の発達が、現在の郡山の町の姿の原型となっていることを理解できるようにする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

1 授業はよく準備がなされていた。2 授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。3 授業は理解しやすいように工夫されていた。4 教員の話し方は聴き取りやすかった。6 教員の授業に対する熱意を感じた。7 知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。8 教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。10 この関連分野に関心を持つことができた。以上の評価を得たので、以上の意見を踏まえ授業を進めたい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業の中で、学生の参加（発言・作業）をする時間を入れたい。授業終了後に、コメントシートを提出させているので疑問点や不明な部分を次の授業で回答をしていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業の中で、写真や地図などの資料も取り入れて、理解しやすい工夫をしている。また、世界史の要素も取り入れ大局的な視点で、日本の歴史を理解させる工夫をしている。

2) 自己点検・評価

授業の中で、写真や地図などの資料も取り入れて、理解しやすい工夫をしている。また、世界史の要素も取り入れ大局的な視点で、日本の歴史を理解させる工夫をしているので、学生にとって分かりやすい授業になっている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業の中で、学生の参加（発言・作業）をする時間を入れたい。授業終了後に、コメントシートを提出させているので疑問点や不明な部分を次の授業で回答をしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

①授業時の態度（観察による評価）：40% ②レポート：60%
提出されたレポートに関するコメントシートを配付する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業の中で、写真や地図などの資料も取り入れて、理解しやすい工夫をしている。また、世界史の要素も取り入れ大局的な視点で、日本の歴史を理解させる工夫をしているので、学生にとって分かりやすい授業になっている。今後は、授業の中で、学生の参加（発言・作業）をする時間を入れ、授業終了後に、コメントシートを提出させているので疑問点や不明な部分を次の授業で回答をしていく。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義終了後に、簡単な意見・感想を書かせているが、学生参加型作業なども取り入れていきたい。学生の歴史理解を深める工夫をしていきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英语 I a	第 1 学年
科目責任者(記載者)	柴田 尚子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

これまで習得した英語運用能力を向上させるとともに、医療・薬学に関する英文に触れ、実際の場面で必要な英語表現を習得することを目標にした上で、医学・薬学に関する英文の読解を中心に、リスニングや実践的な英語表現を中心に学習しました。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

初めて医学・薬学の英語に触れた学生にとっては難しく感じたと思いますが、前期期間中に行われた2回の小テストと前期試験の結果から、医療・薬学の英語に触れることである程度目標は到達されたと感じます。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

去年の改善点にあげたアクティビティについてですが、少人数だったこともあり、薬剤師と患者のロールプレイで英会話の練習をすることが出来たので良かったと思います。但し、英語が苦手な学生もいますので、丁寧な指導を心掛け、理解力を引き上げたいと思います。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書を中心とした訳読の授業。予習を前提とし、文章の解説、その後文章問題やリスニング問題を解答し、出席カードに解答を書かせ、提出し、その後解説を行いました。

2) 自己点検・評価

少人数ということもあり、発音やロールプレイで会話の練習をすることが出来た点は良かったです。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教科書が口語英語の文章だったので、文章体の英文の方が分かりやすいという意見がありました。昨年度まで文章体の英文を使った教科書を使っていましたが、医療知識必要になるものばかりなので難しいと思い、今年度からDVD付きの教材に変更しました。教科書選定については、今後の参考にしたいと思います。また、教科書内扱わなかった所は、自己学習できる学生には指示したいと思います。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

前期期間中2回の小テストを行いました。またほぼ毎授業で練習問題やリスニングに取り組み、解答を出席カードの裏に書き、提出してもらいました。前期試験では、2回の小テストを加えた学習範囲を中心に出题しました。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

薬学英语への関心が高い学生は積極的に小テストや試験で取り組んでいますが、英語を苦手としている学生は解答を覚えて対応するだけで精一杯となってしまいました。ただし、再試験では十分範囲を復習できたようでした。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

英語が苦手な学生でも、再試には試験の復習を行えたようでした。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英語 I b	第 1 学年
科目責任者(記載者)	柴田 尚子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学英語 I a で習得した知識をもとに、薬学英語 I b では主にさらに医療英語を中心に触れることができました。また、後期授業期間に行われた2回の小テストや後期試験で基本的な薬学英語に関する知識は習得できたと思います。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

医療に関する様々な英文を読み、その読解問題やリスニングを行いました。学生にとっては前期で医療英語に関する知識がある程度身に付いた上での訳読だったので、取り組みやすい内容であったと思われます。ただし、取り組み方は様々で、しっかりと予習して授業に取り組む学生とその場で翻訳機能を使って内容を確認する学生といますので、その取り組みの差がどのように試験に影響しているのか興味深いところではありました。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

英語が苦手で辛かったという意見がありました。翻訳機能のアプリに頼りすぎるのも問題ですが、辛いと思いつぎの学生がいるのならある程度アプリなどで対応するように指示する必要性もあるように感じました。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書を中心とした訳読の授業。予習を前提とし、文章の解説、その後文章問題やリスニング問題を解答し、出席カードに解答を書かせ、提出し、その後解説を行いました。

2) 自己点検・評価

英語を苦手としている学生にも理解できるように丁寧な指導を心掛けてはいますが、学生間で理解度の差は大きく、訂正すぎる説明は説明が過多と感じるようです。苦手な学生には授業内の説明を理解できるように予習・復習を促したいと思います。また、専門分野の授業で得た知識を薬学英語 II に活用するように呼びかけていますので、そちらの知識を英語に還元してもらえればと思います。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教科書のUnitを全て終えることが出来なかったため、終わらなかったUnitについては解答をWEBにアップして欲しいという意見がありました。今後検討していきたいと思います。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

後期期間中2回の小テストを行いました。またほぼ毎授業で練習問題やリスニングに取り組み、解答を出席カードの裏に書き、提出してもらいました。後期試験では、2回の小テストを加えた学習範囲を中心に出题しました。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率 (%) 86%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

英語への関心が高い学生は積極的に小テストや試験で取り組んでいます。英語を苦手としている学生は解答を覚えて対応するだけで精一杯となってしまっているように感じました。現在は様々な英語機能のあるアプリもあるので、そういった機器を使って授業内容を理解するように促したいと思います。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

英語が苦手な学生には、英語の様々なアプリなどを利用して、予習を徹底させ、英語の基礎力を培うように促したいと思います。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英語Ⅲ	第2学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および薬剤師としての実務において必要となる英語運用能力の基盤を確立するため、薬学に関連する平易な英文の正確な聞き取りおよび読解の能力を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：演習 100%
教科書の他に、各ユニットA4サイズ2枚のワークシートを配付。また、各ユニット終了毎に提出課題を課し（計8回）、採点して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価：中間・期末試験問題の類題を授業中に解かせた上で解説を行った。
総括的評価：提出課題の達成度 40%、中間試験 30%、定期試験 30%

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

履修放棄者2名を除いて評価の対象となった受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英語IV	第2学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および薬剤師としての実務において必要となる英語運用能力の基盤を確立するため、薬学に関連する平易な英文の正確な聞き取りおよび読解の能力を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：演習 100%
教科書の他に、各ユニットA4サイズ2枚のワークシートを配付。また、各ユニット終了毎に提出課題を課し（計8回）、採点して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価：中間・期末試験問題の類題を授業中に解かせた上で解説を行った。
総括的評価：提出課題の達成度 40%、中間試験 30%、定期試験 30%

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 88%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

履修放棄者4名、不合格者1名がいたものの、合格率は高く、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	実用英語 I (英語検定 I)	第第一学期
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

TOEIC Listening & Reading テストで450点レベルを目標とし、実用英語を聞く能力と読む能力を向上させることを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合: 演習 100%

Eラーニング教材を使用した授業で、TOEIC Listening & Reading テストの問題内容に準拠したレッスンに取り組む形式。レッスンの約半数を教室で、残りを自習で行うこととした。隔週でレッスンの進捗状況を個別に通知し、自習を促した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、教員の熱意や説明、質問への回答に関してややスコアが低かった。Eラーニング教材を使用した授業で、教員による講義や解説がないため、このような結果になったと考えられる。Eラーニング教材の利点である個別最適化学習の有効性について受講生への説明が十分でなかった。また、授業中に質問をしやすい環境が構築できなかった点も改善が必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

なぜEラーニング教材を使用するのかを受講生に折りに触れて説明する必要がある。また、より頻繁に机間巡視をするように心がけ、受講生が質問しやすい環境を構築する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

Eラーニングの進捗状況による評価: 60%、各授業回に実施した確認テストの成績: 40%
隔週でEラーニングの進捗状況を各受講者へ通知して形成的評価とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%) 100%

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価に関して特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	実用英語Ⅱ（英語検定Ⅱ）	第第一学期
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

TOEIC Listening & Reading テストで600点レベルを目標とし、実用英語を聞く能力と読む能力を向上させることを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：演習 100%

Eラーニング教材を使用した授業で、TOEIC Listening & Reading テストの問題内容に準拠したレッスンに取り組む形式。レッスンの約半数を教室で、残りを自習で行うこととした。隔週でレッスンの進捗状況を個別に通知し、自習を促した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、質問への回答に関してややスコアが低かった。授業中に質問しやすい環境が構築できなかったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

より頻繁に机間巡視をするように心がけ、受講生が質問しやすい環境を構築する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

Eラーニングの進捗状況による評価：60%、各授業回に実施した確認テストの成績：40%
隔週でEラーニングの進捗状況を各受講者へ通知して形成的評価とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	中国語 I	第一学年
科目責任者(記載者)	劉 芳	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

中国語 I はテキストのUNIT 1 ～UNIT 5 まで勉強しますが、主に中国語の発音「ピンイン」を学びます。授業中にテキストの内容を丁寧に説明した後、しっかり練習問題を解いてもらい理解度を把握します。このほか、実用性を重視し話せる中国語を目指しているため、漢方生薬名の中国語の読み方を取り入れたり、中国語で自己紹介ができるようになる練習もします。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

テキストの内容については目標を達成していると思います。それ以外、特に中国語で自己紹介の部分は少し課題があります。中国語の発音「ピンイン」は日本語の五十音のような存在で、このレベルで中国語の自己紹介を勉強することとは、ちょっと難しいではないかという声があります。一方、中国語で自己紹介が言える、中国語が話せると喜んで履修生もおります。賛否両論ですが、現在自己紹介を授業に取り入れております。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

自己紹介を取り入れた理由は実用性と興味を持たせるためであり、履修生に負担がならないように、自己紹介の例文をできるだけ簡単な文法にし、単語もできるだけ学んだものの中から選出します。また現在のレベルでは履修生が自分で自己紹介を書くのは難しいため、AI生成や翻訳アプリで作成した自己紹介文も認めます。ピンインを読めて正しい発音ができることを最終の目的とします。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

中国語 I の授業内において、講義と演習の割合がそれぞれ50%程度に占めていると思います。講義をする時はスクリーンに事前に作成した教案を映して説明します。演習の際はテキストの練習問題やプリントなどを用います。理解度を把握するために、例文や単語、練習問題などを名指しで全員に答えていただきます。何回も中国語で履修生のお名前を呼びますので、お名前の中国語の読み方を覚えてもらいます。学生同士に中国語での自己紹介を練習させて、みんなの前で発表する時間も設けます。

2) 自己点検・評価

スクリーンに教案を映しますが、鮮明に映せない時があります。また部屋を暗くする必要があるので、長時間だと眠くなる履修生もおります。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

できるだけ学習ポイントを大きく映るように字のサイズを調整しますが、どうしても難しい場合はプリントやe-Arningの教材倉庫を活用して、わかりやすい資料を履修生に届けたいです。また、講義の時間に練習問題や会話などの演習を挟み、スクリーンの長時間使用を避けます。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

中国語を勉強していく中で、基礎とするピンインの発音が極めて大切です。聞く能力に関してはテキストにある練習問題やリスニング問題などの正解率で評価しています。話す能力に関しては「自己紹介」の発表及び完成度で評価しています。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

講義に出席しなくなる履修生がいます。自分の講義が魅力的ではないことを表していると思います。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

初級のレベルにあった講義内容に調整し、だれでも気楽に学べる雰囲気を作りたいと思います。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	中国語Ⅱ	第第一学年
科目責任者(記載者)	劉 芳	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

中国語ⅡはテキストのUNIT6～UNIT10まで勉強しますが、主に簡単な文法と単語を学びます。授業中にテキストの内容を丁寧に説明した後、しっかり練習問題を解いてもらい理解度を把握します。また、実用性を重視し話せる中国語を目指しているため、漢方生薬名の中国語の読み方も取り入れたり、薬局で使える中国語の会話も取り入れたれたりしています。このほか、中国語検定HSK 1級の模擬試験も体験させます。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

テキストの内容については目標を達成していると思います。応用のために取り入れた「薬局で使える中国語の会話」においては、ジェネリック薬品の説明やお薬手帳や処方箋など少々難しい医療専門用語が含まれます。実際に履修生がピンインを見て漢字の発音ができても、長い文章になるとどこで切るのかわからなることが課題です。難しい部分を簡略し、自分なりの「薬局で使える中国語の会話」を作成することを求めました。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

最近、翻訳アプリや生成AIで提出物「薬局で使える中国語の会話」を作成する履修者が多いです。自分の力で中国語の文章を作るのはもちろん一番いいのですが、それができるまで興味を持ち続けることと、発音や文を真似して自分のものにすることがもっと大事だと考えてます。放課後も最新の技術を駆使して中国語に時間を使っていることを評価し、授業中にもそれらの良い点と悪い点をご紹介しますと思います。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

中国語Ⅱの授業内において、講義と演習の割合がそれぞれ50%程度に占めていると思います。講義をする時はスクリーンに事前に作成した教案を映して説明します。演習の際はテキストの練習問題やプリントなどを用います。理解度を把握するために、例文や単語、練習問題などを名指しで全員に答えていただきます。何回も中国語で履修生のお名前を呼びますので、お名前の中国語の読み方を覚えてもらいます。学生同士に「薬局で使える中国語の会話」を練習させて、みんなの前で発表する時間も設けます。

2) 自己点検・評価

スクリーンに教案を映しますが、鮮明に映せないときがあります。また部屋を暗くする必要があるので、長時間だと眠くなる履修生もおります。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

できるだけ学習ポイントを大きく映るように字のサイズを調整しますが、どうしても難しい場合はプリントやe-Arningの教材倉庫を活用して、わかりやすい資料を履修生に届けたいです。また、講義の時間に練習問題や会話などの演習を挟み、スクリーンの長時間使用を避けます。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

中国語を勉強していく中で、基礎とするピンインの発音が極めて大切です。聞く能力に関してはテキストにある練習問題や中国語検定HSK 1級模擬試験などの正解率で評価しています。話す能力に関しては「薬局で使える中国語の会話」の発表及び完成度で評価しています。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

講義に出席しなくなる履修生がいます。自分の講義が魅力的ではないことを表していると思います。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

初級のレベルにあった講義内容に調整し、だれでも気楽に学べる雰囲気を作りたいと思います。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	中国語Ⅲ	第一学年
科目責任者(記載者)	劉 芳	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

中国語ⅢはテキストのUNIT 11から最後まで勉強しますが、主に簡単な文法と単語を学びます。授業中にテキストの内容を丁寧に説明した後、しっかり練習問題を解いてもらい理解度を把握します。中国語Ⅱに続き「薬局で使える中国語の会話 漢方薬編」を取り入れています。このほか、中国語検定HSK 1級の模擬試験を実施し解説も丁寧に行います。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

テキストを全て勉強し終わった段階で、中国語検定HSK 1級試験をチャレンジできるレベルに達します。受講生に試験を慣れさせるために、中国語Ⅲでは模擬試験を2回行います。模擬試験実施後、どうしてこの問題を出したのか、なにを問う問題なのか、回答のコツなどを丁寧に説明します。一部のリスニング問題に出てくる会話は長くて、理解しづらいところが課題です。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

長い文章でも短い単語を組み合わせただけなので、単語一つ一つ聞き取れば、現段階ではほとんどの問題が解決できます。改善方法としては、授業中に履修生が中国語をしゃべる時間をもっと増やして、聞き取れる単語を増やしたいと考えます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

中国語Ⅲの授業内において、講義と演習の割合がそれぞれ50%程度に占めています。講義をする時はスクリーンに事前に作成した教案を映して説明します。演習の際はテキストの練習問題やプリントなどを用います。理解度を把握するために、例文や単語、練習問題などを名指しで全員に答えていただきます。何回も中国語で履修生のお名前を呼びますので、お名前の中国語の読み方を覚えてもらいます。学生同士に「薬局で使える中国語の会話 漢方薬編」を練習させて、みんなの前で発表する時間も設けます。

2) 自己点検・評価

スクリーンに教案を映しますが、鮮明に映せないときがあります。また部屋を暗くする必要があるため、長時間だと眠くなる履修生もおります。また、演習に使う時間を調整する必要があります。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

できるだけ学習ポイントを大きく映るように字のサイズを調整しますが、どうしても難しい場合はプリントやe-Arningの教材倉庫を活用して、わかりやすい資料を履修生に届けたいです。また、講義の時間に練習問題や会話などの演習を挟み、スクリーンの長時間使用を避けます。このほか、演習の割合は60%まで調整したいと思います。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

中国語を勉強していく中で、基礎とするピンインの発音が極めて大切です。聞く能力に関してはテキストにある練習問題や中国語検定HSK 1級模擬試験などの正解率で評価しています。話す能力に関しては「薬局で使える中国語の会話 漢方薬編」の発表及び完成度で評価しています。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%) 85%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

講義に出席しなくなる履修生がいます。自分の講義が魅力的ではないことを表していると思います。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

初級のレベルにあった講義内容に調整し、だれでも気楽に学べる雰囲気を作りたいと思います。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	体育 A	第 1 学年
科目責任者(記載者)	二瓶 美智子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目の到達目標は、楽しく体を動かすことで心身の健康維持・増進に繋げることであった。履修者の個々の状態を把握し、より到達目標の達成に近づけるため、事前調査（運動経験・科目選択の動機・運動への不安感・病歴や常備薬など）を行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

事前調査を行い個々の状況を把握することで、身体を動かすことを不得意とする学生にとっては授業を通じて体を動かすことの楽しさを伝えることが可能となった。得意とする学生は、今までの経験と知識が更に深まったと考える。また、得意・不得意に関係なく学生の架け橋を作ることが可能となった。このことから、学生同士の良好な関係をつくりながら、体を動かすことの楽しさを体得することができたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

身体を動かすことの楽しさを体得することは可能となったが、心身の健康維持・増進のための身体活動の重要性を理解するには不十分であったと考える。今後は資料配布などの方法を用いて、より重要性を理解してもらえるような講義展開を検討していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実技 9 割、講義 1 割で授業を実施した。実技授業においては個々のトレーニング、ペアを組んで実践するトレーニングを組み合わせて実施した。講義は健康維持・増進のために必要な運動種目や運動量、さらに運動に関連して栄養や休養の重要性について授業を行った。

2) 自己点検・評価

講義では今まで漠然と得ていた知識がより深まったと感じる。実技においては、自己の運動能力を理解することで、適切な運動量を設定しながら楽しむことができたと感じる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今年度は特に、身体を動かすことの楽しさは十分に伝わったと感じる。今後は、授業を通じて得た知識を日常生活に取り入れる工夫などを具体例を用いて説明していく機会を増やしていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は100点満点とし、出席状況（45%）、授業態度（10%）、レポート課題（45%）にて評価している。これらを総合的に評価し、65点以上を合格とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業態度（10%）は、積極性・協調性について、授業内の活動状況を科目責任者が評価している。レポート課題（45%）は、各回の授業で行った実技の理解力を確認するため、科目責任者が設問形式の課題を作成し模範解答と照らし合わせて採点を行い評価した。レポート課題の評価を実施することで、実技授業の得手不得手の壁を取り除いた評価が可能になったと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本成績評価において体育の得手不得手に関係なく、学業に対する姿勢が平等に評価することが可能であったと考える。本年度の評価方法に大きな問題点はないと考えるが、技能の習熟度に関する評価項目を増やし、より詳細に評価することも今後の検討事項である。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	体育B	第第一学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

健康の保持増進と体力の向上、身体活動を通しての自己形成を目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実技：100%
スキー場で3日間の実技演習を行う。実技指導はスキー場所所属のインストラクターが行い、教員がプログラムの管理と受講態度の確認を行う。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価において低いスコアは見られず、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

総括的評価：受講態度 100%
形成的評価は行っていない。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	リメディアル英語	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

学部での英語学修が円滑に進むよう、英語運用能力を支える基礎的な聞く能力と文法知識を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：演習 100%

Eラーニング教材を使用した授業で、初回授業時に実施したレベル確認テストの結果に基づいて個別に選定されたレッスン内容に取り組む形式。レッスンの約半数を教室で、残りを自習で行うこととした。隔週でレッスンの進捗状況を個別に通知し、自習を促した。

2) 自己点検・評価

受講者の出席率も問題なく、Eラーニングの利点である個別最適化学習が実施できている。授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価アンケート結果は3.0～3.5と比較的低かったが、回答者数が4名であったことと、すべての質問項目で全員が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「普通」のいずれかを回答しており、「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」という回答はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はないと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

Eラーニングの進捗状況による評価：100%

隔週でEラーニングの進捗状況を各受講者へ通知して形成的評価とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 82%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

履修を放棄した2名以外は受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	数学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学を学ぶ上で基礎となる数学に関する基本的な知識を習得し、それらを薬学領域で応用できる力を身に付ける。物事の現象を数学的に考えられるようになる。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

薬学教育に必要な数学を演習問題を用いて解説しながら講義を進め、理解度のチェックとして宿題を課した。学生の本試験の平均点が66.7点であり、本科目の不合格者が6名いたが、概ね科目の到達目標を達成した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの講義に対する不満は特にないことから、今年度も引き続き同様とする。クラス分けに関しては、入学者の実力によるが、Aクラスの人数よりBクラスを多くする予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

小テストまでは行っていないが、演習問題を学生に解かすことで学生の理解力を計った。その際、学生の解答の進捗具合を確認した。これは成績には反映させていない。さらに、宿題を課し、学生の理解力を把握した。講義80%、演習20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が66.7であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 87%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

本試験の平均点が66.7点であり、本科目の不合格者が6名いたが、概ね科目の到達目標を達成した。学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。昨年度より平均点が下がったが、最終的なDは2名であることから特に問題ないと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。クラス分けに関しては、手厚く指導することを考え、Aクラスの人数を減らすこととする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

今後の大学での化学系の専門科目を無理なく履修できる基本的事項、つまり、酸・塩基、酸化還元反応、原子や分子の構造、有機化合物の性質、さらに有機化学反応などについて身につけることを目的としている。高等学校において『化学』を履修していない学生も一定数いることを踏まえ、第一学年後期の化学Ⅱ、さらにその先にある有機化学Ⅰ～Ⅴへ続くことを考慮して目標設定している。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、100%の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答した。さらに、定期試験の平均得点率は80%以上であったことから、1年生前期の段階での目標は概ね達成できたと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本科目においては、再試験の対象となった学生は1名もおらず、本試験のみで全員が合格した。学生からのコメントの中にはより発展的な内容を求めるものがあつたので、次年度以降検討したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

指定の教科書は細部にわたり丁寧な説明が記載されているため、重点をまとめた授業資料（対応する教科書のページを記載）を作成し、可能な限り実験を見せ、なるべく専門用語は使わず説明した。授業資料には練習問題も記載し、授業最後の10分間は確認問題を解いて演習し、正答率の低い問題については次回の授業の冒頭で説明を加えた。

2) 自己点検・評価

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、100%の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答した。また、学生からは2名の教員による熱心な授業であった旨のコメントを頂いた。基本事項を丁寧に説明するスタンスは変えずに、次年度以降も授業に取り組みたい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

『教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した。』という項目で、6.3%の学生がどちらかと言えばそう思わないと回答したので、次年度は授業中に学生に発言させるあるいは作業をさせる機会を増やして行きたいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回の授業での課題への取り組み（20%）と定期試験（80%）を総合的に判断した。本科目は前期1と2に亘るため、途中で中間試験を実施し、そちらも定期試験としてカウントしている。また、課題への取り組みについては、毎回の確認問題に対する回答で評価した。確認問題を解いて、次回の授業で添削結果の返却を受けることで、毎回の授業の理解度を各自が把握できるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験（中間試験を含む）の平均点正答率は80%以上であり、約4割の学生が90%以上の正答率であったことから、多くの学生は基本事項がしっかりと身についたと考えている。さらに、本試験で全学生が合格したことから、次年度も同様に授業を展開したいと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2名の教員で実施している科目であり、授業回数に応じた得点の分配で出題しているが、それぞれの教員の試験の得点率に大きな開きはない。また、『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』という項目では、約8割の学生がそう思うと回答していることから、次年度以降も同様の方法で分担して試験を作成して実施する予定である。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	西村 良夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に対して十分に網羅しつつ、講義時間内に消化することができた。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

履修者のうち、出席不足による試験資格喪失者が数名いたが、最終的には定期試験を受けた19名全員が本科目に合格することができたため、到達目標を概ね達成できたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。」の項目は全員が評点4.0以上の（どちらかといえば）そう思う、にチェックしていた。アンケートの結果から否定的な記述はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容をまとめ、演習問題を付けた資料を配信して授業を進めた。時間配分として、講義が80%程度、演習問題を解説する時間を20%程度割り当てた。質問について、授業後の教室、教員の居室やメールでいつでも受け付けるように伝え、学生が質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。

2) 自己点検・評価

「授業は理解しやすいように工夫されていた。」「教員の話し方は聴き取りやすかった。」「教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。」の3項目は85%以上の学生が評点4.0以上の（どちらかといえば）そう思う、にチェックしていた。3項目は全体平均の評価を上回っており、またアンケートの結果から否定的な記述はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

総括的評価として、定期試験100%で評価した。演習問題を毎回の資料に付け、また解答・解説を書き込んだ資料を作成して配信することで、学生が自身の講義内容の理解度を確認できるようにした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率から見て、特筆すべき問題点はない。定期試験の平均点が72点であり、高得点者（90点以上）が25%程度おり、難易度としては適切なものと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学 I b	第 1 学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命の基本単位である細胞の特徴や、生命活動の中心となるタンパク質の構造と多様な機能について理解することを通じて、今後履修する薬学の専門科目の学修を支える基礎的知識を身につけることを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と講義内容は整合していた。定期試験には20名が受験し、9名が再試験を受験した。その結果、2名が不合格となったが、教育目標は概ね達成されたと判断できる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「配布資料の分かりやすさ」や「理解の深化」に関しては高い評価が得られたが、「効果的な学生の参加促進」に関しては全体平均を下回った。講義形態が一方的になっている点が課題であり、今後は学生の主体的な参加を促す工夫を取り入れ、改善に努める必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

1年次配当の本講義は、薬学専門科目の学修基盤を形成する重要な科目である。そのため、高校生物の教科書やドリルからの抜粋を課題として取り入れるのみならず、得られた知識が今後どの分野に応用され、どのように発展していくかを意識させつつ講義を展開した。配布資料には確認問題を設け、学習の定着を促進した。また、確認問題に関する質問は随時受け付け、不明点については学生が十分に理解できるまで丁寧に再解説を行った。

2) 自己点検・評価

授業評価の結果を踏まえ、今後は学生の主体的な学習を促すアクティブラーニング型の講義を実現できるよう、改善と工夫に努めていく所存である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価の高い先生方に、FD等の機会を通じて講義の工夫や実践内容をご教示いただきたい。その知見を踏まえ、採用可能な方法については積極的に導入し、授業改善に努めていく所存である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は試験結果のみに基づいて実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

本講義は1年生前期に配当され、以後の専門科目の学修基盤を形成する重要な科目である。そのため、事前に出題範囲を周知したうえで、あえて難易度の高い試験を課している。これは大学の試験の水準を学生に認識させ、学習習慣の確立を促すことを目的としている。授業評価もおおむね良好であり、今後は改善点を適宜見直しつつ、継続して実施していきたい。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後は、各講義で課しているレポートを成績評価の一部として取り入れ、学習過程におけるレポートの重要性を学生に十分認識させたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	フレッシュマンセミナー	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学の規則や6年間の学習の内容、卒業後の進路の選択肢を知ること、および効果的な学習の進め方、適切な学習計画と生活環境の作り方、教員や友人とのコミュニケーションの取り方について学ぶことを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：講義 20%、演習（SGD、グループワークを含む）80%
用いた資料：教科書無し、自作プリントを配付、一部の授業で映像資料を使用
双方向性確保の方策：グループによる活動を多く取り入れ、学生間の円滑な関係構築を図った。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であったことから、現在の授業方法を大きく変更する必要はない。ただし、授業日程をより早期に開示してほしいとの要望があったので、次年度は対応したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価の方法：形成的評価は行わなかった。
総括的評価の方法：授業時の活動（リアクションフォームへの記入・ディスカッションでの発言や質問）80%、
提出課題 20%

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語表現 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学の学びおよび卒業後の薬剤師実務において必要となる表現能力の基盤を確立するため、基礎的表現技能を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：講義 50%、演習 50%。
原則として毎時間課題の提出を求めた。課題は添削して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なかった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であった。授業中に口頭で説明した内容を板書やプリントで提供した方が良いとの意見があったが、口頭での説明を聞き取って自らの言葉で書記することも重要な言語運用能力であるとの認識で行なっていることなので、その点を受講者に明確に説明する必要があった。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

講義・演習等の割合：講義 50%、演習 50%。
原則として毎時間課題の提出を求めた。課題は添削して返却した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語表現Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学の学びおよび卒業後の薬剤師実務において必要となる論理的思考・表現能力の基盤を確立するため、コミュニケーション能力を高めるとともに論証の方法を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：講義 50%、演習 50%。
原則として毎時間課題の提出を求めた。課題は添削して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

課題は模範解答を付けて返却し、形成的評価とした。
授業内活動での態度20%、提出課題80%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	心理学	第1学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として支援に携わる前段階として、人間の心の動き、グループダイナミクスなどのメカニズム等に関わる知識を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

シラバスにそって授業を進め、心理学の基本的知識について触れることができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

新カリキュラムになり必修科目となったため、引き続き薬剤師にとっての心理学の必要性や、心理学的知識が実践場でどのように役立つのかを紹介しながら授業を進めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。興味を持ちやすいように、錯視体験などの視聴覚資料を取り入れた。

2) 自己点検・評価

教員が作成した資料のみだったため、参考文献などの紹介もしてほしいとの意見があった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学習内容を網羅しているテキストでちょうどよい難易度のものがないことから資料作成をしていたが、いくつかの文献をあたって内容を確認したい学生のために、テキストを紹介するようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

合格率から見て大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療コミュニケーション論	第2学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療現場のコミュニケーションで生じる様々な問題について考え、洞察を深め、医療コミュニケーションの素養を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

コアカリキュラムの内容に沿い、医療コミュニケーション場面における基本的知識を取り扱った。一方、2年次学生の受講であったことから、レポートなどで取り上げられる場面のイメージが想像が難しい学生もいるように見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

カリキュラム変更により、次回からは4年次学生が受講することとなる。「臨床コミュニケーション演習」で扱うコミュニケーションの基本的スキルをベースとして、医療コミュニケーションについて学べるように両科目のシームレス化を図る。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。最終回は事例を取り上げてグループワークを行った。途中、理解度の確認と、自身の考えたことを言葉にする練習として講義内でレポートを実施した。

2) 自己点検・評価

グループワークでは、課題について熱心に話し合うグループ、話し合いをうまく進められないグループ、課題の内容から脱線しているグループなど、グループ間で態度に差が見られた。学生からは、グループ内に授業に関係のないことをしている学生がおり、話し合いに集中できなかったという意見があった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

どの学生もグループワークを通して課題について考えることができるように、課題について話し合うための方向性を示す、いくつか小問を設定するなど学生が課題について考えるプロセスをより明確にする。また、レポートについては呈示した課題についてどのような内容を答えればいいのかわからないという意見もあったため、講義との関連をより意識して内容を検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験70%、講義内の小レポート30%とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 98%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率から見て大きな問題はないと思われるが、レポートの質は学生によってばらつきが見られた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床コミュニケーション演習	第3学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として様々な人に寄り添い対応するために必要なスキルを習得し、自分自身のコミュニケーションの傾向について洞察を深める。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

ロールプレイを取り入れたり、患者が医療従事者に対して抱くコミュニケーションの不满に関する動画を用いたりして医療場面におけるコミュニケーションの重要性を伝えられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

明確な「正解」がない分野であるため、学生の中には苦手意識を持つ者もいたようだった。この科目を糧に今後の患者対応や多職種連携を学んでもらえるよう、苦手な学生に向けてのフォローアップも取り入れていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。講義の最後に、出席確認もかねてその回のテーマに関連した小テストを選択肢式で実施し、誤答率が高い問題については次回の講義開始時に解説を行った。途中、理解度の確認と、自身の考えたことを言葉にする練習として講義内でレポートを実施した。レポートの解答例について、考える際のポイント等を提出した次の回の最初に解説した。

2) 自己点検・評価

共感や傾聴など、コミュニケーションのスキルを理論的に教えることには限界があるものの、なるべく具体的にポイントを伝えられるようにした。事例に関するレポートも、グループワークが進めやすいように小問を設定し、グループ間で差が出ないようにした。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

グループワークやレポートの難易度について大きな問題は見られなかった。コミュニケーションに関する動画が薬剤師の業務に関わるものが使えると学生もよりイメージしやすいと考えられるため、検討していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験70%、講義内の小レポート30%とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率から見て大きな問題はないと思われるが、レポートの質は学生によってばらつきが見られた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機能形態学 A	第 1 学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの体の成り立ちを個体、器官、細胞レベルで理解するために、その構造と機能に関する基本的な知識を修得することが一般目標である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

最終的に全員合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

“学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられるが、引き続き興味を引くような講義を行うよう、努めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書として「機能形態学改訂第4版」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨症的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、高評価であった。授業は最低限の理解をできるように確認し、発展的な内容についてもわかりやすく、非常に勉強になったという意見があった。したがって、現在の授業形式を継続し、必要に応じてアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に全員合格しており、問題点はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないと考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機能形態学B	第1学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの体の成り立ちを個体、器官、細胞レベルで理解するために、その構造と機能に関する基本的な知識を修得することが一般目標である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

最終的に全員合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられるが、引き続き興味を引くような講義を行うよう、努めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書として「機能形態学改訂第4版」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨症的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、高評価であった。授業はわかりやすく興味を持てるとの意見があった。したがって、現在の授業形式を継続し、必要に応じてアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に全員合格しており、問題点はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないとする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機能形態学C	第2学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの体の成り立ちを個体、器官、細胞レベルで理解するために、その構造と機能に関する基本的な知識を修得することが一般目標である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

最終的に95%の学生が合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による評価は概ね全体平均と同等であったが、資料が膨大であるとの意見があり、資料の選別が必要と考えられた。学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、引き続き興味を引くような講義を行うよう、努めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書として「機能形態学改訂第4版」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨症的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による評価項目は概ね良好であった。授業はわかりやすく興味を持てるとの意見がある一方、資料が膨大であるとの意見もあった。したがって、現在の授業形式を継続し、授業資料などをアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に95%の学生がしており、問題点はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないとする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学	第2学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体の成り立ちを個体、器官、細胞の各レベルで理解できるように、人体の構造、機能、調節に関する基本的事項を習得することを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

最終的に全員が合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと思う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書として「イラストで学ぶ解剖学」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨床的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、高評価であった。理解しやすく、人体の構造や仕組みを再確認することができたという意見がある一方、動画の視聴は必要ないという意見があった。したがって、現在の授業形式を継続しつつ、演習問題に取り組むなどの時間も設定したいと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に受験資格のあるもの全員が合格しており、問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないと思う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	微生物学	第2学年
科目責任者(記載者)	三宅 正紀	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

微生物の分類や基本構造を学び、細菌、真菌、原虫、ウイルスの違いや基本的性状、さらには感染症の原因微生物の病原因子・病原性発現機構や感染症の病態について理解することを一般目標として、10項目の到達目標を設定している。全12回の講義において、特に国家試験での出題頻度が高い部分には時間を割いて丁寧な説明を施し、全ての到達目標の内容をカバーしている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験の結果から、およそ達成していると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

達成されていない到達目標はなく、授業評価の結果からも、特に改善する必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行った。指定の教科書に沿って毎回の講義範囲を要約したオリジナルのパワーポイントスライドを用いて講義を行った。このスライドには微生物や感染症の病態の貴重な画像・動画を多く用いることにより、視覚的なインパクトからも、学生の本科目への興味を促すよう工夫した。本講義資料は、毎授業前日までにc-leArningにアップし、予習・復習に利用できるように配慮している。

2) 自己点検・評価

これまでの講義方法で特に問題はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本来、双方向性の講義が理想と考えているが、これまで設定されている講義時間では困難であったが、新カリキュラムでは時間的に余裕ができることが判明したので、少しずつ導入したい。講義内容に関連した演習問題を取り扱ってほしいとの要望については、実質、別科目の薬学演習で対応しているが、本科目内においても一部の講義回では、最後に宿題として演習問題を課し、次回講義最初の小時間枠で解説講義の実施を開始している。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的な評価は行っていないが、毎回講義の冒頭に前回講義の内容を要約し、また、一部講義回では演習問題を課題として提示し、次回講義の冒頭で解説講義を行うなど、要所にて学生が内容の確実な理解が出来るように工夫した。総括的評価は、定期試験（100%）にて行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 95%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

54名が受講し、定期試験本試験において22名が単位取得基準に到達した。残る32名のうち、22名が再試験により、7名が再々試験により単位を取得した。不合格となった3名中、1名は再試験にて、無断での試験の不受験によるものであった。その上での上記合格率であり、評価に特に問題はなかったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も今年度と同様な方法で評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	細胞生物学	第3学年
科目責任者(記載者)	古泉 博之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

細胞を生命の最小単位として捉え、その正常な構造と機能を分子レベルで解明し、その成果をもとに生物（単細胞生物や多細胞生物）の生命現象を理解することにより、医療従事者として、新しい医療につながる科学と技術の進歩に対し適応していくために必要な知識を習得する。この目標に沿って授業を行っている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験は半数以上の学生が良い成績で合格していたので、概ね到達目標を到達できたと考えられる。一方で合格点すれすれの学生も25%もいたので、その点はもう少し授業をわかりやすくするべきであったと思う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

一方で一部の学生の興味、関心を引き出せていないように感じるので、本科目が薬の作用機序を考える上で、どのように関係してくるのかをうまく話し、学生の興味、関心を引き出したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行う。資料は教科書の内容に、補足が必要なもののみ準備した。また授業終了後の質問、教員室への質問に来た学生には丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

比較的理解しやすい教科書をベースに授業を行っており、質問に来るような学生は、授業の復習の際、教科書を読み、よく理解もしているため、一定の教育はできていると思う。ただし、一部の学生の興味、関心が引き出せておらず、教科書を読まず、試験での成績も非常に良くない学生がいるので、そのような学生も興味を持つような教育も必要である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本年よりスライドを用いた教科書の図などの説明に切り替えており、教科書の図などから何を読み取るか教えている良かったという意見もある一方で、授業が理解しづらい、重要な箇所がわかりにくい、関心を持てなかったという評価が10%ほどあったので、授業のレジメにより授業の復習、試験勉強がしやすいようにするといった改善をさらに行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の成績（100%）で評価している。現状、小テストなどのような形成的評価を行っていない。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、特に問題ないと考えている。選択問題だけでなく、記述問題を出すことにより、理解しているかどうかを確かめることもできている。授業中に示した国試過去問、練習問題などの改変問題も出しており、授業をしっかりとして復習していれば十分合格できる試験である。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

どのくらいの学生が教科書を読んでいないのかというのを把握するためにも、教科書の図を用いたような問題を今後も出し続けることが必要である。授業中にも、この図を用いた問題を出しますなどと言うことにより、より教科書に取り組む学生が増えるのではと思っている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	分子生物学	第3学年
科目責任者(記載者)	古泉 博之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生物が遺伝情報に従って生命維持に必要な遺伝子産物（タンパク質）を産生する仕組みと、それぞれの遺伝子産物が協調的に働くことによって生命維持が行われる仕組みを理解することにより、医療従事者として、新しい医療につながる科学と技術の進歩に適応していくために必要な知識を習得する。この目標に沿って授業を行っている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験は半数の学生が良い成績で合格していたので、概ね到達目標を到達できたと考えられる。一方で合格点すれの学生が45%もいたので、その点はもう少し授業をわかりやすく、取り組みやすくするべきであったと思う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

一部の学生の興味、関心を引き出せていないように感じるので、本科目の発展が、遺伝子組み換え技術などを発展させ、画期的なバイオ医薬品の誕生、ワクチン開発、遺伝子治療の開発につながっていることをうまく話し、学生の興味、関心を引き出したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行う。本年より、スライド資料を用いて、教科書や参考書の図を載せ、説明を行った。また適宜、国試過去問や練習問題をスライドで提示し、その場で考えさせることにより、授業理解の確認を行った。また授業終了後の質問、教員室への質問に来た学生には丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

比較的理解しやすい教科書をベースに授業を行っており、質問に来るような学生は、授業の復習の際、教科書を読み、よく理解もしている、一定の教育はできていると思う。ただし、一部の学生の興味、関心が引き出せておらず、明らかに教科書を読んでおらず、試験成績も非常に良くない学生がいるので、そのような学生も興味を持つような教育が必要である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本年よりスライドを用いた教科書の図などの説明に切り替えており、今後も復習がしやすいようにするといった改善を行っていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の成績（100%）で評価している。現状、小テストなどのような形成的評価を行っていない。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、特に問題ないと考えている。選択問題だけでなく、記述問題を出すことにより、理解しているかどうかを確かめることもできている。授業中に示した国試過去問、練習問題などの改変問題も出しており、授業をしっかりとして復習していれば十分合格できる試験である。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

どのくらいの学生が教科書を読んでないのかというのを把握するためにも、教科書の図を用いたような問題を今後もし続けることが必要である。授業中にも、この図を用いた問題を出しますなどと言うことにより、より教科書に取り組む学生が増えるのではと思っている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物系実習Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	三宅 正紀	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生化学・免疫学・微生物学および関連科目で学んだ生体構成成分の構造・機能・代謝等の生命原理・理論および微生物の性状について、実習・実験を通して理解を深める。特にタンパク質と核酸の生化学的・免疫学的手法による分離、定性、定量法ならびに微生物の分離・培養法、観察法、同定法等の基本操作と技術を習得し、さらに、得られた定性・定量データの解析・処理法や微生物の殺菌・消毒法、抗菌薬の力価測定法について学ぶ。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

実習中の態度および実習レポートから総合的に評価し、全員が合格していることから、目標は十分達成していると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

達成されていない到達目標はなく、学生による授業評価の結果からも、特に改善する必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

担当教員が作製した実習テキストおよびスライドを用いて、日毎に行う実験に関する原理・方法・手順等について講義を行った上で、個々に、またはペアで、または3～4人のグループ単位で、実際の実験に取り組んでもらった。口頭での説明のみではわかりにくい実験操作は、デモンストレーションを行って見せることで、操作のコツを含めた技術の習得を促した。

2) 自己点検・評価

これまでの講義方法で特に問題はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価ではほとんどの項目で全体平均レベルの評価を受け、大きな改善が必要な項目はないため、今後も同様な方法で取り組んでいきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習への取り組み姿勢（30%）、実習レポート（70%）で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価方法に問題はないと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価方法に特段の指摘もなく、次年度も今年度と同様な方法で評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	金原 淳	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品類の化学的性質を理解する基礎を養うために、有機ハロゲン化合物、アルケン、アルキン、芳香族化合物の物性および反応性（脱離反応、付加反応、芳香族求電子置換反応）を理解することを目的としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験では、多くの受講者は試験に合格しており、その答案の内容から概ね目標は達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の合格率やアンケートの結果から、教育達成目標についての問題点はないと判断する。2025年度は当該科目の担当者が変更になる予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業内容は授業が85%、演習が15%程度であった。教科書は「ソロモンの新有機化学Ⅰ」を使い、授業では本書に沿った内容をプロジェクターで映写し説明する形式で行った。映写した内容をc-leArning上に、pptx及びpdf形式のファイルで公開した。2分間に一回程度の割合で、補足内容を視写させた。配布資料には演習問題と解答を付け加えた。到達目標や重要項目を明確にした資料の作成を心掛けた。

2) 自己点検・評価

アンケートの結果から、方法に大きな問題はないと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2024度では、前年度と比較して授業の終盤で、配布したプリントの演習問題の解答を任意の学生に答えてもらう機会を設けられた。2025年度は当該科目の担当者が変更になる予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

詳細な形式的評価は行わなかったが、配布したプリントの演習問題を用いて学生の理解度を確認した。全体的な理解度が低いと判断した時には、次回の授業の序盤で前回の内容を要約して再度説明を加えた。総括的評価は定期試験および出席数により評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率および試験の解答内容を鑑み、評価方法に大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2024年度は、授業内容の量と授業時間の兼ね合いから、形式的評価を行えなかった。2025年度は当該科目の担当者が変更になる予定である。来年度に担当する教科で、教訓を生かす。具体的には、授業の2回に1回は小テストを実施する。また、そうなるよう、授業内容を説明するペースを事前に考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学Ⅲ	第2学年
科目責任者(記載者)	西村 良夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に対して十分に網羅しつつ、講義時間内に消化することができた。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

履修者のうち、再試験を欠席した学生がいた（退学を決めていたため）が、最終的には定期試験と追再試験を受けた51名全員が本科目に合格することができたため、到達目標を概ね達成できたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。」の項目は80%程度の回答者が評点4.0以上の（どちらかといえば）そう思う、にチェックしていた。アンケートの結果から到達目標に関する否定的な記述はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容をまとめ、演習問題を付けた資料を配信して授業を進めた。時間配分として、講義が80%程度、演習問題を解説する時間を20%程度割り当てた。質問について、授業後の教室、教員の居室やメールでいつでも受け付けるように伝え、学生が質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。

2) 自己点検・評価

「授業は理解しやすいように工夫されていた。」「教員の話し方は聴き取りやすかった。」「教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。」の3項目は70%程度の学生が評点4.0以上の（どちらかといえば）そう思う、にチェックしていた。3項目はの科目平均は4.0以上であり、またアンケートの結果から否定的な記述はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

総括的評価として、定期試験100%で評価した。演習問題を毎回の資料に付け、また解答・解説を書き込んだ資料を作成して配信することで、学生が自身の講義内容の理解度を確認できるようにした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率から見て、特筆すべき問題点はない。ただ、定期試験の平均点が61点であり、高得点者（90点以上）が18%程度で再試験対象者（65点未満）が半数以上だった。難易度としては、やや高かったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アンケートには「難しかった」という記述が1件あった。授業は週に2回行われたため進行が早く、また内容も多いため十分に消化できなかった学生がいたように思われる。次年度は、カリキュラムが編成されて授業は週に1回のペースで実施されるので、上記の状況は改善されると考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学Ⅳ	第3学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

これまで学習してきた有機化学の知識に加え、複数の官能基をもつ有機化合物の命名法、基本的な有機反応の一つである転位反応、官能基の性質や反応性について、また、生薬・天然物化学での生合成に関わる反応についても修得する。さらに、医薬品の定性分析や薬物代謝反応を有機化学的視点から捉えることを目的とする。これらの有機化学的な見方は、医薬品分析の理解に留まらず、薬物の生体内反応の理解に深く関わる。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目で、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は80%以上であった。さらに、定期試験の平均得点率は80%以上であり、再試験対象者は1割程度であったことから目標は概ね達成できたものと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

『授業はシラバスにそって、系統だって行われた。』という項目に約85%の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答しており、2名の教員で分担して到達目標に向かって系統だった授業が実施できたと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

指定の教科書に記載が少ない分野もあるため毎回授業資料を作成し、大事な反応機構は板書して説明している。また、授業の最後の10分は確認課題を解く復習の時間としている。さらに、全12回のうち半分の授業が終了した時点でレポートを課し、各自が反応の理解を深めるようにしている。

2) 自己点検・評価

有機化学Ⅳでは、単に反応機構を説明するだけでなく、医薬品合成の基礎や定性分析について有機化学の視点で解説している。『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目に約8割の学生がそう思うと回答しており、こちらの意図は伝わっていると判断している。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目で、4.2%の学生がどちらかと言えばそう思わないと回答した。次年度以降、授業では、特に医薬品化学と有機化学との関わりについて丁寧に説明して行きたいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回の授業での確認問題への取り組みおよび中間演習レポート（20%）と定期試験（80%）を総合的に判断して評価した。授業での確認問題は毎回添削して返却し正答率の低い問題は詳しく解説している。また、中間演習のレポートについては添削して最後の授業までに返却しており、各自が理解度を把握できるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

有機化学Ⅳは、有機化学Ⅰ～Ⅲまでの内容が含まれており、さらに新たな項目が加わるため知識の積み重ねが重要である。『教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。』の項目では約3分の2の学生がそう思うと回答している。また、4名の再試験対象者の内、不合格となった学生は半数であった。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2名の教員で授業回数に応じた得点の割合で出題しているが、平均得点率に大きな差はないので今後も同様の分担で考えている。再試験前に対象者と面談し、学習方法について共に考えたこともあったか、最終的に不合格となった学生は少数であった。学生との面談では学生が難しいと感じる部分が明確になったので、今後も面談を継続し授業に役立てたいと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学演習	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

化学Ⅰ、Ⅱ、有機化学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで学習した有機反応について、カーブした矢印での反応機構の表記、有機化合物の基本骨格となる脂肪族および芳香族化合物の基本的な反応性、さらに立体化学を理解するための様々な投影法での有機化合物の表示の修得を目標とする。これらの修得により、医薬品を含む有機化合物の反応性についての基礎を身につけ、有機化学Ⅳさらに医薬品化学Ⅰ、Ⅱを理解するための基礎を養う。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

2名の教員による授業であったが、『授業はシラバスに沿って、系統だって行われた』という項目で、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は80%以上であった。再試験の対象となった学生もいたが、最終的には全学生が合格した。さらに、学生から『有機化学の電子移動や用語について、再確認することができました。』とのコメントがあったことから、目標は達成されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験では平均得点率が73%で得点率が90%以上の学生は約25%であった。その一方で約25%の学生が再試験の対象となったが、最終的には全員合格できたことから、次年度も同様に授業を進めて行くことを考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書は「有機化学『ワークブック』」を指定し、理解を助けるために教科書のページを記載した補助プリントを作成した。授業では反応機構を板書しながら説明した。補助プリントには練習問題と正解および解説もつけ、各自が復習できるように工夫した。また、授業の最後の10分間で確認問題に取組ませ、翌回の授業で添削したものを返却し、正答率が低かった問題については詳しく解説することで、理解を深めた。

2) 自己点検・評価

本演習では、これまでに学習した有機の反応について、カーブした矢印で電子を動かす反応機構が描けるようになることを主眼としており、演習問題を解きつつ授業を進めた。カーブした矢印で反応機構を表記できることは、様々な反応の理解に役立つことから重要であるが、『この授業の関連分野に関心を持つことができた』という項目で、普通と回答した学生が50%であった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度は、反応機構の重要性について丁寧に説明しながら授業を進めることが重要であると考え。また、反応機構を理解していないと正解することが難しい問題を積極的に演習することで、理解を深められるように改善したい。さらに、医薬品化学Ⅰ、Ⅱにおいても反応機構での理解が重要であることも折りに触れ説明したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回の授業中の演習問題（20%）と定期試験（80%）を総合的に判断して評価した。演習課題については、次回の授業で添削したものを返却した上で解説し、各自が毎回の授業の理解度をチェックできるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験において平均得点率が70%以上であり、80%以上の得点率の学生は全体の約4割であった。一方、再試験の対象となった学生とは再試験の前に面談を実施し、定期試験での学習を振り返り、再試験に向けての学習方法を一緒に考えた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2名の教員で試験問題を作成し授業時間に応じて得点を分配しているが、それぞれの教員が作成した問題の正答率に大きな差はなかったため、次年度以降も同様の得点分配を考えている。また、再試験対象者との面談は効果的であったと考えられるので、次年度以降も、もし再試験の対象者がいた場合、面談したいと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機器分析学	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

動植物や有機反応によって産生される生理活性物質や医薬品の多くは有機化合物であり、その分子構造は、作用や性状を理解する上で重要である。本科目では、IR, NMR, MSの測定原理・測定方法についての理解を深め、これらの分析法で得られるスペクトルデータを活用し、低分子有機化合物の構造解析ができるようになることを目標としている。これらの技能は研究室に配属されてからの研究でも役立つものである。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験では8割以上得点できた学生は全体の約50%であり、再試験対象者も最終的には全員合格したことから、目標は達成できたものと考ええる。特にNMRスペクトルの解析は研究室に配属されてからも重要であることから、理解度の高い学生が多いことは良い傾向であると考ええる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2名の教員による授業であるが、『授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。』という項目では、約85%の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと答えていることから、次年度以降もIR, MS, NMRを分担して授業を実施したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

指定の教科書「有機スペクトル解析入門」（裳華房）の他に、授業資料を作成して基本的な測定原理を丁寧に説明した。続いて、スペクトルの解析では、実際に測定したデータに基づいた問題を演習することで理解を深めた。毎回、授業の最後の10分間で確認問題を解いて提出することで各自が理解度を計る一助とした。

2) 自己点検・評価

本科目では、学生がまだ経験したことがない、IR, NMR, MSの測定と解析に関する授業であるため、写真などを添付した授業資料を作成した。また、イメージしやすいように測定機器の価格なども折りに触れて話した。実際にはヒトの目に見えない波長の利用や、天秤では測れない微量サンプルの測定もあるため、測定の失敗例などエピソードを交えて話すことで、身近なものとして感じられるように授業した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生から、IR・MSの説明を短くしても良いのでNMRの解説をもう少し長くして欲しい旨のコメントを頂いたので、次年度以降に検討したい。また、『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、約75%の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと答えていることから、次年度以降もメリハリをつけた授業を展開したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回の授業の最後に確認問題を解いて提出し、添削結果を返却することで形成的評価を実施した。総括的評価については定期試験（100%）で評価した。配付した演習問題（解答付き）については、各自で学習を進め、最終回の授業で重点項目を再度確認することで理解を深めている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験の平均点は約70点であり、90点以上得点できた学生が全体の約3割であった一方、再試験対象者も全体の約3割であった。再試験対象者とは面談し、本試験に向けての学習について振り返った。その甲斐あってか、再試験を受験した学生全員が合格した。従って、機器分析学の単位取得者については、有機化合物の構造解析の基本的な部分は修得できているものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

再試験の対象者が3割というのは決して少なくないと考ええる。評価が定期試験のみであることから、直前まで学習しないことも考えられるため、毎回の確認問題を形成的評価ではなく、課題への取り組み点などとして総括的評価への組み込みを検討したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬用植物学	第2学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

初歩的な薬用植物、歴史的に有名な薬用植物、および毒草について、形態、学名、植物名、薬用部位、主成分、効能などを説明できるようになることを目標に学修する。教科書およびレジュメをもとに、これらの学習内容を毎回の授業の最後に記述式の知識確認シートを完成することで確認する。さらに、薬用植物園で実際の薬草を確認し、スケッチすることで薬草の実態を学ぶ。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

予定した薬用植物について紹介できた。知識確認シートによるまとめ作業を行った。授業ごとに教科書から選んだ薬用植物の画像問題を作成し、形態、学名、植物名、薬用部位、主成分、効能を選択形式で記載した小テストを回収した。薬用植物園での薬用植物の観察とスケッチを実施した。コラムを中心に薬用植物情報について紹介した。薬用植物が使われている生薬見本を回覧し、実際の素材を確認した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

生薬の見本を回覧し、選択形式の画像問題を作成し、小テストとして実施して回収した。小テストと引き換えに、解答を配布するようにしたが、小テスト中に化学構造式を転記・記載しきれていない場合もあり、繰り返しの説明の機会を得るようにしたい。実際に、実物を見て、触って、味わう機会をもうけたい。実際の使用例についても紹介していく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

初歩的な薬用植物、歴史的な薬用植物、および毒草についての講義を行う（80%）。これら植物から調製される生薬（画像問題などを利用）を紹介する。コラムを中心に薬用植物情報（蒸留、染色、ハーブ、毒草と類似した植物、薬用作物産地確立支援事業、薬用植物をめぐる情勢）を幅広く接する機会を得て、薬用植物に興味をもつ機会をつくる（10%）。薬用植物園にて薬草を観察しスケッチする（10%）。

2) 自己点検・評価

予定した薬用植物すべてを解説できた。生薬見本を回覧し、且つ、選択した画像問題による小テストを実施した。生薬学・漢方医学に関連する薬効を示す主要成分について紹介することができた。薬草園での薬草観察とスケッチを実施して、スケッチ対象として選択した薬用植物の説明を行うことができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教科書レベルでの授業だけではなく、薬用植物情報（蒸留、染色、ハーブ、毒草と類似した植物、薬用作物産地確立支援事業、薬用植物をめぐる情勢）を幅広く接する機会を持ちたい。薬学部の専門教育授業として薬用植物学は、生薬学、漢方医学につながる大変重要な授業であるため、歴史的側面の解説・実際の利用方法、身近な利用方法の解説を増やすなど実践する場を組み立てていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回実施する記述式知識確認シート（小テスト）による、薬用植物の画像問題、植物名、有効成分名、それらの化学構造式を紙に書いて覚える作業（7回）、薬用植物園での薬用植物の写生（1回）により評価を行い、授業態度や意欲などを含めて総括的評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

薬用植物学では、薬草の形態、ラテン名の書き方、和名・生薬名、効能、成分、その分布など幅広い知識が必要であることを学ぶことが大切であり、周辺情報も併せて、実際の薬草の使われ方を把握できるようにつとめた。薬用植物の数はたいへん多く、試験前には選択した画像問題の復習を行い、対象を絞って学修するように指導している。したがって、学生は十分に勉強でき知識を習得する機会が提供されていると判断する。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実際の植物に触れたとき、生薬見本の回覧をしたとき、薬草の使われ方の情報・書籍を紹介した時が興味をもつ機会となるため、植物と触れる機会を増やしていきたい。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になることを提供したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生薬学	第2学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬用植物、漢方薬に配合される生薬について、その基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識を学修する。基原植物の植物学的特性・生薬に含まれる主要成分の物理化学的特性・生薬の品質保証・効能・副作用を学修することで、これら情報を評価および発信できる能力を身に付けることを目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

生薬を生合成経路による分類、化合物による分類、効能効果による分類をし、生薬の副作用、呈色反応を含めた品質評価を自ら発信できるようにする授業が出来た。小テスト（知識確認シート）により知識のとりまとめを行うとともに、生薬の画像と各種特性の知識が結びつくように学修した。授業では生薬見本を回覧し、生薬をめぐる情勢などの資料についても紹介ができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

生薬の見本を回覧し、選択形式の画像問題を含む小テスト（知識確認シート）を実施して回収した。小テストでは、生薬情報を自ら紙面に記載することで知識を整理し、各情報の結びつきを重視したが、学生により到達度にばらつきがあった。生薬の実物をみて、触って、味わって、資料などの知識がイメージとして結びつくように、種々の角度から繰り返し説明する機会を得る。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

生薬の基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識、その歴史、経緯についての講義を行う（80%）。生薬の回覧を行い、薬用植物、漢方薬との結びつき、それらの実際の使用例について、薬用植物による分類、効能効果による分類、漢方薬による分類などの資料を活用して生薬に興味を持つ機会を作る。

2) 自己点検・評価

予定した生薬すべておよび周辺情報について説明ができた。生薬見本、生薬参考書、古典、漢方薬の添付文書を有効活用した。種々の角度からの問題、選択した画像問題による小テスト（知識確認シート）を活用して、解答例を紹介しながら、学生自ら化学構造式を転記・記載する授業を実施した。回収した知識確認シートには疑問点、感じた点を記入して次回講義で回答するなど、学生個々の意見についても回答するようにした。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

生薬の見本を回覧し、自ら生薬情報を知識確認シートに書き込み、化学構造式について何度も繰り返し記入する機会を得るようにする。生薬の素材は薬用植物、漢方薬、健康食品に関連するものであり、実際の使用例や歴史・経緯についても紹介して興味を持つように工夫をする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回実施する生薬に関する小テスト（知識確認シート）の問題を解き、自ら生薬情報を記載する作業（全12回）、生薬の回覧、資料の閲覧、学生からのコメントなどにより評価を行い、授業態度や意欲などを含めて総括的評価を行った。これらを中心として最終試験を実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

生薬学では、生薬の基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識を幅広く覚えることが必要なため、生薬見本の回覧より各情報が結びつくように工夫した。各授業、試験前には復習の時間を確保し、対象を絞って学習するように指導した。したがって、学生は十分に勉強でき知識を習得する機会を得ていると判断する。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実際の生薬見本に触れ、その起源植物などの情報を確認し、さらに生薬に関する各種資料など、より具体的な授業をしたときに、学生は興味を持つように感じるため、生薬とその使われ方について、より具体的に紹介する機会を作る。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になる内容を提供したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品化学 I	第 3 学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の多くは低分子有機化合物であり、作用を発現するには生体内の高分子との相互作用が必須である。そこで、医薬品の生体内での作用について有機化学的に捉えるために、標的となる生体高分子と医薬品の構造と性質、さらに、生体内での医薬品の反応に関する基本事項を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

『授業は理解しやすいように工夫されていた』という項目に80%以上の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答しており、さらに定期試験の正答率が80%以上の学生が約7割であったことから、大部分の学生が代表的な医薬品と生体分子の相互作用について理解したと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

医薬品化学 I は薬理学など他教科と重複する部分や先行して学習する部分もある科目であるが、主に化学構造と作用の分類による授業となっている。『授業はシラバスにそって、系統だって行われた。』という項目に80%以上の学生がそう思うと回答したことから、次年度以降も同様に授業を進行したいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書「化学系薬学Ⅱ（生体分子・医薬品の化学による理解）」の他、要点をまとめた授業資料を別途作成し、重要な医薬品の骨格構造を板書して説明した。授業の最後の10分は確認課題を解く時間とし、次回の授業までに添削して返却し、インプット率が低い問題については、次回の授業の最初に復習として説明した。

2) 自己点検・評価

医薬品化学 I は、薬物代謝だけでなく生体内での代謝や代謝物の分解に関わる生体高分子との相互作用についても学習することから、非常に幅の広い科目である。『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目で80%以上の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答していることから、他の科目との関わりについても把握しながら理解を深めることができたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業資料はPDFファイルとしてC-LeArningにアップロードしているが、学生から毎回必ず前日にアップロードされていることについてコメントがあったので、継続したい。また、『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』という項目では約7割以上の学生がそう思うと回答してくれたので、次年度以降も薬の構造と機能について、他の科目との関連性も含めて丁寧に説明して行きたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価としては、毎回の授業の最後10分間で解いた確認問題を添削し、次回の授業で返却し、各自が理解度を把握できるようにしている。一方、総括的評価については、定期試験（100%）で判断した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

医薬品化学 I は、医薬品の化学構造と性質だけでなく、生体高分子との相互作用に関する有機化学的な捉え方も必要な科目である。定期試験では応用問題を2割程度出題しているが、平均得点率は8割を超えていた。その一方で、15%程度の学生が再試験となり、最終的には全員合格にまで至らなかった。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験が100%の評価方法だと、直前になってから学習をスタートして結果的に間に合わない学生もいるのかもしれない。普段の学習を促すために、毎回の確認試験を評価の対象にすることも考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品化学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の多くは低分子有機化合物であり、作用を発現するには生体内の高分子との相互作用が必須である。医薬品化学Ⅱでは、主に、酵素、受容体、DNA、イオンチャネルに作用する医薬品の構造と性質について修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目に約9割の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答しており、さらに定期試験の平均正答率が約90%であったことから、多くの学生が酵素や受容体に作用する医薬品の構造と性質について理解できたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

医薬品化学は薬理系の授業と重複する部分や一部先行する部分もあるが、『授業はシラバスにそって、系統だって行われた。』という項目に7割以上の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答している。次年度以降も同様に授業を進めたいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書を「化学系薬学Ⅱ（生体分子・医薬品の化学による理解）」に指定する一方、要点をまとめた授業資料を作成し、作用機序は教科書の読解をメインに、重要な構造は板書して説明している。また、授業の最後の10分は確認課題を解く演習時間としている。次の授業までに確認問題を添削して、特に正答率の低かった問題については、次の授業の最初に説明した。

2) 自己点検・評価

医薬品化学Ⅱでは、医薬品の化学構造の少しの違いが作用に大きく影響することを解説しているが、『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』という項目では約7%の学生がどちらかといえばそう思わないと回答している。化学構造と作用の関係について分かりやすい説明が必要があると感じている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目では約7%の学生がどちらかといえばそう思わないと回答している。医薬品の構造から性質や作用を読み解くことができるのは薬剤師だけと言っても過言ではないと思うので、次年度以降は、構造から薬理作用をある程度推測できることを、丁寧に説明したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価としては、毎回の授業の終わりに確認問題を解いて、次の授業までに添削して返却し、各自が理解度を把握できるようにしている。総括的評価については、定期試験（100%）で判断した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 97%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

医薬品化学Ⅱは単に医薬品化学Ⅰの続きという訳ではなく、医薬品（低分子有機化合物）が生体高分子と相互作用する有機化学的な視点も必要、つまり有機化学の知識の積み重ねも必要な科目である。再試験の対象者は全体の6%となったので、面談をすることで定期試験の学習を振り返り、再試験の学習計画を一緒に考えた。最終的には、再試験対象者の半数は合格した。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験受験者の約85%が80%以上の得点率であり、全体的に見れば結果は良かったと考えている。一方、6%の再試験対象者と面談したが、全員合格とまでいかなかった。しかし次年度、もし再試験対象者がいた場合には面談を実施したいと考えている。また、応用問題の解説が分かりやすかったとのコメントを頂いたので、次年度も応用問題集の配付だけでなく解説についても継続したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学系実習	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

問題解決能力の醸成を狙いとし、有機化学で学んだ知識を基に、化学物質の安全な取り扱い操作、生薬の鑑別及び評価試験法、代表的医薬品の配座解析、有機化合物の物性、反応性、代表的医薬品合成について、実験を通して理解を深める。これらは研究室に配属後の特別実習でも必要な知識と技術でもある。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

それぞれの教員は普段から実験していることもあり、『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』という項目でそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生の割合が75%以上であった。評価の半分はレポートであるが、総合得点率が80%以上であった学生は全体の80%以上であったことから、実習を通して多くの学生が理解を深めたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教員がそれぞれの専門分野の実習を担当した結果、『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目でそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生の割合が75%以上であった。レポートについては添削したものを返却することでフィードバックを行っているが、次年度以降も同様に実施したいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習前に実習書を配付し安全講習の一環として実習で使用する危険な試薬について調べさせた。化学物質の安全な取り扱い操作、生薬の鑑別及び評価試験法、有機化合物の物性、反応性、代表的医薬品合成については実習室での実験がメインで、代表的医薬品の配座解析では分子模型を使って演習を実施した。

2) 自己点検・評価

実習前に実習書を配付し予習を促すだけでなく、実習当日は実験の要点を説明してから実習を開始した。『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は75%以上であったことから、次年度以降も同様に実習を進めたいと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教育方法について特に大きく変える予定はないが、「教科書が必要な場合は実習スケジュールにも記載して欲しい。」とのコメントをいただいたので、次年度以降は掲示する際に白衣や保護メガネの他に必要な教科書なども掲載したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

化学物質の安全な取り扱い操作では実習書の予習が必要であり、代表的医薬品の配座解析では演習も含まれ、それ以外の実習はレポートにまとめる必要がある。代表的医薬品の配座解析では形成的評価として授業時間内に解いた確認問題を添削し、実習試験前に返却している。実習態度（20%）、実習レポート（50%）、実習試験（30%）により総括的評価をした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

総合評価では得点率が90%以上であった学生は全体の約45%であり、さらに全員が合格していることから、多くの学生が実習を通し理解を深めたと考えている。レポートの書き方については1名のみ再レポートとなったことから、大部分の学生は身につけられたものと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

それぞれの実習担当教員がレポートを添削しているが、基準は実習書に記載されているレポートの書き方としており、大きな得点差はなかったことから、今後も同様の基準で評価をしていく予定である。『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は85%以上であったので、次年度以降も同様に実習を継続したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎分析化学	第1学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

日本薬局方に定められた各種医薬品を含む化学物質の品質管理における定量法を習得するため、基礎となる各種化学平衡の原理、化学物質の分析に用いる器具の使用法、測定値の取り扱いを学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標の達成状況は十分達成された。配付資料により授業のポイントが明確となり理解度が進んでいると考えられた。しかしながら、配付資料以外からの出題、特に教科書や参考書から出題となると正答率が下がり、計算問題を苦手としていることが伺えた。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

リメディアル授業とのリンクがうまくいっていないと思われる。なぜ基礎分析化学を学ぶのか、将来どのように応用されるのかを意識して、大学で学ぶ専門知識について講義を進めるペースをゆっくりとし、授業での説明を丁寧に行う。1年次の他の科目の理解度が進んでおらず、本科目に対応できていない領域については基礎的な知識の説明を多くしていく。小テストベースで勉強するのではなく、教科書ベースで勉強するように促す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

科目内における講義は75%を占め、演習の割合は残り25%である。教科書にパートナー分析化学Ⅰを指定した。パートナーは第18改正に準拠している。参考書にはスタンダード薬学シリーズⅡを指定した。配布資料は、重要ポイントをまとめたものである。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

演習にはe-leArningを活用した。解答者の結果が集計されるために、多くの誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に学生の理解度を確認した。しかし、演習中にスマホを使用するため、演習目的以外のスマホ利用も見受けられた。適宜巡回し、目的外使用の防止と解答時間の調節を行った。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

e-leArning活用により、予習および授業中での講義ノートあるいは学習ノートがほとんどの学生で作成されていない。一部の優秀な学生による解答の公開があり、小テスト結果が良い学生が多かったが、授業評価のコメントから良く内容を理解できていないことが伺える。解説などを丁寧に行い今後も活かしていく予定である。知的好奇心の評価が低いので、知識をどのような利用していくのか含めて説明していきたいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は、定期試験により行った。形成的評価は、授業中に行う演習にて行った。演習は事前に予習的に出題し、講義終了後に解答させた。正答率が低かった問題に関しては、解説を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、演習より多く出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 86%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験、再試験未受験者を除けば、合格率は100%であった。形成的評価から統括的評価のつながりに対して相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習（予習、復習）を行わないものは、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価は、薬剤師国家試験を見据えてので1年生では難易な点については、解説を丁寧に行う。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生が多い。自己学習の重要性を説明し、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。特に本科目受講時において高校生理科の授業が重要であることを認識し、薬剤師に必要な知識につながるように促していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬品分析化学	第2学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

日本薬局方に定められた各種医薬品を含む化学物質の品質管理における高度な定性・定量法を習得するため、各種機器を用いた物理科学的分析法の原理、操作法および応用例を学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標の達成状況は十分達成された。配付資料により授業のポイントが明確となり理解度が進んでいると考えられた。しかしながら、配付資料以外からの出題、特に教科書から出題となると正答率が下がり、論理的な説明や図や長文からの読解力は低いままと考えられた。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

1年生で学んだことの理解度の低下が認められる。機器そのものの写真などを増やし、講義を進めるペースをゆっくりにし、授業での説明を丁寧に行う。1,2年次の他の科目の理解度が進んでおらず、本科目に対応できていないと思われるので、基礎的な知識の説明も多くしていく。小テストベースで勉強するのではなく、教科書ベースで勉強するように促す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

科目内における講義は75%を占め、演習の割合は残り25%である。教科書にパートナー分析化学ⅠとⅡを指定した。パートナーは第18改正に準拠しており、2冊で要点が記載してあるためである。参考書にはスタンダード薬学シリーズⅡを指定した。配布資料は、重要ポイントをまとめたものである。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

演習にはc-leArningを活用した。解答者の結果が集計されるために、多くの誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に学生の理解度を確認した。しかし、演習中にスマホを使用するため、演習目的以外のスマホ利用も見受けられた。適宜巡回し、目的外使用の防止と解答時間の調節を行った。授業の配付資料を白黒とし、授業中の説明でどこが重要であるか示した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

資料に記載されていない授業中に話したことや板書したことが学習ノートにほとんどの学生で記載されておらず、復習時に活用できていない。c-leArningは、リアルタイムに理解度が集計されるので、目的外使用に注意して解説などに今後も活かしていく予定である。スライドのレイアウトや文字サイズなどを改善し見やすい工夫や質問しやすいように工夫をしたいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は、定期試験により行った。形成的評価は、授業中に行う演習にて行った。演習は事前に予習的に出題し、講義終了後に解答させた。正答率が低かった問題に関しては、解説を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、演習より多く出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 95%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

本試験未受験者を除けば、合格率は100%であった。形成的評価から統括的評価のつながりに対して相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習（予習、復習）を行わないものは、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。一夜漬けの学習が見受けられ基礎学力の低下が進んでいると考えられるので基礎力向上を促す。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価に対して解説を丁寧に行う。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生が多い。授業中に聞き取ったこと書き写したことをまとめる自己学習の重要性を説明し、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。特に本科目受講時において学生自身が基礎学力不足であることを認識し、うまくこれまでの学習の復習につながるように促していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床分析化学	第2学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床検体を行う分離分析を含め臨床現場で用いる各種分析技術を修得するため、物理化学的分析法の原理、操作法および応用例を学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標の達成状況は十分達成された。予習となる小テストを授業前に提示し、講義終了後に小テストを施行した。その解説を行うことで理解を深められたと考えられた。しかしながら、小テスト以外からの出題、特に過去の国試問題や教科書から出題となると正答率が下がり、論理的な説明力や図・長文からの読解力は低かった。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

小テストは予習として大事な位置づけであるが、学生の二極化が進んでおり、予習の有無で授業での理解力の差が大きくなっていると考えられる。スライドからの書き写しや教科書の線引きなどの作業確認、質問を受け付ける回数を増やし、授業に参加しやすくする。理解しやすいように授業での説明を丁寧に行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

科目内における講義は75%、演習の割合は25%である。教科書にパートナー分析化学Ⅱを指定した。第18改正に準拠しており、多くの大学で採用されている。参考書にはスタンダード薬学シリーズⅡを指定した。視聴覚教材は、毎回スライドを用いて行い、重要スライドの虫食いプリントを作成し配布した。ノートを書かせるために重要な点はさらに板書も行った。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

スライド説明時に照度を低くなりすぎないように注意した。演習にはc-leArningを活用した。小テストのすべての解答が終わった後に、誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に解答者の理解を確認した。また、内容の区切りのよいところで、生徒に対して質問を促した。適宜巡回し、演習目的以外のスマホ使用の防止と解答時間の調節を行った。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

使用する教室によってスライド投影がうまくできない教室もあるのでハードの改善を願う。c-leArningと目視による併用にて出席確認を行う。c-leArningによる既読数や解答者の結果集計機能により、リアルタイムに理解度が集計されるので、授業目的外使用に注意して解説などに今後も活かしていく予定である。声が聞きづらいとのことなので、もう少し音量を上げて対応したいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は、定期試験により行った。小テストにより形成的評価を行い、毎授業で行った。小テストは、予習的に出題し、c-leArningにて解答させた。低正答率の問題に対して解説講義を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、小テストから3割以上出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 98%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

形成的評価から統括的評価のつながりに対してある程度の相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習を行わない者は、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。学力の二極化が進んでいると考えられ、低成績者への学習ノートの作成を促す。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価は、学生からの好意的であり継続していく。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生も少なくない。自己学習の重要性を説き、学生自身が考え、教科書などの資料から自分なりのノートを作成させ、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	小野 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物質を構成する原子・分子の構造や分子間相互作用に関する基本的知識を習得することが本科目の到達目標である。この目標を達成するため、それらの分野に関する範囲を中心にした講義を行い、知識が定着するよう適宜演習を取り入れた形式で行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験の受験を放棄した履修者を除くすべての履修者が当該単位を修得しており、到達目標は概ね達成されているといえる。適宜演習を取り入れて繰り返し復習することが知識の定着につながっていると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標の設定とそのための授業構成についての意見は特になかったので現状の講義形式を維持して行うが、より理解し易くなるように講義資料の改善を行い、目標の達成度をより高めるよう努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義80%、演習20%程度の割合で授業を行った。資料として、教科書の他に演習用の問題やその解答例などの配布資料も利用した。双方向性方策として、授業中に学生に質問を促し直接受け付ける時間をとった。授業内容が理解できているかを適宜学生に問いかけて状況を確認しながら授業を進行した。

2) 自己点検・評価

適度な演習を取り入れたことにより知識の定着がみられ、問題と解答を含めた配布資料により自主学習が円滑に進行しているようであった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

基本的な授業方法は変更しないが、授業資料のブラッシュアップを行い、問題演習や小テストを行う機会を可能な限り増やして学生の知識の定着をさらに高めるよう努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業の途中で問題演習を適宜行うことで授業内容の理解度を学生自身が確認する機会を設けた（1コマあたり1～2回、1回10分程度）。総括的評価は定期試験により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

形成的評価を適宜取り入れるなどの評価方法は、総括的評価結果からも概ね適切であったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価方法は適切であったと考えているので、特に変更は行わない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	小野 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

多数の分子(原子)の集団である物質の状態の変化とエネルギーのやりとりとの関係(熱力学)を学び、酵素反応をはじめとする様々な化学反応の進行や状態の変化を物質の構造や性質に基づいて理解することが本科目の到達目標である。この目標を達成するため、それらの分野に関する範囲を中心にした講義を行い、知識が定着するよう適宜演習を取り入れた形式で行った。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験受験者の96%が当該単位を修得しており、到達目標は概ね達成されているといえる。適宜演習を取り入れて繰り返し復習することが知識の定着につながっていると考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

練習問題増やしてほしいという意見があったので、講義資料に練習問題を追加して問題演習の機会を増やして目標の達成度をより高めるよう努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義90%、演習10%程度の割合で授業を行った。資料として、教科書の他に演習用の問題やその解答例などの配布資料も利用した。双方向性方策として、授業中に学生に質問を促し直接受け付ける時間をとった。授業内容が理解できているかを適宜学生に問いかけて状況を確認しながら授業を進行した。

2) 自己点検・評価

問題演習を取り入れたことにより知識の定着がみられ、問題と解答を含めた配布資料により自主学習が円滑に進行しているようであったが、問題演習の機会をより増やすことで更なる向上が見込められると思われる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業の形態には好意的な意見が多かったため、基本的な授業方法は変更せず、問題演習や小テストを行う機会を更に設けて学生の理解度を適宜確認し、理解度の低い範囲は次回の講義で再確認するなど、学生の知識の定着をさらに高めるよう努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業の途中で問題演習を適宜行うことで授業内容の理解度を学生自身が確認する機会を設けた(1コマあたり1~2回、1回10分程度)。総括的評価は定期試験により行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%) 96%

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

形成的評価を適宜取り入れるなどの評価方法は、総括的評価結果からも概ね適切であったと考えている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

総括的評価は適切であったと考えているので特に変更は行わないが、学生の理解がより深まるように形成的評価の機会をより多く設ける。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理系実習	第2学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の品質管理に不可欠な化学平衡反応を活用する定量法について体験し、その原理を理解すると共に定量分析の基礎理論と技術を習得する。また、実験結果から法則を導き出し個々の経験法則をまとめ、一般性のある理論の確立へと展開させる。さらに、実験データを効率よく整理し統計的に解析することが重要であるため、薬学に必要な物理化学的現象を解析し、理論的に考察することで明快なレポートを書けることを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

物理系実習はエネルギーと物質に関する自然現象を理解する上で重要な実習であるが、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が散見された。また、学生の能動的活動を基盤としており実習中に班員で話し合い実験回数の変更など「目的に合った方法にて結果を得ること」を習得することができていない学生が多く見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価から物理系実習に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が実習をまじめに受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も実習前の予習ならびに実習後の復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習書（奥羽大学薬学部物理系分野 編）を用い、さらに分かりやすく板書を行いながら実験操作の説明を行なった。また、実習の最後に当日の実習内容に関する口頭試問を行いながら知識の定着を図った。

2) 自己点検・評価

物理化学および分析化学との講義と連携しながら、物質に関する自然現象を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる実習の基本的操作を習得させる。そのために教官側は分かりやすい実験操作の説明を行うと共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、実習書に沿って板書を併用させ実験操作の説明を行う。当然のことではあるが実習には必ず毎回出席してもらい、事前に実習書を熟読してもらい当日の実習内容を大まかに理解し、その日のうちに実習内容に関して復習をさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習終了時に得たデータを教官と考察しながらディスカッションを行うことにより評価した。また、質問内容の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。実習態度、実習レポート、実習試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

レポート内容を精査し、単に実習書を書き写しただけでなく、しっかりと実験結果から考察が行えているか確認した。また、実習最終日には実習内容を理解したかどうか、単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね実習内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実習態度、実習レポート、実習試験の結果に加え、当日の実習に対する理解度を問う口頭試問を加味して総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学Ⅲ	第2学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

複雑な系における物質の状態および相互変換過程を熱力学に基づき解析できるようになるために、溶液および電気化学に関する基本的知識を習得する。また、物質の変換過程を理解するために、化学反応速度論、および反応速度に影響を与える諸因子に関する基本的知識を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

医薬品の安定性に深く関わる物理現象の基礎となる、相平衡、溶液の化学と反応速度を理解する上で重要な学問であり、薬学生として必要な物理化学的諸現象を把握する素養を習得する教科の基礎となっているが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価から物理化学Ⅲの授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をまじめに受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も予習も大事であるが、特に復習を心がけるよう徹底したい。さらに、授業の終盤には例題を数多く取り入れながら試験に向けて余裕を持たせたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義80%、演習20%の割合で授業を進めた。教科書として「レファレンス物理化学」を用いながら、プリントや分かりやすく板書を行いながら授業を行なった。また、授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解きながら知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

リメディアル物理、物理学Ⅰ、物理学Ⅱ、物理化学Ⅰ、物理化学Ⅱとの講義と連携しながら、医薬品の安定性に深く関わる現象を理解させ、薬学領域で学ばらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、教科書に沿って穴埋め式スライドで授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各單元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解くことにより評価した。また、演習問題の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。定期試験の成績に加え、授業への出席を加味して総合的に評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 80%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を多く取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が80%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	環境衛生学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

地球生態系や生活環境を保全・維持できるようになるため環境汚染物質や環境要因の成因、測定法、生体への影響、汚染防止などに関する事項を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

シラバス通りに進め、すべての到達目標およびSB0sを網羅できた。以前は到達目標とSB0sに対するコマ数が不足、タイトなスケジュールで進行し学生には大変な集中力を求めているが、当該年度より講義時間が充足し、ゆとりをもって進行できた。また、問題演習も行うこともできた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は全項目が評点4以上、概ね全体平均と同程度であり問題なかったといえる。おそらく特定の1名だけ全項目に悪い評価をつけており、大学の授業に馴染めていないのではないかと不安視している。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書（今井浩孝・小椋康光編「衛生薬学—基礎・予防・臨床—」第4版（南江堂）を基本に、これに合わせて作成したオリジナルの補足プリント、問題演習とともに進めている。
オリジナルプリントは教科書の文章のみの記述に対する図示、内容の補足に加え、話しきれない発展的な内容を加えている。

2) 自己点検・評価

授業評価は全項目が評点4以上、概ね全体平均と同程度であり問題なかったといえる。先述の通り、当該年度より講義時間が充足し、ゆとりをもって進行することができ、例年書かれていたスピードに付いていけないというコメントもなかった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特段のコメントや改善要望もなく、概ね問題ないと考えられる。「8. 教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。」に関してはこれ以上ないほど意識している。重要ポイントが非常に多いことに起因していると思われるが、より一層取り組みたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

シラバスで提示した通り、定期試験（100%）とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

選択問題と筆記問題（考える系）を課している。例年、合格率はほぼ100%であり、優れた成績を修める受講者が多いが、当該年度は平均点、合格率ともあまり良くなかった。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義時間が増え、例年より丁寧かつ問題演習も行っているにもかかわらず成績が悪化していた。可能であれば発展的内容や当該分野への関心をもたせる工夫に時間を割きたいが、重要事項の繰り返しや問題演習等の成績向上に取り組みたい。学生からは「内容がボリュームで覚えるのが大変だった」との意見があったが、これに変更の余地はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	環境衛生学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

有害な化学物質の生体影響を回避できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的知識を習得し、それに関連する基本的技能と態度を身につけることを一般目標とし15の到達目標を設定している。2024年度は前年度より講義回数を1回増やし15回の科目とした。それにより全ての到達目標を余裕をもって解説できるようになった。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験において49名の受講者中45名（92%）の学生が単位を取得でき、これは前年度と同値である。しかし優以上の評価を得た学生は16名32%であり前年度の38%、前々年度の58%より低下した。依然として再試験によって単位を取得できた学生もあり、到達目標の達成度が前年度より低下した可能性がある。薬剤師に必須な知識であることから、到達目標達成度回復をめざした改善を続ける必要がある。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標の達成度が2024年度も低下したように見える。項目1「授業はよく準備されていた」と項目3「理解し易いよう工夫されていた」について否定的な回答がそれぞれ7.1%、14.3%あり、授業の構成や理解し易さについて改善を進めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で実施し佐久間と熊本で分担した。佐久間は教科書とプリントを使って講義した。プリントには教科書にない図表や当日のまとめ、練習問題なども加えた。熊本も教科書を中心にプリントで補足した。プリントは教科書の不十分な記述の補充、文章では解りにくい内容の図示、時間内に話きれない発展的内容の解説とした。授業の前後は余裕をもって滞在し質問に応じた。双方向ディスカッションは衛生薬学演習で行う。

2) 自己点検・評価

2名の教員それぞれ工夫をこらしたプリントを作成し熱意をもって授業している。そのことは項目6「教員の授業に対する熱意」の高評価として現れている。項目3「授業の理解し易さの工夫」は科目平均が全体平均より高かった一方で、自由記述欄ではこの点に関係する要望も記されており検討の余地がある。項目4「教員の話し方」に関しては、本年も科目平均が全体平均より低く改善が求められている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

自由記述欄に項目4「教員の話し方、聞き取りやすさ」に関する問題点が指摘されており、科目平均も他の項目より低い。まずはその点の改善を目指す。「質問に対する確に分かり易く答えてくれた」に関し、そう思わないと評価した学生が14.3%おり、質問への対応について注意を払う必要がある。評価の高かった項目は2025年度も継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は実施していないが、佐久間は講義開始時に前回内容を確認し、練習問題の解説を各回で実施することで理解の向上につとめた。熊本は講義開始時は必ず前回までの内容について、講義中や講義終了後も適宜、問題形式で問いかけを行った。総括的評価ではコマ数に応じて期末試験の点数を配分し、期末試験を100%として評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 92%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

履修者49名中4名が単位を取得できなかったため合格率は92%である。総括的評価において50%（25名）の学生が良以上の評価を得た一方で、可の評価を受けた学生が41%（20名）おり、習熟度の低い学生への指導に工夫が必要である。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価を導入することにより総括的評価における合格率や高評価学生の割合が高まることが期待される。形成的評価の導入を検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	栄養化学	第2学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

栄養素の機能およびその過不足が健康に及ぼす影響を正確に理解し、併せて食事による健康維持のための摂取基準を理解することを、本講義の達成目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験は56名が受験し、その結果26名が再試験対象となった。再試験の実施後、最終的に2名が不合格となった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の大多数が合格に至り、教育目標は概ね達成されたと考えられる。そのため、現時点では特段の改善策を講じる必要はないと判断する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

指定教科書のみならず、複数の教科書から適切な図表を引用して独自の配布資料を作成し、講義に活用した。その結果、コアカリキュラムに定められたSB0を達成できるよう工夫した。

2) 自己点検・評価

授業評価の結果から、講義者の意図と学生の理解度との間に一定の乖離が認められた。したがって、今後はその差を縮められるよう、講義方法にさらなる工夫を加える必要がある。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価の高い先生方に、FD等の機会を通じて講義方法や工夫点をご教示いただきたい。その知見を踏まえ、自身の授業に応用可能な点については積極的に取り入れ、授業改善に努めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

試験の結果のみで評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

疾病予防は将来の薬剤師に不可欠な素養であり、その育成を目的として、講義で得た知識を応用する形式の試験問題を出題している。この方針については講義中に繰り返し周知しているため、再試験対象者が増加する傾向にあるものの、講義内容に対する学生の満足度は高く、教育目標は概ね達成されていると判断できる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後は、各講義で課しているレポートを成績評価の一部として位置づけ、学習過程におけるレポートの重要性を学生に十分認識させたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	食品衛生学	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目では、食生活が健康に与える影響を科学的に理解するため、栄養と食品機能、食品衛生に関する基本的事項の習得を一般目標とし、11の到達目標を掲げている。目標に挙げた事項の多くは習得できていると考えられるが期末試験の正答率より判断すると、その中で6「代表的な食品添加物」、9「代表的細菌性・ウイルス性食中毒」、11「化学物質やカビによる食品汚染」が他に比べ習得度が低かった。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

期末試験において大半の到達目標の平均正答率が70%以上であった。1) で挙げた習得度の低い到達目標を含め本科目は覚えなくてはならない事項が多く、暗記に頼る学生には難しい科目である。しかし受講者51名中48名が単位を取得できたことより、科目の到達目標は概ね達成されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標6、9で扱う事項は、重要度が非常に高く薬剤師国家試験でも毎年出題される項目である。食品添加物の特徴や食中毒の原因となる細菌やウイルス、化学物質の特徴について覚えなくてはならず、難しい到達目標である。ポイントを強調したり学生の理解度の高い他の項目や他の科目と関連付けるなどして理解し覚え易い授業になるよう工夫する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

学習方法は講義が100%である。教科書の解説を中心とし学習範囲の要点や練習問題を記した補助資料も配付した。食品という身近な物に関連する授業であることから、学生が経験していそうな事や最近のトピックなどを取り上げ、そこから学生自身で考え授業に参加することを促した（佐久間）。図表や写真を中心とした補助プリントを扱いながら、化学物質分野や生活環境分野との関連性を明示し概説した。（熊本）

2) 自己点検・評価

要点や練習問題を記した補助資料を授業で使用し効果的な学習を目指している。それが、項目1、3、8が全体平均とほぼ同等かそれ以上の評価につながったと考える。前年度科目平均が全体平均より低かった項目4「話し方」6「授業への熱意」は前年度より評価が向上し改善の効果が現れた。重要項目はこれ以上ないほど強調しており、定期試験でも過半数が正答率80%以上であった（熊本）。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

項目4「教員の話し方」は改善の努力を続けており、2024は評価の向上がみられた。2025年度も講義中はこの点に特に注意を払い、改善の努力を継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は実施していないが、講義開始時に前回内容の振り返りをした。補助資料に含めた練習問題の解説を行い講義の理解度を確かめた（佐久間、熊本）。本科目は2名の教員で分担しており、コマ数に応じて期末試験の点数を配分し、期末試験を100%として総括的評価を実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 94%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

総括的評価において48名受講者の94%が合格となった。合格した48名は秀、優、良、可がそれぞれ22%、20%、28%、26%であり分布に大きな偏りはなく、適切に評価されたと判断している。しかし、秀・優よりも良・可の割合の方が高く学生の理解度向上に努める必要がある。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価により理解度向上が期待されるので、形成的評価やそれに代わる理解度向上に繋がる方法の導入を検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学 I	第 3 学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義では健康を集団レベルで捉える考え方とその応用について学ぶことが目標である。具体的には、社会における集団の健康と疾病の状況およびその影響要因を把握するために、保健統計、予防薬学及び疫学に関する基本的知識と考える態度を養成する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目では16項目の到達目標を設定し講義している。必修科目にもかかわらず多数回欠席し期末試験受験資格を失った者が1名いたが、大半の学生はしっかりと受講し90%の学生が単位を取得できていることから、全体としては十分に目標に到達できたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2024年より衛生系の佐久間勉、櫻井敏博、熊本隆之の3名で分担して講義した。授業評価は全項目で科目平均が全体平均より低かったが、教員が担当初年であったことも一因になった可能性がある。教員側の教授方法の習熟度を上げ、学生の理解度向上に努めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の図表の説明を丁寧に行った上に必要に応じて追加として独自の講義資料を毎回講義時に配付した。配付資料は予習用と復習用の2種類を用意し、予習復習の便宜を図った。予習用資料は一部を記入式にしてあり、講義中に記入することで知識の定着を図るものである。講義ではパワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

2024年度の本科目は、評価項目10項目全ての科目平均が全体平均を下回った。講義の内容が現状の統計数字の説明や疫学の計算問題になりがちで、そのことが項目7「知的好奇心の刺激」が最も全体平均との差が大きい一因になっていると考える。他に項目3「理解し易さの工夫」、6「教員の熱意」、8「重要項目の強調」は全体平均との差が大きく改善に努めたい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

項目3、8については、教員各自が授業の内容や説明の仕方について見直し改善に努める。項目7については、単なる統計の解説に留まらずその結果の背景にまで踏み込むように工夫したい。項目6は担当初年度であったことも一因と思われる。2025年度には前年度の経験を踏まえ、学生に熱意がしっかりと伝わるように努めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%として評価している。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 90%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

履修者51名から年度末までに退学した2名を除いた49名の内44名が合格であることから合格率90%となった。単位取得に至らなかった5名の内2名は期末試験を受験しなかったり受験資格を失った者で、試験を受け不合格であった学生は3名であった。合格者の内「良」以上の評価を得た者が64%おり、そのうち「秀」あるいは「優」の評価を受けた者は43%であった。このことより成績評価に問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

病気の予防や健康の保持・増進を目的として、組織的に取り組む学問である。本講義では、公衆衛生学Ⅰで得た知識を基盤として、感染症、生活習慣病、母子保健について、その現状や動向を理解するとともに、予防方法について学ぶことを目的とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と講義内容は概ね一致していた。定期試験には47名が受験し、そのうち9名が再試験となった。再試験の結果、1名が不合格となったが、全体としては目標をおおむね達成できたと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本年度から担当となった科目であるが、「レジュメがわかりやすく、以前の内容の復習も含まれており理解しやすかった」との評価を得た。次年度は、より充実した講義資料を作成し、学生の理解度向上に一層努めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

多くの教科書を参照し、それらから内容を抜粋して資料を作成し、その資料に基づいて講義を行った。資料の最後には、講義内容に関連する薬剤師国家試験、医師国家試験、看護師国家試験などの過去問題を収録し、学生の理解度向上に役立てた。

2) 自己点検・評価

講義資料については「理解しやすい」との評価が得られた一方で、問題の中には難解なものも多いとの指摘があった。今後は難易度の適正化を図り、学生の学習効果をより高めていきたい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義についてはおおむね好評であったが、今後は試験の難易度に十分留意し、改善に努めていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

試験の結果のみで評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 98%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本科目は薬剤師国家試験において頻出分野であるため、定期試験もその出題傾向に準拠した内容とした。学生にとっては難易度が高いと感じられたものの、不合格者は1名のみであった。授業評価も概ね好評であり、今後は改善すべき点を適宜見直しつつ、継続して実施していきたい。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの批判的意見は認められなかったことから、講義内容は従来通り継続する。一方で、試験問題の難易度については適切に調整し、より妥当な出題となるよう改善を図る。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	衛生薬学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本実習は、衛生薬学分野教科目の講義と一体をなすものである。環境衛生、食品衛生、公衆衛生の各分野で必須の実技を体験し学ぶ機会である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

コアカリキュラムに基づいて、必須の項目は全て網羅されており、目標は達成されている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価の点で、2023年は全10項目中5項目で「そうは思わない」とした学生が20%いた。2024年度も同じ5項目で「そうは思わない」と回答した学生がいたが、その割合は7%と低下したことから到達目標に対する学生の理解が向上している。しかし、未だに否定的回答があることより、それらへの対応を考えたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習テーマに合わせて学生を2グループに分けて、4テーマ各2日ずつ計8日間で行っている。教員作成による実習書を配付し、それに基づいての予習を励行している。また、実習書内にはレポート作成を含め実習全般の注意が記載されている。4テーマの実習項目毎に、実験のポイント等もしっかりと記載しており学習の助けとしている。

2) 自己点検・評価

実習書は毎年改訂を行っているものの、未だに誤植等が残っている。評価項目のうち5項目（項目2「シラバスに沿った内容」、3「理解し易さの工夫」、4「教員の話し方」、8「重要事項の強調」、9「質問対応」）は2023年度と比較し改善しておらず今後の課題である。本実習のレポートは作成に苦勞すると述べる学生が多いが、卒業論文作成の練習になったと肯定的に評価する学生もあり、レポート作成の難易度は変更しない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実習書の改訂を正確に行う。2)に記した5項目の改善を進める。レポートの提出締め切りが試験期間と重なりしつかりとレポートに取り組むことが出来なかったとの意見があり、提出時時期に関して検討する。実習終了後、衛生薬学分野教員間で実習の振り返りを行い次年度の改善に繋げる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習態度、レポート、知識確認試験の点数を合計して判断している。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

全48名の受講者中47名が単位取得できた。1名は実習には参加したものレポートを提出せず年度内に退学した者であり、そのため合格率は100%とした。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬の効き方と作用点（薬理系1）	第2学年
科目責任者（記載者）	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

4年生まで学ぶ薬理学の最初の授業として、「薬物受容体の概念を理解し、多くの医薬品の作用点となっている代表的な薬物受容体の性質、機能、および生理的役割に関する基本的事項を修得する。」ことを到達目標にしている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業は計画通り実施し、学生の授業評価のアンケート結果は、ほぼ全ての項目で平均以上の評価となっていた（回答率74.1%）。本試験の平均点も、83.5点であり、ほとんどの学生が本科目の学習目標に到達したと思うが、再試験対象者に関しては、授業中での理解が不十分であるかもしれない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標は達成できているので、現状を継続する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、講義を100%で実施した。授業はパワーポイントを活用し、資料は発表資料をpdfファイルで配布している。授業開始時に前回の復習を簡単に行い、授業中に関連する国家試験問題などを紹介し演習を行っている。理解度確認の目的で、C-LeArningの小テストを実施し、また、繰り返し問題演習ができるようにドリルにしている。

2) 自己点検・評価

授業内容に関して平均点以上の評価であったが、今年度から紙媒体での資料を配付しないことになったため、授業を教える側にも教わる側にも慣れない点が多く、例えば学生がタブレット上に書き込みを行う時間が予想できずに次のスライドに移ってしまったことがあったようである。授業中の問題解説や練習問題は好評であった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

プレゼンテーション資料の改良を行い、余裕をもった進行を心がける。また、授業中で扱う国家試験等の問題、小テストの問題については、時間があるかぎり解説を行い、学生からの質問も受け付けるようにする。授業の復習を行わせる時間を増やしたい。毎年、「教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した」の項目が、平均点以下となっており、どのような方法が適切なのか工夫してみたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的な評価は行わず、定期試験（100%）で総括的評価を行った。出題形式として、記述式問題、選択肢問題、正誤問題を組み込み、単に覚えているだけではなく、薬物の作用機序等について説明ができるなど理解度の深い学生の成績が高くなるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 93%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅しているため、ほぼ全ての学生が単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業中で扱う問題や、C-LeArningの小テスト問題をアップデートし、最新の知識が習得できるように配慮する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	末梢神経に作用する薬と生体反応（薬理系2）	第2学年
科目責任者（記載者）	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

末梢神経系は、各種臓器および器官の機能を自律的に制御して生体の恒常性維持を担う自律神経と、骨格筋の運動を調節する運動神経、ならびに感覚器からの情報を中枢に伝達する知覚神経などから構成されており、多くの薬物の作用点が存在するため、末梢神経系の理解は極めて重要である。そこで、末梢神経系の役割、受容体、薬物の薬理、および、疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を習得することが本授業の目標となる。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の11%が正答率90%以上（100点が1名）、また26%が正答率80%以上であったが、最終的な不合格者も13名いた。これらの不合格者のうち、6名が留年し、そのうち3名は学業不振により退学している。したがって、不合格者の大半は本授業のみ成績不良であったわけではないことがわかる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「医薬品が生体内で病気に対しどのように作用を引き起こすのかを分かりやすく知ることが出来てよかった」というコメントがあったことからわかるように、到達目標を達成していると判断し、特に改善は必要ないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本講義は講義100%である。「NEW薬理学改訂第7版」（南江堂）を教科書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、主要臓器別の自律神経機能解説表や作用点別薬物リストを適宜配布して、学生の復習に役立てた。また、授業ポイントを確認するために小テストを実施した。わからないところは質問に来るように指示した。

2) 自己点検・評価

授業は、パワーポイントを用いた板書形式で行い、教科書の重要部分もパワーポイントで写し、それに書き込む形でわかりやすく説明を行った。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は、概ね平均を上回っていた。特に、「知的好奇心が刺激された」、「重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた」、「この授業の関連分野に関心を持つことができた」、の項目の点数が高かった。来年度も今年度のやり方を踏襲する。自由記述では、ノートの書く量が多い、板書のスピードが速い、という意見があった。高校の授業の受け方では大学の授業はついていけないことを授業の初めに伝えたいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は特に行わなかった。総括的評価は、定期試験の成績を100%として評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業の内容がそれなりのレベルであったにもかかわらず、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の26%いたことから、試験問題の内容及び難易度は適切であったと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、成績の悪い学生の多くは試験勉強のスタートが遅いことが主な原因と考えられるため、早期に勉強を開始するように強く指導したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体内で生み出される生理活性物質（薬理系3）	第2学年
科目責任者（記載者）	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生理活性アミンや生理活性ペプチドといった生体内で生み出される生理活性物質の受容体は、多くの薬物の作用点となっており、その総合的理解は薬物の効果発現を理解する上で不可欠である。本科目は、生体内で生み出される生理活性物質の作用発現機構に関する基本的事項を修得し、本科目終了後に始まる「薬と病態」シリーズ講義を学ぶための基礎を作る。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の25%が正答率80%以上であり、不合格者は4名であった。不合格者のうち、2名は留年し、残り2名は学業不振を理由に退学しており、本授業のみ成績不良であったわけではないことがわかる。したがって、目標は概ね達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「生体内で起こっている化学反応には、どのような生理活性物質が関わっているのかを詳しく知ることができました。」とのコメントから、到達目標を達成していると判断し、特に改善は必要ないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

「NEW薬理学改訂第7版」参考書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、適宜、プリントを配布した。わからないところはメールによる問い合わせまたは直接質問に来るように指示した。

2) 自己点検・評価

授業評価は、すべての項目で平均点を上回っており、試験の不合格者も少なかったことから、現在の教育方法に問題はないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は、すべての項目で平均点を上回っており、不満や改善を要望する自由記述もなかったことから、現在の授業方法を継続する予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は特に行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

3人の教員で分担しているため、勉強がしづらい面はあるが、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の25%いたことから、試験問題の内容及び難易度は適切であったと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、成績の悪い学生の多くは試験勉強のスタートが遅いことが主な原因と考えられるため、早期に勉強を開始するように強く指導したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（精神疾患）（薬理系6）	第3学年
科目責任者（記載者）	関 健二郎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

精神疾患治療の中心となる薬物療法において、薬の作用、副作用、相互作用などに精通して臨床現場でその能力を十分に発揮するため、本科目は、様々な精神疾患の症状や病態生理について学び、それらの疾患に用いられる治療薬の作用機序、副作用、多剤併用による相互作用ならびに臨床適用についての知識を身に付けることを目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

50人全員が受験資格を有し、1人欠席による追試験、再試験は16人と例年よりも多めだった。一方、90点以上の成績の学生も12人いたことから、難易度は例年より若干易しめであったと思われる。成績の格差が激しい印象で、本試験で十分勉強していない学生の割合が高まっている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

科目別の回答率が36%と低く、自由記述欄も1つしか無かった。そのため、毎年書かれている要改善ネガティブな記述は一つも無かった。全ての項目で全体平均を超えていることから、次年度も今年と同様に勧める予定でいる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

「授業の資料を作らず、スライドも使わず、教科書と板書だけで授業するのは教員として怠慢である」という意見を受けた。しかし、NEW薬理学と薬物治療学の教科書2冊を使い、教科書のどこに何が書いてあり、どれが大事でどれは覚える必要が無いかを全て授業中に確認してもらいたいと思って講義しており、試験の難易度が高いにも関わらず上位が例年よりも多かったのが今後もこのスタイルを継続したい。

2) 自己点検・評価

定期試験の結果を90%、宿題提出を10%として形成的評価も取り入れている。今後も同様の方針で行う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

科目別の回答率が36%と低かったとはいえ、全ての項目で全体平均を超えていることから、次年度も今年と同様に勧める予定でいる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

50人中5人が最終的に不合格となった。再試験の難易度は、例年ど全く同じと評価している。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

欠単位になった学生が5人いたことから、本試験から勉強時間の確保の重要性について学生に伝えるよう努めたい。また、学生が勉強しやすいように覚えるべき内容や理解すべき内容について徹底していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（神経・筋疾患）（薬理系7）	第3学年
科目責任者（記載者）	関 健二郎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

脳・神経・筋疾患の薬物療法において、薬の作用、副作用、相互作用などに精通して臨床現場で能力を発揮するため、脳神経変性による運動障害や記憶・認知機能障害、けいれん発作などを引き起こす脳神経系の病態生理及び治療薬に関する基本的な知識を修得する。また中枢神経系に作用して効果を発揮する癌性疼痛薬や全身麻酔薬の適切な使用法、種類、作用機序などを修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

50人全員が受験資格を有し、再試験は19人と例年通りだった。一方、90点以上の成績の学生も14人おり、この割合も例年通りであった。今年も成績の格差が激しい印象で、本試験で十分勉強していない学生の割合が例年よりも非常に高いと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業のスピードが速いとの指摘があった。これは講義している自分でも実感している。授業時間に比べて覚えるべき、理解すべき内容が多いため、教科書の解説を中心とした授業だけでなく、要点をまとめた資料の配布などで授業時間の確保に努めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

毎回記述式問題を40問ほど宿題で課し、C-LeArningで提出した学生には1人ずつフィードバックした。これにより、学生の理解度と自分の授業の欠点も見つかった。土日もメールで質問を受け付けているが、毎週多くの学生が平日土日問わずこれを利用するので、今後も継続する。

2) 自己点検・評価

NEW薬理学と薬物治療学の教科書2冊を使い、教科書のどこに何が書いてあり、どれが大事でどれは覚える必要が無いかを全て授業中に確認してもらいたいと思って講義しており、今後もこれを継続したい。また薬理系7では、パーキンソン病やてんかん、全身麻酔の様子など、ビデオで症状や方法を見せると学生の理解度が高まるので今後も継続する。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業時間に比べて覚えるべき、理解すべき内容が多いため、教科書の解説を中心とした授業だけでなく、要点をまとめた資料の配布などで授業時間の確保に努めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

50人中4人が最終的に不合格となった。なお、再試験の難易度は、例年ど全く同じと評価している。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

欠単位になった学生が4人いたことから、本試験から勉強時間の確保の重要性について学生に伝えるよう努めたい。また、学生が勉強しやすいように覚えるべき内容や理解すべき内容について徹底していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（感染症）（薬理系8）	第3学年
科目責任者（記載者）	三宅 正紀	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

病原微生物が引き起こす各種感染症の病態並びに感染症に対する化学療法薬の分類や作用機序、主な特徴、副作用、薬剤耐性の獲得機構について理解すること、および微生物の滅菌・消毒方法、現行ワクチンの種類や特徴、作用機序について学ぶことを一般目標とし、8の到達目標を設定した。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験の結果から、およそ達成していると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

当該年度より本科目担当が科目責任者単独に変更され、使用教科書、スライドも一新した。情報量が多い科目で、教科書内容も豊富なことから、習熟すべき事項の明瞭化のため、独自スライドを作成し講義を行ったが、学生から講義内容のより具体化を求める意見があった。これには重要点をより明示する内容にスライドをブラッシュアップし、個々の学生が必要な情報をより選別しやすくし、インプットの効率化を図れるよう対応したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行った。指定の教科書に沿って毎回の講義範囲を要約したオリジナルのスライドを用いて講義を行った。本講義資料は、毎回の授業の最低前日までにc-leArningにアップし、予習・復習に利用できるように配慮した。講義における双方向性の確保は現状行えていないが、講義後の質問やメールによる問い合わせには丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

これまでの講義方法で特に問題はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

c-leArningのドリル機能を使用し、課題として講義を行った箇所に関連した問題を取り組ませ、正解・解説を適時アップし、学生自身が習熟度を確認できるシステムを構築する。学生の理解度を都度確認することで、学生の苦手な部分を把握して再度説明する時間を設けたり、個別の質問にも丁寧に対応するなど、双方向性を担保しながら進めていけば、より学生のニーズに合った合理的な学習に導く事ができると考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の成績を100%とし総括的評価を実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

49名が受講し、定期試験本試験において23名が単位取得基準に到達した。残る26名のうち、22名が再試験により、3名が再々試験により単位を取得した。不合格となった1名は、再試験にて無断での試験の不受験によるものであった。その上での上記合格率であり、評価に特に問題はなかったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も今年度と同様な方法で評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（心・血管・呼吸器疾患）（薬理系9）	第3学年
科目責任者（記載者）	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「循環器系・呼吸器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を身につける」ことを到達目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業は授業計画通り進めることができた。学生アンケート結果では、全ての項目で平均点以上の評価（回答率65.3%）であり、88%の学生が授業の関連分野に関心を持ったと回答していること、また本試験の平均点が71.9点であったことから到達目標を達成できている。ただし、本試験では2割弱の学生が、50点未満であり日々の復習をするほどの興味を持たせることはできていない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標に関しては現状通りとする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、講義を100%で実施した。授業はパワーポイントを活用し、資料は発表資料をpdfファイルで配布している。関連する国家試験問題を講義中にも紹介し、またC-LeArning上で確認問題を自ら解くことで重要なポイントの復習と整理ができるようにしている。授業中に不明な点があるかどうかを確認し、理解できない点を直接あるいは電子メール等を使用し質問するように促している。

2) 自己点検・評価

今年度も、講義資料を更新し、最新の情報をとり入れた授業を行うことができた。教育方法に関する評価も平均点以上であった。到達目標達成のための教育方法として適切であったと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の得点分布から判断すると、3割程度の学生は定期試験本試験の段階では十分に理解できていない。復習が十分に行われていないことから、授業中に演習を行い解説を行うなどで対応したい。C-LeArningによる問題演習は、学生の理解度を深めるのに役立っていると思われるため、内容を充実させたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わず、総括的評価を定期試験（100%：佐藤栄担当分60%、佐藤研担当分40%）で行った。出題形式として、記述式問題、選択肢問題、正誤問題を組み込み、単に覚えているだけではなく、薬物の作用機序等について説明ができるなど理解度の深い学生の成績が高くなるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅している。履修を途中で辞めてしまった学生が2名、単位未習得の学生が3名いた。進級できた学生は全て単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も定期試験で統括的な評価を行う予定である。理解度を高めるためにC-LeArningでの小テストを実施し、知識の習得のために問題演習を繰り返し実施する習慣をつけさせる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（腎・泌尿器・生殖器疾患）（薬理系10）	第3学年
科目責任者（記載者）	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「泌尿器系・生殖器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を身につける。」を到達目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業は授業計画通り進めることができた。学生アンケートについては、全て平均点以上（回答率32.7%）であり、本試験の平均点は83.2点であることから目標を達成できている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標に関しては現状通りで問題ない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、自作の資料を使用し、100%講義形式で実施した。
（佐藤）関連国家試験問題を紹介し、C-LeArning上で確認問題を解かせて重要なポイントの復習と整理を行わせている。
（中川）C-LeArningを活用し、事前に講義動画を視聴後、確認テストを受けさせ、講義中にはIn Class Quizを実施して理解不足の解説を行い、授業後にドリルを活用して復習させている。

2) 自己点検・評価

C-LeArningを積極的に利用している。中川担当授業では、学生アンケートの中に昨年度と同様に「事前に予習用動画を公開してくれるため、次に習う講義をスムーズに理解でき、講義内でも演習問題を多く解くため、理解が深まりやすいと感じた。」とあり、適切な教育方法であった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の得点分布から判断すると、1割の学生は学習の要点を把握できておらず、各回の授業ごとの復習は行っていないようである。以下の点に注意する。
（佐藤）作用機序などをイメージとしても理解できるようにパワーポイントをさらに活用する。授業中に関連問題を解かせて解説を行う。また、C-LeArningを利用した問題演習を充実させる。
（中川）双方向性の授業を継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わず、総括的評価を定期試験（100%：佐藤担当分50%，中川担当分50%）で行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅している。履修を途中で辞めてしまった学生が2名、単位未習得の学生が2名いた。進級できた学生は全て単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も定期試験で統括的な評価を行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（消化器疾患）（薬理系12）	第4学年
科目責任者（記載者）	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

第一に、消化器系疾患の病態（発症機序、症状など）を理解する。第二に、消化器系疾患治療薬の作用機序、薬理作用および主な副作用を習得する。最後に、最新の薬物治療ガイドラインを基に、実際の医療現場で用いる薬物を把握し、適正に使用できる能力を身に着ける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の18%が正答率90%以上、また35%が正答率80%以上であり、最終的な合格率が100%であったことから、教育目標は概ね達成できたと考ええる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業の内容がわかりづらかったといった自由記述は見られなかったことから、試験の成績も加味すると学生は授業内容をきちんと理解できており、到達目標を変える必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本科目は講義の割合が100%である。「NEW薬理学改訂第7版」（南江堂）と「薬物治療学改訂第8版」（南山堂）を教科書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、適宜、わかりやすい図を配布した。また、わからないところは質問に来るように指示し、質問に来た学生に対しては、授業ノートや教科書のどこをみれば正解にたどり着けるのかを丁寧に説明した。

2) 自己点検・評価

授業はシラバス通りに進行し、定期試験の成績も良好であり、本授業は問題なく実施されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価では、ほとんどすべての項目で平均点を上回った。アンケートの回収率が38.2%と低かったが、授業に対する不満のような自由記述もなく、未回答者は特に不満がなかったと解釈でき、来年度も今年度のやり方を踏襲する予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の35%いたこと、最終的な合格率が100%であったことから、成績評価は適切になされたと考ええる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、CBTや国家試験を意識し、記述式問題とマークシート方式の問題をうまく織り交ぜた出題にすることで、学生の学力を適切に測り、かつCBTや国家試験の対策も同時に行いたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル（神経疾患） 1	第3学年
科目責任者（記載者）	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

神経疾患の病態を理解し、代表的な疾患について問題点を整理し、最適な薬物治療を立案、選択できるようにすること、および、そのための代表的な治療薬についての薬理、薬物動態に基づいた使用法や起こりうるべき有害反応や相互作用の対処方法を習得することを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

科目の到達目標については、課題に対するレポートの結果から、一般目標および到達目標は達成できていると思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

例年と変わらないため、特に改善方策は無し。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は小グループに分かれて問題解決型学習（PBL）チュートリアル形式のアクティブラーニングで実施し、疾患に対する講義と、症例課題を提示し、講義では毎回パワーポイントファイルを用いて説明し、板書によっても理解を促した。課題に対しては小グループに分かれて学習、討論（SGD）し、グループ発表を行った。グループ発表および個人のレポートの評価はルーブリック評価により、達成度を客観的に評価した。

2) 自己点検・評価

教育方法に関しては、講義内容は薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠しており、学生アンケート結果からも、「教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した」、「授業はよく準備がなされていた」、「教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた」などを始めとして全てが総合平均を上回っており、現状の教育方法に問題は無いと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「この授業の関連分野に関心を持つことができた」の項目について5.9%の学生にそうは思わないという回答があったため、次年度は関連分野について関心を持てるよう、考えていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価はレポートの結果を100%とし、総括的評価をおこなった。なお、講義時間の制約もあり、形成的評価はおこなわなかった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

レポートは提出者の合格率が100%であるため、授業概要に述べられている到達目標は一応達成できていると思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル（循環器疾患・代謝性疾患）2	第3学年
科目責任者（記載者）	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

循環器疾患・代謝性疾患の病態を理解し、代表的な疾患について問題点を整理し、最適な薬物治療を立案、選択できるようにすること、および、そのための代表的な治療薬についての薬理、薬物動態に基づいた使用法や起こりうるべき有害反応や相互作用の対処方法を習得することを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

科目の到達目標については、課題に対するレポートの結果から、一般目標および到達目標は達成できていると思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

例年と変わらないため、特に改善方策は無し。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は小グループに分かれて問題解決型学習（PBL）チュートリアル形式のアクティブラーニングで実施し、疾患に対する講義と、症例課題を提示し、講義では毎回パワーポイントファイルを用いて説明し、板書によっても理解を促した。課題に対しては小グループに分かれて学習、討論（SGD）し、グループ発表を行った。グループ発表および個人のレポートの評価はルーブリック評価により、達成度を客観的に評価した。

2) 自己点検・評価

教育方法に関しては、講義内容は薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠しており、学生アンケート結果からも、「教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した」、「教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた」、「教員の授業に対する熱意を感じた」などを始めとしてほぼ全ての項目で総合平均を上回っており、現状の教育方法に問題は無いと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた」で4.0%、「教員の話し方は聴き取りやすかった」や「教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた」で2.0%の学生にそうは思わないという回答があったため、次年度はこれらの項目についてもそう思わないをなくすよう改善を行いたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価はレポートの結果を100%とし、総括的評価をおこなった。なお、講義時間の制約もあり、形成的評価はおこなわなかった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

レポートは提出者の合格率が100%であるため、授業概要に述べられている到達目標は一応達成できていると思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル（消化器疾患） 3	第4学年
科目責任者（記載者）	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

消化器疾患の薬物治療に貢献できることを目的とし、各種臨床データを含む患者情報から疾患の病態を理解し、最適な薬物治療の立案に必要な代表的治療薬の作用機序、使用法ならびに副作用とその対処方法について習得する。そのためPBLチュートリアル形式にて授業を行う。また、代表的な症例について小グループによる討議（SGD）を行い、知識、態度、技能の習得を目指す。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、SGD、症例についてのグループによる発表、定期試験の成績（レポート）を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

現状では時間的な制約のため、扱える疾患が限定されているが、出来るだけ、基本となる疾患の症例を多く学習できるように、検討してゆきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教育方法として、講義30%とし、残りは課題に対してのSGD（小グループ討論）、課題の発表などの演習とした。指定教科書として、「薬物治療学」改訂第10版、吉尾隆編 南山堂、「今日の治療薬 2023」南江堂を用いた。さらに、毎回の講義には、重要な点はパワーポイントファイルで説明し、そのファイルをプリントして配布した。また、毎回の講義時およびSGD時に、学生からの質問について教員がその都度行った。

2) 自己点検・評価

本授業は双方向性授業を目的としたチュートリアル形式であるため、アンケート評価も授業はよく準備がなされていた、教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促した、教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれたとの双方向性についての評価がより高く、本来の目的が十分達成できていると思われた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教育方法については現状の方向性を維持して行きたいが、授業が理解しやすいように工夫されていたとの項目の評価がやや低かったため、ルーブリック評価基準を学生にあらかじめ提示することも検討して行きたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

SGDおよびレポートの評価にはルーブリック評価をおこない、学生の理解度についてSGDにおける貢献度、コミュニケーション能力、レポート内容の構成力、設問に対する情報収集能力、理解度、レポートの構成能力について形成的評価をおこなった。また、小グループ討議（SGD）や発表会における参加態度50%、レポート試験の結果（50%）により総括評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、試験結果の合格率が100%であることを考えると、当初の目的は達成されていると考えられた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価の結果からは、特に問題は無いと考えられるが、今後は症例を増やしたり、やや複雑な症例を提示したりすることなどを考えてゆきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床検査学	第3学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

身体の病的変化から疾患を推測できるようになるために代表的な症候、病態、臨床検査に関する基本的な事項を修得することが、一般目標である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

最終的に樹園資格のある学生全員が合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書として「薬学生のための病態検査学」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。既学修事項については理解度を確認しつつ、授業を進めた。さらに、実際の臨床データをもとに、検査値をどのように解釈していくかについてわかりやすく講義・演習を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨床的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、実際の臨床データを用いた演習は、学生の興味を引き、検査値がどのように臨床で用いられているのかの理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による授業評価は高かった。丁寧に聞きやすく、理解しやすく、テンポの良い授業であったとの感想があった。したがって、現在の授業形式を継続し、必要に応じてアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に定期試験受験資格がある全員が合格しており、問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないとする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬理学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の作用を理解するためには、薬物を実験動物に投与して、その薬理作用を実際に観察することが重要である。本実習では、薬物の作用点、作用機序、薬理作用について、小動物およびその摘出臓器を用いて代表的な中枢神経作用薬、自律神経作用薬等の効果を観察する。また、薬理学研究における最低限の手技手法を経験し、会得する。これにより、生体についての生物学的“ものの考え方”を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

昨年度から従来の実習形態に戻り、動物を使った実習（Section AとB）とコンピューターシミュレーションを用いた実習（Section C）を行った。態度・レポート・実習試験の総合点で90点以上が全体の9%、80点以上が全体の85%おり、全員合格であったことから、目標は達成されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善する箇所は見当たらない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習時間の半分以上は実験が占めるが、その他の時間ではデータ解析の方法や実験結果の分析・考察のやり方、レポートの書き方等について詳しく説明している。

2) 自己点検・評価

自由記述で、「マウスを扱う実習では、研究室の上級生がしっかりサポートしてくれた点良かった。」とのコメントがある一方、「マウス実習に関しては、個人での実習にした方がいいと思う。関先生の実習時に、周囲の音が気になる場合があります。集中して実習に望みたいです。」というコメントもあり、実験室における学生への対応に難しさがある。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実験中は、班員同士のディスカッションや実験のやり方の相談等でにぎやかになることはあるし、必ずしも静寂が良いというものではない。ただし、実験と関係のない話で盛り上がり、他の人の邪魔になることは良くないため、状況に応じて教員が対応していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習態度30点、レポート40点、筆記試験30点の合計100点満点で評価する総括的評価を行っている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

不合格者はおらず、実習態度、レポート、及び筆記試験の間で大きな得点の偏りもなく、評価方法については特に問題は無いと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価については特に学生からの不満はなく、現状のままで問題無いと考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品毒性学	第4学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品は有効性と安全性（副作用）のバランスの上に成り立っている。医薬品の副作用に関する知識は、薬剤師が服薬指導を行う際に必要となるだけでなく、薬害を未然に防止するという意味でも非常に重要である。医薬品毒性学では、薬物の過剰摂取や特殊な化合物によって引き起こされる中毒症状とその解毒法など重大な副作用や発生頻度の高い副作用を引き起こす薬物とその副作用の発生機序や予防・治療法を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

63人が受験し、再試験対象者が2人だけであったので最低限の授業はできていると考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本年度は3人の教員によるオムニバス講義を実施した。内容的には3年生まで科目の復習が多いが難易度が高く勉強しにくいことを配慮し、練習問題などを各担当教員が配布したり、C-LeArningを十分活用し、質問もメール等で随時受け付けた。本年度は、アンケート回答率が約40%で、自由記述欄の書き込みは一つも無かった。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

指定教科書の解説を中心に、一部は資料や練習問題を追加することで当該内容の理解を深めることを目指した。

2) 自己点検・評価

学生による評価は概ね4以上であり、全ての項目で全体平均を上回った。昨年度評価の低かった双方向の学生参加型授業に関する評価は大幅に改善されたと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今年度は学生コメントは一つも無かったが、昨年まで何度か指摘されていた板書の字が小さいことや双方向型の授業の行い方などの問題はこれからも気を付けていきたい。現在は3人で担当しており、全員が同じように向上していけたらと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

最終的に全員が合格点に達したため、成績評価は適切であったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

欠単位になった学生が1人もいなかったこと、4年生の科目であることと座学中心の科目であるため、今後も定期試験100%で評価を行っていく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療統計学	第 6 学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床研究を行う上でデータ解析を適切な統計処理で解析出来る能力を身に着ける。また、臨床論文などの研究内容について、正しい方法論で正しく統計処理されているか、科学的根拠に基づいた批判的吟味を身に着ける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

シラバス通りに授業を進め、予定通り到達目標をすべて達成できた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価は概ね全項目が全体平均を上回り良好であった。学生からは時間割に関する要望があった（必修であり、月曜日の遅い時間よりも来やすい時間がよかった）。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

オリジナルテキスト（全76頁・穴埋め式）を中心に授業を進め、章ごとに問題（別冊）と解説を扱った。

2) 自己点検・評価

オリジナルテキストはブラッシュアップを重ね、難解な内容を系統立て、できるだけシンプルに伝えられるよう工夫した。また、多数の問題演習を盛り込んだ。学生のコメントに単に国家試験対策でなく、実際に統計解析を行うにあたっての意識や注意点がわかりよかったとあり嬉しく思った。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価は概ね全項目が全体平均を上回り良好であり、今後も継続したい。一方、当該年度から紙媒体の配布をなくす全体方針に対する要望が1件あった。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

シラバスで提示した通り、定期試験（100%）とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

理解し覚えるべきことが膨大であるにも関わらず、全員が本試験1回で合格し、また平均点86点、全体の4割ものが90点以上を獲得していた。考える系の問題（論文を引用した問題）、記述問題に関しても良好であった。卒業研究および必修・アドバンスト科目、国家試験対策等の忙しい最中によく学んでおり、学生の努力を高く評価したい。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特記事項なし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物と製剤材料の性質を理解し、応用するために、それらの物性に関する基本的知識、および物理化学的な評価法に関する知識を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目の合格率は88.3%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生から特に不満がないことから、大きな変更は考えていない。前年度と同様とする。しかし、もう少し実務につながる例を入れながら講義を行う。自作の資料は、予習ができるように開始講義の1コマ前に配布するようにする。学生の理解力を把握するために、宿題を課す（成績には反映させない）。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBTや国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。

講義:80%、演習:20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、分からない部分を自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が64.0であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%) 88%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験の平均点が64.0点であり、本科目の合格率が88.3%と昨年からわずかが改善された。成績の分布が二極化傾向にあり、勉強をやらない学生が多くなってきた感がある。この学生達をどのように勉強させていくかが今後の課題だと思っている。

学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。
3人の教員で本科目を担当していることから、教員間での情報交換をもっと密に行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	製剤学	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の用途に応じた適切な剤形を調製するために、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識と調製を行う際の基本的知識を習得する。また、医薬品開発と生産の実際を理解するために、医薬品創製と製造の各プロセスに関する基本的知識を習得し、社会的重要性に目を向ける態度を身につける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

製剤学では、物理化学的性質と生物化学的性質を調べたうえで、製剤の特徴を理解し、さらには、製剤が一定の品質を有していることを保証するためには何が必要であるかを理解する上で重要な学問であり、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識、医薬品創製と製造の各プロセスを製剤化の方法と意義を客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が散見された。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価から製剤学の授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をまじめに受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側もしっかりと復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義70%、演習30%の割合で授業を進めた。補助プリントと穴埋め式スライドを用いながら授業を行なった。また、授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解きながら知識の定着を図ると共に、苦手な計算問題に多くの時間を割いた。

2) 自己点検・評価

物理化学、分析化学および物理薬剤学との講義と連携しながら、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識、医薬品創製と製造の各プロセスに関する基本的知識を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、プリントとスライドを併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各単元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解くことにより評価した。また、演習問題の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。定期試験と追・再試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を多く取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が90%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の成績に加え、当日の授業出席を加味して総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	杉野 雅浩	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の体内動態を予測するのに必要なADMEの知識を修得し、薬物の生体内運命を理解することを目標にした。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験、課題、アンケート結果から目標は概ね達成できたと考えられる。しかし、学生間で学習意欲や知識習得の差が大きい。特に応用問題に対する正答率に顕著な差が見られた。昨年と比べ、中間試験の導入や課題の増加をし知識の早期定着を狙ったが、応用面では依然として不十分だったと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

ADMEに関する最低限の知識は修得できたと判断しているが、応用力に関してはまだ目標に到達していない。今後は演習問題の量と質のバランスを意識して課題として与え、適時個々へのフィードバックを行うことで、応用力の涵養を目指す。さらに、本科目の知識をどのように用いたら良いのか、簡単な具体例を示し、能動的な学修をしてもらえるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義は主にプレゼンテーションと教科書を用いて進めた。講義資料には演習問題や国家試験の過去問題を内容毎に分けて載せ、直前で教えた内容の確認に用いさせ、学生自身が学習進捗状況を把握できるようにした。双方向性講義とはならないが、課題レポートは即日チェックを行い必要であれば再提出を促した。また、課題は成績に反映するため返却は行なわなかった。この課題を通して、学生の進捗状況の把握に努めた。

2) 自己点検・評価

復習を行うための教材提供は十分行ったと考えているが、個々の学生が予習・復習すべき箇所がはっきりしなかったと考えられる。これらを含め、やや学生とのコミュニケーションが不足したように感じた。昨年よりも講義資料のアップロードは早めに行うことができ、予習には十分な時間を確保した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義資料のタイトルページには、シラバスの内容を含め、シラバス活用を促す。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、課題レポートの提出状況から10%分の成績評価を行った。
形成的評価として、中間試験から30%分の成績評価を行った。
総括的評価として、定期試験結果から60%分の成績評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

課題は、学生自身の学習の進捗を把握するのに役立ち、また多くの学生にも復習を行うきっかけを与え良い影響をもたらしたと考えられた。さらに学生の理解度や説明不足の箇所の把握に大いに役立った。定期試験は知識をどのように用いたら良いか考えさせる問題を多く出題した。過去問と聞き方を変えると正答率が顕著に低下するため、応用力を付けさせるようにしたい。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義時間中に過去の定期試験の問題に触れられる機会を少し設けるようにしようと思う。正答率は低かった問題があることから、応用力が身につくには至らなかったのだと考える。今後は例題の量と質のバランスを考慮し、知識の定着と応用力の涵養をはかる工夫をしていこうと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

製剤化の方法と意義を理解するために、薬物と製剤材料の物性、医薬品への加工に関する基本的技能を習得する。
また、薬物の生物内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を習得し、それらを応用する基本的技能を身につける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

薬剤学実習は、製剤化の方法と意義ならび薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を理解する上で重要な実習であるが、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が見受けられた。また、学生の能動的活動を基盤としており実習中に班員で話し合い実験回数の変更など「目的に合った方法にて結果を得ること」を習得することができていない学生も見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価から薬剤学実習に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が実習をまじめに受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も実習前の予習ならびに実習後の復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習80%、講義20%の割合で授業を進めた。実習書（奥羽大学薬学部薬剤学分野 編）を用い、さらに分かりやすく板書を行いながら実験操作の説明を行なった。また、実習の最後に当日の実習内容に関する口頭試問を行いながら知識の定着を図った。

2) 自己点検・評価

製剤学、物理薬剤学、生物薬剤学、薬物動態学との講義と連携しながら、製剤化の方法と意義ならび薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を理解する上で実習の基本的操作を習得させる。そのために教官側は分かりやすい実験操作の説明を行うと共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、実習書に沿って板書を併用させ実験操作の説明を行う。当然のことではあるが実習には必ず毎回出席してもらい、事前に実習書を熟読してもらい当日の実習内容を大まかに理解し、その日のうちに実習内容に関して復習を徹底させたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習終了時に得たデータを教官と考察しながらディスカッションを行うことにより評価した。また、質問内容の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。実習態度、実習レポート、実習試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

レポート内容を精査し、単に実習書を書き写しただけでなく、しっかりと実験結果から考察が行えているか確認した。また、実習最終日には実習内容を理解したかどうか、単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね実習内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実習態度、実習レポート、実習試験の結果に加え、当日の実習に対する理解度を問う口頭試問を加味して総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学Ⅲ	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の体内動態解析能力を身につけ、それを基に薬物の投与設計への参加などの薬剤師業務を実施できる。
医薬品開発業務特に、非臨床・臨床研究に参画できる能力を身につける。
国家試験の問題に対応できる能力を身につける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目の合格率は94.0%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの講義に対する不満は特にないことから、今年度も引き続き同様に行うものとする。
薬物動態学に興味を持てるように、臨床薬物動態学の内容も増やす。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBTや国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。
講義:80%、演習:20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、分からない部分を自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が78.0であり、昨年より14点ほど上がった、特に問題がある講義ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。
臨床的な内容も入れることにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率(%) 94%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験の平均点が78.0点であり、本科目の合格率は94.0%であることから概ね科目の到達目標を達成した。
しかし、成績の分布が二極化傾向であり、不得意の学生に対する対応が必要と考える。
学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義の復習としては宿題の解説を重点的に行うことで着実に学生の知識として植え付けていきたい。
宿題に関しては、今後も続けていく。
実例や実際に体内動態解析をする機会（見せるだけでも）を設け、興味を持てる授業にしたいと思う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物相互作用学	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の生体内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を習得し、それらを応用する基本的技能を身につける。
特に、TDMの意義、治療薬物投与設計および薬物動態学的相互作用に関する基本的事項を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目の合格率は90.0%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生から特に不満がないことから、大きな変更は考えていない。前年度と同様とする。
もう少し実務につながる例を入れながら講義を行う。
学生の理解力を把握するために、宿題を行う（成績には反映させない）。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBTや国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。また、投与設計に必要な重要な公式等はその解法や使用方法を教科書より丁寧な内容とし配布した。
講義30%、演習70%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。その結果、平均点が68であり、昨年とほぼ同じであり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。
演習問題に関しては少し問題を入れ替える。
実務の内容を取り入れる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 90%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験の平均点が68点であり、本科目の合格率は90.0%であるため、概ね科目の到達目標を達成した。
学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。
2人の教員で本科目を担当していることから、教員間での情報交換をもっと密に行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物送達システム	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

DDS製剤の使用において、その目的と製剤学的特徴を理解したうえで使用する医師、看護師そして患者などに対して適切な情報を提供できる知識を身につける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目の合格率は96.0%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの講義に対する不満は特にないことから、今年度も引き続き同様に行うものとする。
薬物送達システムに興味を持てるように、上市されている製剤の内容も増やしていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

小テストまでは行っていないが、学生の講義内容の理解力を計るために薬剤師国家試験問題形式の問題を講義の合間に入れている。
毎回講義に沿った宿題を課した。宿題を課すことで学生はその課題を解くために居室に来ることが多くなった。
講義80%、演習20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は、学生にとって理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。その結果、本試験の平均点が76であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。
臨床的な内容も入れることにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験の平均点が76点であり、本科目の合格率は96.0%であったことから概ね科目の到達目標を達成した。
学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。
国家試験問題にDDS実例が多くなってきたことから、DDS製剤の臨床の実例を講義に入れるようにする。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

薬物送達システムは薬剤学全般を理解していないといけなため、物理薬剤学、生物薬剤学、薬物動態学の講義から薬物送達システムを意識し、科目間の連携をうまくやっていけるようにすることが必要。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物代謝学	第3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

有機化学を基礎として、薬物代謝の観点から薬物代謝酵素の性質および酵素反応機構を理解し、臨床における薬物治療が薬物代謝に関係していることを、ヒトと薬物の相互作用の観点から学ぶ。また、薬物代謝と薬効・毒性の発現、変化について理解を深める。さらに、薬物動態学、生物薬剤学、薬物治療学との関連性について、理解を深めることを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、定期試験の成績を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えら

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

毎回の講義時に、基礎知識の理解度を確認するために特に必須と思われる点について、学生に質問を行い、双方向性について積極的に検討して行きたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は全て講義であり、指定教科書として、「薬物代謝学」第3版、加藤隆一、山添康、横井毅編 東京化学同人を、また、参考書として「医療薬物代謝学」鎌滝哲也、高橋和彦、山崎浩史編 医学評論社を用いた。さらに、毎回の講義には、重要な点はパワーポイントファイルで説明し、補足講義を板書で説明した。また、毎回1～2問の復習問題を提示し、次回講義時に解答を提示することにより、理解度をチェックした。

2) 自己点検・評価

授業はよく準備がなされていたや、シラバスに沿って、系統だって行われていたの項目が評価が高かったが、理解しやすいように工夫されていたや、効果的に学生の参加を促す双方向性についてはやや評価が低かった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義内容は薬学教育モデル・コアカリキュラム（新カリキュラム）に準拠しているため、教育達成目標は今年度と変化はないが、講義終了後の復習問題をより吟味して提示ならびに解説をおこなうことと、双方向性についてより推進してゆきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

講義時間に制約があることから、形成的評価は実施せず、定期試験の結果（100%）により総括的評価をおこなった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、定期試験の成績を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「授業は理解しやすいように工夫されていた」の項目が全体よりやや低めに評価されているので、次年度はパワーポイントファイルを中心として、よりわかりやすく講義を行うこととしたい。また、要点に関しては、重要な項目は教科書の対応するページ数を示し、理解しやすくするようにしたい。また、できるだけ、聞き取りやすいよう、話し方も工夫したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	セルフメディケーション学	第3学年
科目責任者(記載者)	伊藤 鍛	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

要指導医薬品・一般用医薬品及びセルフメディケーションに関する基本的知識を修得する。併せて、セルフメディケーションでの薬物療法実施に必要な情報を収集するための基本について学習する。以上が本科目の到達目標です。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

おおよそ達成できていると考えています。理由は、コアカリに準拠していることと定期試験結果から上記の目標がおおよそ達成できていると判断したからです。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価に関しては、全ての項目で全体平均程度であった。平均以下の項目は”授業はよく準備がされていた”、”シラバスに沿って、系統だって行われた”及び”教員の話し方は聞き取りやすかった”の3項目であったが、全体との差はわずかであった。また、それ以外の項目は平均以上であった。一方、授業内容に関して、臨床の話が効けて良かった等のポジティブなコメントも寄せられた。以上より、大きな改善は必要ないと考えています。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合は講義が100%である。授業は教科書として「OTC医薬品学」（南江堂）を用いました。双方向性方策については、授業時に机間巡回を行い、質問をなげかけ発言等を促すなどの工夫をしました。また、講義終了後に質問を受付対応しました。

2) 自己点検・評価

授業時間数の制約もあり、概ね問題点はないと思います。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価に関しては、全項目で全体平均程度であった。平均以下は”授業はよく準備がされていた”、”シラバスに沿って、系統だって行われた”、”教員の話し方は聞き取りやすかった”の3項目でした。この点について全体との差は僅かであり、全般的に大きな改善は必要ないと考えました。その一方、平均値を下回った3項目について改善が必要と考えます。特に話し方については、聞き取りやすい発音を常に心掛けたいと考えております。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は時間的な問題もあり実施していません。総括的評価については授業への取り組み状況10%、小テスト結果30%、定期試験結果60%の割合で100点満点にて評価し、65点以上を合格としました。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

全員合格の結果が得られ問題はないと考えます。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの授業評価に関しては前述の通りです。成績評価については全員合格ですので現行から変更なしで臨みたいと考えています。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	漢方医学	第4学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

漢方薬の特徴および漢方医学の基本概念について用語を含めて解説した。漢方処方分類を配合生薬との関係から説明した。日本薬局方に収載されている漢方薬に適応する証、疾患について説明できるように、代表処方と類似処方をまとめ、キーワード化して説明し、また漢方薬の副作用について解説を行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

毎回、ピックアップした漢方薬処方を、記述式の知識確認シートにおいて、配合される生薬名、効能効果、生薬の有効成分、化学構造式などを学生が記載し、小テストとして回収した。漢方医学、漢方薬の特徴および漢方薬の副作用について解説した。日本薬局方に収載されている漢方薬に適応する証、疾患、漢方薬の副作用について説明した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

毎回の小テスト（知識確認シート）は学習方法として知識の定着に適切であると考えた。漢方薬をキーワード化して説明するように心がける。一つの問題の質問方法を変えたり、選択肢を変えたり、いろいろな角度から繰り返し学習できるようにする。イメージが付きやすいように、写真、画像、配合生薬の見本、漢方薬資料を多く使っていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

毎回の授業で復習を行い、重要な漢方処方を分類して説明し、ピックアップした漢方処方を記述式の知識確認シート（小テスト）で、生薬名、効能効果、特徴となる生薬の有効成分、化学構造式などを確認している。また、同時に覚えるべき類似の漢方薬をキーワードとして理解できるようにして知識の定着をはかっている（7回）。

2) 自己点検・評価

診断体系分類により30種類前後の漢方処方を構成生薬とともに解説できた。漢方の用語、適応、副作用を項目ごとにまとめ、知識確認シート（小テスト）により学習知識のまとめを実施した。漢方医学をキーワードでまとめて覚えることができるように説明した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業資料による講義に加えて、よく使われる漢方薬の添付文書による、効能効果、副作用の説明を実践するようにしている。類似処方について、構成生薬による比較を行い、繰り返し角度を変えながら講義と併せて実施する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回行う記述式の知識確認シートによって理解度を評価した（7回）。知識確認シートの記載方法・取り組みを把握することで総括的に評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

毎回の資料による復習で繰り返し学習したあと、資料を使いながら知識確認シートでさらに復習するようにし知識の定着を心がけた。キーワードでの分類、効能効果での分類資料を配布し、随時資料のアップデートを継続している。漢方薬と構成生薬とのつながりについて、把握できるように繰り返し学習を行うように心がけた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

漢方薬と構成生薬・薬用植物の関連性は、習熟度に個人差があるため、小テストを活用しながら、繰り返し学習ができること、また、イメージが付きやすいように、写真、画像、配合生薬の見本、漢方薬資料を多く使っていきたい。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になることを提供したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬局管理学	第4学年
科目責任者(記載者)	伊藤 鍛	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

地域薬局における施設・設備、書類、スタッフ、商品の管理について学習し、それに係る法規・制度を理解する。地域薬局における保険調剤・一般用医薬品、その他の商品販売について学習し、それに係る法規・制度を理解する。地域薬局業務に係わる調剤報酬・健康保険制度および介護保険制度の仕組みを理解する。以上を到達目標としています。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

おおよそ達成できていると考えています。理由は、コアカリに準拠していることと定期試験結果から上記の目標がおおよそ達成できていると判断したからです。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による授業評価はすべての項目で、平均値を上回っていた。またフリーコメントも”外部の薬局関連の人のお話を聞いたのが良かった”などポジティブな言葉もあり、大きな改善は必要ないと考えました。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

演習・講義等の割合は講義100%です。授業資料としては教科書は指定せず、教員が独自に作成した資料をプリントして学生に配布し授業に用いています。特に統計資料を読み解く力を養う観点から、厚生労働省等から配信されている医療統計データもダウンロード・印刷して授業資料としています。また、双方向性方策の項に関しては机間巡回を行い、質問をなげかけ発言を促す等の工夫をした。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価はすべての項目で、平均値を上回っていたことから、概ね学生さん視点での平均的な質の授業提供ができたと考えています。また、特に”教員の熱意を感じた”の項が学生さんから数値上、高く評価いただけたのが大きな励みとなります。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

各評価項目項のなかで、”教員は質問に対して、的確に分かりやすく答えてくれた”の項が比較的低値を示していました。質問に時間的制約もあり、丁寧に回答できなかったところもあったかと思っております。対策として、学生さんの質問をより丁寧に聴き取り、丁寧に回答することを改善策として挙げたいと思っています。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は時間的な問題もあり実施していません。総括的評価については授業への取り組み状況20%、小テスト結果20%、定期試験結果60%の割合で100点満点にて評価し、65点以上を合格としました。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

全員合格できたので問題ないと考えています。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの授業評価に関しては前述の通りです。成績評価については全員合格ですので現行から変更なしで臨みたいと考えています。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

上級学年で受講する薬学専門領域を修得するためには、各学年で学習する薬学基礎科目や薬学専門科目に関する知識を整理し、かつ確実に理解しておく必要がある。1年次で学んだ薬学基礎科目や薬学専門科目について、演習中心の授業を行い、練習問題を通して解答を導くまでの客観的かつ論理的思考力を養うとともに、2年次以降の薬学専門科目の受講に備えることを目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

それぞれの科目を担当した7名の教員による授業であったが、約9割の学生が『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』の項目について、そう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答している。また、約3割の学生が再試験となったが最終的には全学生が合格したことから、科目の目標は達成できたと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

後期2の授業が終了してからの集中講義であるが、1年次で学んだ薬学基礎科目や薬学専門科目について1年次のうちに演習し知識の整理ができる点が本科目の特徴であると考えられる。合格率から見ても特に問題はないため、次年度以降も同様に本演習を実施したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習の割合：演習 100%
7名の教員による主に前期の薬学基礎科目および薬学専門科目の演習授業である。各教員は1～3回授業を担当し、それぞれの教員が作成した資料を教材として、コアカリ重点ポイント集とコアカリ・マスターを参考書とした。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートの評価は全ての項目で良好であるが、特に、『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』の項目は、約95%の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答した。一方、学生から後期の科目についても演習をお願いしたい旨のコメントを頂いた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

オムニバス形式の授業であったが、『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』の項目については、約90%の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答したことから、大きな変更は必要ないと考えられる。一方、後期の科目についても演習をお願いしたい旨の学生からのコメントについては真摯に受け止め、次年度以降の検討課題としたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

演習形式の授業であるため、授業中の課題の取組みと解説が形成的評価とみなされる。また、一部の教員は授業の最後に確認問題を解かせ次回の授業でフィードバックも行っている。総括的評価については、定期試験100%で実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

前述の通り、約3割の学生が再試験の対象となったが、最終的には全学生が合格した。試験は科目担当教員がそれぞれ作成し、採点についてはマークシートを機械で読み取っていることから、統一された採点基準となっている。従って、評価方法については改善の必要はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価方法については学生からコメントはなく、次年度も同様に実施する予定である。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2年次に履修した薬学基礎科目および薬学専門科目を対象として、演習を主体とした講義を実施した。練習問題を通じて解答を導く過程において、客観的かつ論理的な思考力を涵養するとともに、今後履修する薬学専門科目への円滑な接続を図ることを目的とした。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本試験には53名が受験し、22名が再試験対象となった。再試験の実施後、最終的に11名が不合格となり、一定数の学生において学習の定着が不十分であることが明らかとなった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

薬学演習Ⅰ～Ⅲの運用に関しては、学生から多くの改善要望が寄せられており、現行の体制には見直しが必要である。今後は学生部委員会において改善策を具体的に検討し、順次実施していく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本試験の2週間前の期間のうち1週間で、前期開講の12科目を対象として集中講義を行い、学生の学習内容の整理および理解の定着を図った。

2) 自己点検・評価

運用に関しては学生から多数の意見・要望が寄せられており、現状の体制には大幅な見直しが求められている。今後は学生部委員会において改善策を具体的に検討し、適切な対応を図っていく。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

他の科目についても集中講義の実施を望む意見が学生から寄せられている。この点については講義期間の在り方も含め、学生部委員会において具体的な改善策を検討・議論していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

集中講義の出席率が66%以上の学生に本試験の受験資格を認めた。成績評価については、本試験および追再試験の結果に基づき、客観的に判定した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 79%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

平均正答率は、本試験で69.2%、追再試験で60.0%であった。いずれの試験においても、ゾーン1（1年次科目）の平均正答率がゾーン2（2年次科目）よりも低く、知識の定着が不十分な学生を適切に区別できていると考えられる。したがって、成績評価の方法については妥当であると判断する。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価の方法については、学生から特に意見や要望は出ていない。そのため、現時点では改善の必要性は認められないと判断する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅲ	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

3年次までに学ぶ専門科目について演習を通じて基本的な問題を解くための論理的思考能力の向上を一般目標とする。3年次までに履修する薬学専門科目の総復習なので、学習者は演習を通じて自分の弱点を見つけ、速やかにそれを克服するよう自己研鑽に励むことを到達目標とした。総括的評価において履修者55名中合格者は42名(76%)であった。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

2023年度より試験範囲に薬学演習Ⅰ、Ⅱの範囲が含まれることになったが、集中講義は3年次科目のみ実施した。2024年度から薬学演習Ⅲ合格が進級要件に加わったことを考慮し、学習の便宜を図るためⅠ、Ⅱの授業資料を3年生にも公開した。合格率は前年度の49%から76%に上昇し、学生の努力と教員の支援が成果として現れた。しかし24%の学生は単位取得に至らず到達目標が十分に達成されたとは言えない。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2024年度は合格率が向上したが、「可」と評価された学生が29%おり習熟度向上が求められる。集中講義の開講時間が重なるため、3年生は1、2年生向け集中講義を受講できない。その対策として2025年度も3年生に1、2年次科目の講義資料を閲覧できるようにする。可能であれば授業動画も準備し3年生が視聴できるようにしたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

100%演習である。集中講義では13人の教員が分担した。教科書はコアカリ重点ポイント集とコアカリマスターを指定しているが、教員によってはそれら以外の配付資料や独自の練習問題なども活用している。授業の中での教員による解説の時間と学生が問題を解答する時間の割合は教員ごとに異なる。

2) 自己点検・評価

授業評価では10項目全てにおいて科目平均が全体平均より低い値となった。中でも項目1(授業準備)、2(系統立った講義)、6(教員の熱意)が他の項目より低い。本演習は13人の教員によるオムニバス形式であるため、いずれの項目も教員間で演習のやり方や演習中の態度・表現が異なることが一因と思われる。しかし、いずれの項目も前年度に比べると全体平均との差が縮小しており改善傾向にある。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

本演習では13科目の3年次開講専門科目を集中講義の形で実施している。科目それぞれに最も効果的な教授方法があると考えられるため、教授方法の共通化は到達目標の達成率向上につながらないと思われる。故に、教授方法の共通化は求めず、各教員に科目の特性に合わせた教授方法の改善を検討するよう指示する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

本演習では19回の演習を実施しているが、各担当教員は多くの場合1回ずつ担当しているのみである。そのため形成的評価導入は難しい。故に試験を100%とした総括的評価を実施している。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%) 76%

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

本演習の総括的評価における合格率は76%であり、前年度より合格率が27%向上したとはいえ到達目標が十分達成できているとは言えない。しかし、集中講義であること、講義をしない科目も試験範囲に含まれること、多数の教員によるオムニバス形式で実施していることなど科目の特性を考慮すれば総括的評価による評価が適切と考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業の中でC-leArningを利用するなどして形成的評価に近い評価を実施し、学生の授業理解と問題を解く力の向上を目指す。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅳ	第4学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

4年開始時における3年生までの知識は、約半数程度の学生しか定着していない。特に欠単位保持者および留年生において低い。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

病院薬局実務実習で必要とされる薬学専門科目全般に関する基本事項の要点を説明できる学生が、82%程度であった。その中で共用試験において合格になった学生は97%程度であった。留年生を除いた学生のほとんどは目標達成できていると考えられるが、留年生においてはできていない状況である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

国家試験合格を見据えた目的であったが、学生より教員によって統一されていないとの指摘があった。CBT8割合格が国家試験合格につながることを目標の共有を教員間で図っていききたいと思う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

4年生までの専門知識を網羅するように学部教員でそれぞれの専門科目で分担して行った。演習（50%）、教員による演習・講義（50%）で実施した。科目別試験の解説を中心に行ってもらっており、担当教員に任せ様々な資料を用いて行った。週1回程度実施した演習や授業に対する質問は、各担当教員により対応した。特に本試験で不合格の学生を中心に補講を行った。

2) 自己点検・評価

おおむねうまく機能していると思われる。しかしながら、共用試験を意識した授業になりがちである。また、再試験からCBT本試験までの期間が空いてしまったため、成績上位者でも得点の伸び悩みがあった。共用試験において高得点で合格できるように学生および教員で周知する必要があると思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今年度より講義の効果が薄いと判断で解説講義のみとした。単に試験に出題されるところを授業で聞くことを目的にするのではなく、年間を通して学生が教員に直接的に質問しやすい環境作りを行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

前期においては、週1回程度の各科目における形成的評価を行った。後期においては、月1回程度の全科目を範囲とする形成的評価を行った。総括的評価は、共用試験と類似した出題数で実施し、最終的な評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 82%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

年間を通しての科目であるが、後期授業開始時～共用試験直前から本格的に勉強する学生が多かった。特に形成的評価では、どの評価においてもある程度の水準に達していない学生は、総括的評価においても基準に達していなかった。4年次留年が決定した学生や留年生が不合格者であった。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実務実習に十分に対応できる学生を目標とし、年度始めの形成的評価においても合格基準に達するように学生に意識づける。到達できていない学生には積極的に教員に質問するように促していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅵ	第6学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬剤師として必要な自発的かつ継続的な自己研鑽力を身につけるためには、6年次までに学習したすべての薬学専門科目に関する知識を再確認し、統合的に体系化付ける必要がある。本演習は、「6年次までの薬学専門科目および薬学応用科目全般にわたって総復習し、薬剤師として身につけておくべき知識を確実に習得すること」を目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はスケジュール通りに実施できた。ただし、学生の授業評価では、全ての項目で平均点以下（回答率32.7%）であった。本科目の単位認定基準は、薬剤師国家試験の合格率とも関連するものであるが、単位修得者の国家試験合格率は74.5%であり昨年度より改善できてはいるが、十分な目標を達成できていない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

必要な知識について、深さと範囲をきちんと理解できていない学生がまだ多いので、なぜこのような演習が必要なのかも含めて周知徹底が必要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、オムニバス形式により8教科を講義100%で実施した。6～9月前半まで知識の総復習の時間とし、9月中旬以降は、問題演習と解説を中心に実施した。1週間分の授業内容は、前週の金曜日に学生に掲示し、講義内容に関する資料は、担当教員各自でC-LeArningで公開し、また、教員によっては授業後の補足資料や動画を公開したり、小テストやドリルを実施するなどして、復習を促した。

2) 自己点検・評価

学生の授業評価では、全ての項目で平均点以下（回答率32.7%）であった。授業形式は教員個々に任せているため、授業としての統一感に乏しく、また、学生の知識量や理解度に差があり、学生全てが満足するような授業を実施することは難しい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本学学生は、国家試験において比較的簡単な問題を解けない場合があるため、昨年度に引き続き各科目において基本的かつ重要な項目について知識不足とならないように心がけた。ただし、学生個々の授業への取り組み方がそろっておらず、学生によっては教員の作成した資料が消化不良となっていた可能性があり、授業方法について大きな変更が必要であるかもしれない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的な評価は実施せず、シラバスの記載通り中間試験、一次試験、二次試験の結果を総合的に判断し可否を決定した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

中間・一次・二次試験の難易度は例年通りであった。薬剤師国家試験の合格率から判断して成績評価は妥当であったと判断できる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

中間・一次・二次試験の内容・範囲・難易度については、現状のままで問題ないと思うが、本科目の単位取得率を上げるためには、夏頃までには基礎学力を固定させ、応用知識の習得のためさらに学習意欲を高める工夫が必要である。試験の実施時期についても検討したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	からだと生命の基礎原理	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

化学、物理学、物理化学および分析化学の基本的な原理を理解し、それを生体内で引き起こされる様々な現象について説明できる知識を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

人体における物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との関わりを通して、人体に関わる現象への事実の基本的知識を理解する上で重要な教科であるが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことが出来ずに、ただ板書を書き写しているだけの学生が少なからず見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価からからだと生命の基礎原理の授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をしっかり受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も当日の授業内容を踏まえ復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義出席60%、レポート作成40%の割合で授業を進めた。基本的に最低限必要な事項のみ板書を行いながら授業を行った。また、授業の後半に当日の授業内容をレポート形式でまとめさせ知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との講義と連携しながら、人体に関わる現象への事実の基本的知識を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、必要最低限の重要事項のみ板書しながら授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各単元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業の最後に当日の授業内容に関するレポート課題を提出させることにより評価した。また、レポート課題に対する解答内容が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正しい解答できるように誘導した。また、正しい解答をした場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。毎回レポート課題を提出させ総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

授業中に教員が話している内容、板書した内容をレポートにまとめさせ、学生のどの程度理解力しているかを重点にしてレポート内容を評価した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

毎回レポート課題を提出させ総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	健康食品学	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、現代社会における疾病とその予防、栄養と健康に関する基本的知識、技能、態度を習得する。併せて適切な薬物治療および地域の保健・医療に貢献できるようになるために、要指導医薬品・一般医薬品およびセルフメディケーションに関する基本的な知識の習得を目標とする。以上を一般目標とし8つの到達目標を設定した。7回の講義を3名の教員で分担した。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

受講生48名の内46名が単位を取得でき、43名（90%）の受講生が良以上の成績であった。2023年度は受講者57名中56名（98%）が良以上であったことを踏まえると一部の学生の習熟度が前年度よりも低下したと思われる。しかし、依然として受講者の96%は単位を取得できたことより、目標は十分達成されたと判断する。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2024年度は必修科目から選択科目に変更となって2年目にあたる。選択科目にも関わらず、履修可能な3年生48名全員が選択したことから、科目の到達目標を大部分の学生が理解し納得しているものと判断した。故に2025年度も同じ到達目標とする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義が100%である。指定教科書・参考書以外に担当教員が作成したプリントも配布した。内容は保健機能食品に関する資料、教科書のまとめ、練習問題など（佐久間）、内閣府食品安全委員会の健康食品に関する報告書など（熊本）、健康食品素材の調査方法・最近の食品素材研究の動向、健康食品の製造から販売までなど（村田）である。授業中や終了前に学生に問いかけをし、学生の発言・参加を求め双方向性の確保に努めた。

2) 自己点検・評価

2023年度は評価項目全10項目中9項目が全体平均より高く、教育方法に関し学生の満足度は高いと判断していた。しかし、2024年度は講義内容や方法に大幅な変更がなかったにも関わらず、全項目で全体平均より科目平均が低い結果となった。主たる理由は不明であるが、項目1「授業準備」、項目3「理解し易さの工夫」、項目4「教員の話し方」に関して否定的な評価入力があり改善すべき点と考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

項目1、項目3については担当教員各自が自身の講義内容・資料について精査し、必要があれば見直しをする。自由記述欄に配付資料に関して具体的に例を挙げ改善を求める記述があったため、その指摘には優先的に対応したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は実施していないが、毎回の講義の終わりにプリントに記した練習問題を解かせ理解度向上につとめた（佐久間）。期末試験成績を100%とした総括的評価を実施した。3名の教員で分担しており、コマ数に応じて期末試験の点数を配分した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 96%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者48名中1名は欠席が多く期末試験受験資格を失った。1名は受験したが不合格となった。最終的に受講者48名中46名が単位を取得できた。形成的評価は実施していないが、総括的評価で96%が合格できており、成績評価の方法に問題はないと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形成的評価の実施を検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	遺伝医学概論	第4学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

遺伝子や染色体など生命科学の知識を基礎とし、疾病のなりたちや治療法を含む遺伝医学全般の知識を習得する。生物学や生化学、分子生物学で取り扱った基礎知識を基盤とし、家族歴・家系図や遺伝病、染色体異常、先天性疾患など遺伝医学ならではの分野を取り扱う。さらに検査法、治療法、分子標的薬との関係、そして倫理的課題やバイオエシックス、遺伝カウンセリング、先制医療の考え方を学ぶ。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

アドバンスト科目につきSB0sは存在しないオリジナル目標（独自目標）である。シラバス通りに授業を進め、予定通り到達目標をすべて達成できた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

前年度は指定業者より教科書が学生に行き渡らないトラブルがあったため、本年度は事前確認を入念に行い問題なく授業を行えた。学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書（遺伝医学，渡邊淳 著，羊土社）を基本に、オリジナルスライドおよびオリジナル要点集、患者会や製薬企業の解説動画を合わせ進めた。

2) 自己点検・評価

当該分野は技術革新と創薬が日進月歩であり、分子生物学等の基礎教科と実臨床、先進医療を繋ぐ基幹的な科目であり、基礎事項のみならず先進事例を多数用意し大変な熱意をもって臨んだ。授業評価は全般に良好であり、特に熱意の項目が極めて高く、また難解な内容を含むが関心を持つことができたとの解答が多く安堵している。その後、受講生より5年次病院実習において講義で扱った先進医療を現に行う機会があったと聞いた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

評価は全体に良好であり、学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。非常によくまとまった教科書であるが、日進月歩の時代においては古くなりつつある。新規事項や現代においての変更点は別途スライド・プリントで示しているが、そろそろ更新したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験（100%）とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%） 100%

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

基礎的な内容に加え、発展的内容や考える系の問題、論文を引用した問題など幅広い出題をしているが、平均正答率89%と成績は極めて良好であり、全員が合格した。学生個々の努力を評価することに加え、記述問題に大変素晴らしい解答が散見されたことを強調したい。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特記事項なし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床心理学	第6学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として、相手の抱える心理的問題を理解し信頼関係を築くための能力を身に付け、様々な背景を抱える人々に対応するため臨床心理に関連した内容を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

学生からの希望もあり、精神疾患を取り扱う回では「病気を抱える患者への対応」も取り扱った。その結果、精神疾患について学ぶ他の講義との差異化が図れ、到達目標の達成の一助となった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

精神疾患の基本的知識は他の講義や青本などと重複してしまうが、実際の患者像や具体的な症状なども合わせて説明することで科目独自の視点を提供することができると感じた。学生のニーズも確認しながら引き続き取り入れていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。また、昨年度に引き続き取り入れた簡易的な心理療法の体験、精神疾患の当事者目線の動画視聴に加え、心理検査の体験も追加した。学生の興味のあるテーマや学びたい内容をオリエンテーション時に聞き取り、追加した。

2) 自己点検・評価

興味があって受講した学生が多く体験にも集中して参加してくれた印象である。「精神疾患の患者への対応の仕方を知りたい」「参考文献を紹介してほしい」と積極的に意見を伝えてくれたため、講義内容をより充実させることができた。一方、精神疾患の当事者目線の動画視聴では、侵襲性が高くストレスを感じた学生がいた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

科目の性質上、受講生が様々な背景を抱えていることがあるため、体験内容や取り扱う内容についてオリエンテーション時に説明が必要である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%） 97%

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

合格率から見て大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	センサー概論	第6学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

機器を用いる先端的分析法の原理、その応用に関する基本知識を修得して、ガスセンサや医療用センサの仕組みについて説明できるようにする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

センサはガスセンサや医療用センサとして今や我々の日常生活に欠かせないものとなっており、センサの基本的な原理を修得するとともに、特に電極反応が関与しているセンサを中心にその仕組みを理解する上で重要な教科であるが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生も少なからず見受けられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の授業評価からセンサー概論の授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業を知識向上のためにしっかり受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下に繋がらないように、教官側も注意を払うが、学生側も当日の授業内容を踏まえ復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義80%、レポート作成20%の割合で授業を進めた。プリント、スライドを使用しながら授業を行なった。また、授業の後半に当日の授業内容をレポート形式でまとめさせ知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との講義と連携しながら、ガスセンサや医療用センサとして今や我々の日常生活に欠かせないものであることを理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのため教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には復習を徹底させる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、プリントとスライドを併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各単元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業最終日の授業内容に関するレポート課題を提出させることにより評価した。また、レポート課題に対する解答内容が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正しい解答できるように誘導した。また、正しい解答をした場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。授業態度、レポート課題を提出させ総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

授業中に教員が話している内容のスライドをレポートにまとめさせ、学生のどの程度理解力しているかを重点にしてレポート内容の評価した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業態度、レポート課題を提出させ総合的に評価する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療英会話	第4学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療場面での英語運用力を養成することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。学生による授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義・演習等の割合：演習 100%
演習は教科書に沿って行なった。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

受講態度 20%、授業時の課題 50%、提出課題 30%
形成的評価は実施しなかった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善すべき点はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床治験コーディネーター総論	第6学年
科目責任者(記載者)	橋本 ひろ美	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

講義後に小テストを実施し、振り返りの機会を設けたうえで、次回講義にて回答と解説を行い、事業内容の理解を深めた。教材は実務経験に基づき独自に作成し、教科書購入負担を軽減。演習はインフォームド・コンセントとデータ入力を体験させ実践力の習得を図った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

実務経験に基づく資料と事例を用いた講義により、全評価項目で学生評価は平均を上回った。質疑応答も平均以上であったが、さらなる理解促進のため改善の余地があると判断した。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

講義の要点を明確にししながら、小テストや演習時に学生の意見を取り入れ、双方向のコミュニケーションを意識的に増やすことで、理解促進と授業改善に努めていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義では理解定着を重視し、小テストと解説を通じて事業内容の振り返りを徹底。教材は実務経験に基づき独自作成し、学生負担を軽減。演習では実践的体験を通じて主体的な学びを促進する方針で構成した。

2) 自己点検・評価

実経験に基づく資料と事例を用いて、治験への関心を高める分かりやすい講義を実施した。講義中、学生と講義者間の双方向性のコミュニケーションの活性化と演習における学生の参加意識を高める工夫が必要と考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

薬学生として習得すべきポイントを講義内で強調し、演習では学生が自ら参加する意識を高めるため演習内容の難易度調整を図り、理解と応用力の向上を目指す改善に取り組む。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

授業内容について、講義終了後に実施する小テストを通じて、講義当日中の知識定着を図った。定期試験では、過去国家試験の出題問題に類似した問題をはじめ幅広い講義内容から作成し総合的な理解度を評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本講義の到達度は、薬学で学んだ知識の中で創薬にかかわる内容として治験全般への理解を深めることを中心に習得することであるため、治験現場で用いられる文言、薬機法と関連するGCPの内容を理解させることができたと思う。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

現在実施している小テスト結果説明の時間を活用し、学生と講義者間の双方向コミュニケーションを活性化し、治験全般に対する理解を促したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	科学コミュニケーション演習	第6学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

専門家から非専門家への科学情報の適切な伝達（いわゆるインタープリターの能力）の涵養を目標に、専門家と非専門家の双方の認識を深め、インタープリターの能力とは何かを知り、それに必要な心構えおよび技法を学び、実践的なコミュニケーションを行った。また、その先にある双方向性も出るについて認識を深めた。本科目はアドバンスト科目であり、到達目標はいずれも独自目標である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

シラバス通りに進め、すべての到達目標を網羅できた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

回答数は少ないものの、評価は良好であり、学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

各回のテーマ(課題)をディスカッションし、教員作成テキスト「科学コミュニケーション演習」を用い解説した。また、インタープリターの技法を学んだ後、その実践を目的とし、各自の課題を自ら考え、それを取りまとめたプレゼンテーションを行い、講評を加えた。本科目は演習科目であり、双方向性授業を基調としている。

2) 自己点検・評価

予定通り、ディスカッションを基本とした双方向性授業を行えた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

回答数は少ないものの、評価は良好であり、学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

プレゼンテーション・および授業態度で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

受講者は積極的であり、十分な討議を行うことができた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

回答数は少ないものの、評価は良好であり、学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	法医学概論	第6学年
科目責任者(記載者)	阿部 すみ子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「法医学の基礎的知識とその応用方法を説明できる。」「社会における薬剤師の役割を説明できる。」を到達目標にした。薬剤師国家試験も意識した上で、講義内容は薬剤師業務に関連する「法医学」領域とした。講義後は課題を提示して、重要ポイントの復習と理解を促した。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

学生期末試験において十分に理解したとして受講者全員が合格し、単位を取得したことから、科目の到達目標に達していたと考える。授業評価は大学の平均より高い結果であった。特に、準備とシラバスに従って系統的である、熱意の項目で評価が高かった。唯一、質問に対する解答の項目では評価が低かった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の参加や質問への対応の項目の評価が低かったことから、講義中に質問や意見を求める時間を設けて、理解度を深めるように改善したい。加えて、重要ポイントを明確にするために、繰り返しとポイントを絞り「考えさせる」講義内容を試みることで、知識の底上げを目指す。学生は熱心に聴講してくれたので、興味を持ってくれたと考えたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義時間はスライドを使った説明に費やした。講義内容は問題ない範囲ですべて配布した。資料は事前に配布して予習を促した。講義後に重要ポイントに関する課題を配布し、翌週に解説を配布することでフィードバックした。

2) 自己点検・評価

6年生対象のアドバンストコースを意識したので、詳細で難し胃内容を含んでいたが、学生は理解できたと期待している。「興味深く、楽しく受けることができました」との評価を得たので、さらに理解しやすく改善したい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「もう少し自由なやりとりができると、より学びやすくなると思う」との意見が合ったことから、講義中に質問や意見を求める時間を設けて、双方向性対策により、理解度を深めるように改善したい。加えて、重要ポイントを明確にするために、繰り返しとポイントを絞り「考えさせる」講義内容を試みることで、知識の底上げを目指したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績は期末試験の結果により評価した。試験問題は課題を中心とした内容で記述式であった。特に学生がこれまでに得た知識と社会的情報を踏まえて、考えて解答する内容の問題も含めて、理解力を評価する内容であった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

受講者24名中22名が期末試験を受けた。得点結果は67点から99点、平均86.8点で、22名の受講者全員が合格した。熱心に勉強して好成績を残した学生がほとんどであった。理解度に差があったものの、受講生は講義の目標に到達したと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

理解しやすい講義を構築して、多くの受講生に科学的で自由な発想を促し、知的好奇心が刺激されて、講義の目標に到達できるように工夫していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	新薬概論	第6学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

わが国では、毎年約50種類の新薬が発売されている。新薬には、全く新しい作用機序を持つもの、既存薬より有効性または安全性が高いもの、適応症を拡大したもの、新しい剤形としたものなどがある。新薬概論では、新薬と既存薬の違いを理解するために、新薬の開発の流れ、および最近6年間に発売された主な医薬品の薬理作用、副作用、適応症や特徴について、既存薬のそれらと比較しながら学習する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験において、正答率80%以上で合格した学生が全体の8割いたこと、最終的な不合格者が2名であったことから、教育目標は概ね達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は、すべての項目で全体平均を大きく上回っており、特に改善点は見当たらない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本科目は、講義の割合が100%である。授業の内容上、教科書は特に指定していないが、適宜、プリントを配布した。

2) 自己点検・評価

アドバンスト授業の中では、毎年多くの学生が選択する人気の授業で、今年度も多くの学生が受講し、授業評価でも評判は良かった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は、すべての項目で全体平均を大きく上回っており、自由記述では「学習しやすいレジュメ、作用機序の詳しい解説、練習問題への取り組みなど、各先生方が、様々な方法で私たち学生の理解が深まるようよう準備してくださっている様子が伝わり、有り難かったです。」とのコメントがあった。現在の教育方法で問題ないと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

4人の教員が各々該当範囲の試験を作問し、試験の範囲や問題数が膨大であったにも関わらず、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の8割もいたこと、最終的な合格率が97%であったことから、成績評価は適切になったと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの不満が特にないことから、成績評価の方法については現行の方法で問題ないとする。

2024 年度
授業の自己評価報告書

授業評価集計

科 目 名	授業はよく準備がなされていた。	授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。	授業は理解しやすいように工夫されていた。	教員の話し方は聴き取りやすかった。	教員は効果的に学生の参加(発言、作業)を促した。	教員の授業に対する熱意を感じた。	知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。	教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。	教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。	この授業の関連分野に関心を持つことができた。
医薬の歴史B	4.36	4.27	4.18	4.09	4.09	4.27	4.18	4.27	4.18	4.09
現代の社会福祉B	4.47	4.53	4.13	4.47	3.87	4.53	4.33	4.20	4.40	4.40
高齢者の健康B	4.67	4.67	4.33	4.67	4.33	4.67	4.00	4.67	4.00	4.33
言語学B	4.67	4.67	4.67	4.67	4.11	4.56	4.22	4.33	4.56	4.33
哲学B	4.29	4.14	4.00	4.29	3.86	4.00	4.00	3.86	4.14	3.86
文化学B	4.60	4.44	4.28	4.36	4.76	4.64	4.00	4.20	4.08	4.20
文学B	4.80	4.90	4.60	4.90	4.20	4.70	4.50	4.80	4.50	4.50
経済学B	4.35	4.22	3.83	2.96	4.43	4.52	3.48	4.00	3.78	3.61
社会学B	4.25	4.31	4.13	4.19	3.50	4.06	4.06	4.06	3.81	4.00
歴史学B	4.29	4.18	3.88	4.06	3.71	4.29	3.71	3.88	3.82	3.65
薬学英语Ⅰa(薬学英语Ⅰ)	4.31	4.50	4.25	4.19	4.31	3.94	4.06	4.31	3.75	4.06
薬学英语Ⅰb(薬学英语Ⅱ)	4.63	4.50	4.25	4.25	4.13	4.06	3.88	4.44	4.19	3.94
薬学英语Ⅲ	4.58	4.48	4.48	4.61	4.35	4.55	4.32	4.45	4.29	4.32
薬学英语Ⅳ	4.58	4.58	4.52	4.61	4.23	4.23	4.39	4.48	4.29	4.29
実用英語Ⅰ(英語検定Ⅰ)	4.21	4.50	3.93	4.00	4.07	3.71	3.71	3.86	3.79	3.71
実用英語Ⅱ(英語検定Ⅱ)	4.73	4.64	4.36	4.27	4.09	4.00	4.00	4.18	3.91	4.09
実用英語Ⅲ(英語検定Ⅲ)	5.00	5.00	5.00	3.00	1.00	4.00	5.00	5.00	3.00	5.00
英会話Ⅰ	4.09	4.27	4.09	4.00	4.45	4.18	3.91	4.00	4.27	3.82
英会話Ⅱ	4.63	4.50	4.63	4.50	4.75	4.50	4.50	4.50	4.63	4.63
英会話Ⅲ	4.50	4.50	4.50	4.50	4.60	4.60	4.50	4.60	4.60	4.40
中国語Ⅰ	4.57	4.64	4.57	4.57	4.50	4.36	4.50	4.43	4.29	4.50
中国語Ⅱ	4.50	4.00	4.25	4.50	4.25	4.50	4.50	4.25	4.25	4.50
中国語Ⅲ	5.00	4.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
体育A	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.80	5.00	5.00	5.00
体育B	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
美術A	4.00	4.33	4.00	4.00	3.33	4.00	4.00	4.00	3.67	4.00
美術B	4.33	4.33	4.33	4.00	4.33	4.67	4.00	4.67	4.33	4.00
書写A	4.88	4.88	4.82	4.88	4.65	4.76	4.71	4.82	4.88	4.65
書写B	4.83	4.89	4.78	4.67	4.78	4.72	4.67	4.72	4.78	4.61
数学Ⅰ	4.70	4.65	4.50	4.45	3.85	4.80	4.20	4.65	4.50	4.25
数学Ⅱ	4.25	4.38	4.19	4.44	4.31	4.38	4.19	4.38	4.31	4.19
化学Ⅰ	4.81	4.56	4.75	4.56	4.31	4.56	4.44	4.75	4.44	4.50
化学Ⅱ	4.67	4.60	4.53	4.33	4.13	4.47	4.27	4.40	4.13	4.33
物理学Ⅰ	4.62	4.62	4.38	4.38	3.62	4.15	3.92	4.15	4.08	4.15
物理学Ⅱ	4.22	4.44	3.89	4.11	3.89	4.22	4.11	4.11	3.78	4.00
生物学Ⅱ	4.83	4.42	4.92	4.67	4.17	4.50	4.42	4.83	4.33	4.42
生物学Ⅰb	4.41	4.35	3.71	3.59	3.41	4.18	3.53	3.88	3.82	3.53
フレッシュマンセミナー	4.47	4.32	4.53	4.74	4.53	4.53	4.42	4.37	4.37	4.42
情報科学講義	4.53	4.58	4.47	4.47	3.74	4.68	4.05	4.32	3.95	4.05
ⅠT技能演習Ⅰ	4.68	4.63	4.58	4.63	4.53	4.21	4.32	4.53	4.63	4.47
ⅠT技能演習Ⅱ	4.53	4.67	4.53	4.33	4.40	4.40	4.20	4.53	4.53	4.13
ⅠTプレゼンテーション演習	4.36	4.36	4.33	4.36	4.00	4.27	4.03	4.24	4.18	3.94
日本語表現Ⅰ	4.45	4.55	4.36	4.55	4.18	4.45	4.36	4.55	4.45	4.27
日本語表現Ⅱ	4.47	4.47	4.40	4.53	4.27	4.40	4.20	4.40	4.33	4.20
倫理学	4.44	4.50	4.50	4.78	4.50	4.67	4.44	4.28	4.39	4.28
統計学	4.44	4.32	4.00	4.15	4.06	4.29	4.00	4.03	4.18	4.00
心理学	4.58	4.63	4.53	4.21	3.89	4.47	4.16	4.32	4.16	4.21
薬学入門	4.22	4.33	4.00	4.44	3.78	4.22	4.44	4.22	4.11	4.11
健康科学入門	4.88	4.88	4.75	4.63	4.63	4.88	4.88	4.63	4.75	4.75
医療コミュニケーション論	4.48	4.48	4.03	4.16	3.97	4.16	3.58	3.81	4.10	3.90
臨床コミュニケーション演習	4.15	4.38	3.69	3.92	4.31	4.00	3.62	4.00	3.85	3.77

科 目 名	授業はよく準備がなされていた。	授業はシラバスに沿って、系統だって行われた。	授業は理解しやすいように工夫されていた。	教員の話し方は聴き取りやすかった。	教員は効果的に学生の参加(発言、作業)を促した。	教員の授業に対する熟意を感じた。	知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。	教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。	教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。	この授業の関連分野に関心を持つことができた。
リメディアル化学	4.25	4.25	4.00	3.75	4.00	4.00	3.75	3.75	3.75	4.00
リメディアル物理	4.17	4.17	3.83	3.83	4.00	4.00	4.00	3.83	4.00	3.83
リメディアル数学	4.71	4.50	4.50	4.29	4.64	4.50	4.29	4.64	4.64	4.21
リメディアル英語	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.00	3.25	3.50	3.50	3.00
生化学Ⅰ	4.36	4.57	3.79	3.29	3.57	4.07	3.93	4.21	4.14	4.07
生化学Ⅱ	4.50	4.57	4.14	3.57	4.18	4.14	4.25	4.43	4.07	4.14
生化学Ⅲ	4.39	4.50	3.94	3.50	4.11	4.06	3.94	4.17	3.94	4.00
機能形態学 A	4.89	4.89	4.95	5.00	4.21	4.79	4.79	4.89	4.47	4.63
機能形態学 B (機能形態学Ⅰ)	4.95	5.00	4.95	4.89	4.37	4.68	4.74	4.84	4.74	4.68
機能形態学 C	4.56	4.60	4.06	4.30	4.02	4.36	4.08	4.22	4.20	4.12
解剖学	4.68	4.74	4.71	4.71	4.26	4.55	4.39	4.71	4.48	4.42
微生物学	4.67	4.61	4.06	4.30	4.03	4.39	4.24	4.24	4.33	4.21
細胞生物学	4.08	4.50	3.50	4.17	3.42	4.08	3.75	3.83	3.75	3.83
分子生物学	4.00	4.44	4.04	4.26	3.93	4.44	4.22	4.15	4.19	4.30
生物系実習Ⅰ	4.82	4.64	4.55	4.73	4.73	4.55	4.55	4.45	4.36	4.27
生物系実習Ⅱ	4.64	4.45	4.18	4.36	4.27	4.18	4.18	4.27	4.18	4.18
有機化学Ⅱ	4.37	4.53	4.47	4.32	4.24	4.53	4.21	4.50	4.18	4.24
有機化学Ⅲ	4.41	4.44	4.00	4.07	4.22	4.26	4.04	4.19	4.19	4.19
有機化学Ⅳ	4.58	4.63	4.54	4.46	4.04	4.54	4.25	4.54	4.38	4.21
有機化学演習	4.33	4.29	4.25	4.17	4.00	4.21	4.08	4.17	4.17	3.92
機器分析学	4.35	4.46	4.27	3.96	4.08	4.31	4.15	4.23	4.12	4.08
薬用植物学	4.67	4.67	4.29	4.10	4.00	4.52	4.43	4.38	4.14	4.38
生薬学	4.48	4.56	4.24	4.04	4.00	4.44	4.28	4.36	4.24	4.16
医薬品化学Ⅰ	4.63	4.63	4.50	4.50	4.50	4.50	4.44	4.56	4.44	4.44
医薬品化学Ⅱ	4.68	4.75	4.50	4.57	4.29	4.57	4.29	4.54	4.29	4.14
化学系実習	4.62	4.52	4.33	4.29	4.33	4.43	4.33	4.48	4.38	4.29
基礎分析化学	4.28	4.44	3.39	3.17	3.61	3.94	3.44	3.83	3.72	3.61
薬品分析化学	4.39	4.31	3.69	3.81	3.97	4.28	3.89	3.94	3.97	3.81
臨床分析化学	4.32	4.29	3.75	3.89	3.86	3.96	3.86	4.11	3.96	3.79
物理化学Ⅰ	4.63	4.68	4.58	4.47	4.16	4.53	4.16	4.53	4.37	4.16
物理化学Ⅱ	4.75	4.67	4.67	4.83	4.17	4.58	4.75	4.75	4.58	4.58
物理系実習	4.58	4.50	4.17	4.50	4.58	4.33	4.42	4.58	4.17	4.33
物理化学Ⅲ	4.52	4.52	4.52	4.48	4.36	4.39	4.33	4.55	4.30	4.36
環境衛生学Ⅰ	4.33	4.39	4.17	4.17	4.11	4.33	4.28	4.17	4.06	4.17
環境衛生学Ⅱ	4.43	4.57	4.36	4.07	4.00	4.86	4.21	4.50	4.21	4.29
栄養化学	4.30	4.30	3.93	4.00	3.83	4.17	4.07	4.10	4.07	4.13
食品衛生学	4.47	4.47	4.24	4.12	4.12	4.47	4.29	4.38	4.24	4.12
公衆衛生学Ⅰ	4.18	4.11	3.71	4.00	3.96	3.93	3.71	3.96	3.89	3.79
公衆衛生学Ⅱ	4.56	4.50	3.75	4.13	3.88	4.25	4.06	4.38	4.19	4.19
衛生薬学実習	4.22	4.11	3.78	4.00	4.11	4.22	4.11	3.89	3.89	4.11
衛生薬学演習	4.43	5.00	4.71	4.71	5.00	4.57	5.00	4.57	4.43	4.71
薬の効き方と作用点 薬理系1	4.81	4.74	4.56	4.53	3.91	4.51	4.51	4.42	4.42	4.53
末梢神経に作用する薬と生体反応 薬理系2	4.23	4.41	4.18	4.41	4.09	4.23	4.23	4.36	4.09	4.18
生体内で生み出される生理活性物質 薬理系3	4.64	4.57	4.14	4.43	4.00	4.43	4.36	4.50	4.29	4.50
薬と病態 (精神疾患) 薬理系 6	4.67	4.67	4.61	4.39	4.17	4.78	4.61	4.78	4.78	4.72
薬と病態 (神経・筋疾患) 薬理系 7	4.27	4.60	4.53	4.20	4.47	4.47	4.40	4.53	4.47	4.40
薬と病態 (感染症) 薬理系 8	4.42	4.42	3.83	4.29	3.88	4.29	3.96	3.96	4.13	4.13
薬と病態 (心・血管・呼吸器疾患) 薬理系 9	4.71	4.71	4.71	4.71	4.29	4.71	4.43	4.29	4.14	4.14
薬と病態 (腎・泌尿器・生殖器疾患) 薬理系 10	5.00	5.00	4.89	4.89	4.67	4.67	4.67	4.89	4.67	4.78
薬と病態 (代謝性疾患・骨関節疾患) 薬理系 11	4.60	4.60	4.70	4.60	4.40	4.60	4.50	4.70	4.40	4.50
薬と病態 (消化器疾患) 薬理系 12	4.50	4.67	4.17	4.50	4.00	4.33	4.00	4.50	3.83	4.00

科 目 名	授業はよく準備がなされていた。	授業はシラバスに沿って、系統だて行われた。	授業は理解しやすいように工夫されていた。	教員の話し方は聴き取りやすかった。	教員は効果的に学生の参加(発言、作業)を促した。	教員の授業に対する熱意を感じた。	知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。	教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。	教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。	この授業の関連分野に関心を持つことができた。
薬と病態（悪性腫瘍）薬理系13	4.43	4.71	4.14	4.57	4.43	4.29	4.57	4.14	4.43	4.57
薬と病態（耳鼻咽喉・皮膚・眼・血液・造血器疾患）薬理系14	4.50	4.67	4.50	4.67	4.50	4.67	4.67	4.50	4.67	4.67
薬と病態チュートリアル1（神経疾患）	4.56	4.67	4.56	4.44	5.00	4.56	4.56	4.67	4.44	4.22
薬と病態チュートリアル2（循環器疾患・代謝性疾患）	4.41	4.35	3.76	4.00	4.41	4.18	4.12	4.29	4.06	4.12
薬と病態チュートリアル3（消化器疾患）	4.57	4.57	4.71	4.86	4.86	4.86	4.86	4.86	4.71	4.86
臨床検査学	4.40	4.30	4.45	4.55	4.55	4.40	4.45	4.65	4.35	4.40
薬理学実習	4.25	4.25	3.75	4.13	4.00	4.00	4.00	3.75	4.00	4.13
医薬品毒性学	4.71	4.71	4.71	4.71	4.57	4.71	4.71	4.71	4.71	4.57
医療統計学	4.80	4.80	4.27	4.40	4.13	4.73	4.20	4.40	4.40	4.00
薬剤学Ⅰ	4.35	4.56	4.35	4.35	3.91	4.26	4.18	4.44	4.18	4.15
製剤学	4.36	4.43	4.21	4.29	4.29	4.29	4.21	4.14	4.36	4.21
薬剤学Ⅱ	4.50	4.50	4.25	4.13	4.13	4.25	4.13	4.38	4.13	4.13
薬剤学実習	4.50	4.50	4.50	4.38	4.38	4.38	4.38	4.25	4.50	4.50
薬剤学Ⅲ	4.56	4.64	4.04	4.52	4.40	4.52	4.08	4.32	4.28	4.24
薬物相互作用学	4.40	4.32	4.00	4.36	4.04	4.20	4.20	4.16	4.12	4.16
薬物送達システム	4.88	4.88	4.75	4.88	4.88	4.75	4.88	4.88	4.88	4.88
薬物代謝学	4.09	4.17	3.26	3.57	3.57	4.00	3.70	3.48	3.65	3.52
医療倫理Ⅰ	4.45	4.55	4.32	4.45	4.36	4.55	4.36	4.36	4.23	4.27
医療倫理Ⅱ	4.36	4.71	4.29	4.71	4.36	4.50	4.43	4.29	4.50	4.43
セルフメディケーション学	4.38	4.46	4.31	4.23	4.46	4.46	4.23	4.46	4.42	4.38
漢方医学	4.82	4.73	4.36	4.64	4.36	4.73	4.36	4.73	4.27	4.45
薬局管理学	4.89	4.89	4.72	4.75	4.58	4.94	4.75	4.83	4.58	4.75
在宅医療・介護論	4.59	4.54	4.44	4.76	4.00	4.68	4.32	4.41	4.10	4.39
薬学演習Ⅰ	4.65	4.41	4.47	4.24	3.94	4.47	4.53	4.59	4.35	4.35
薬学演習Ⅱ	4.41	4.38	4.28	4.31	3.95	4.33	4.18	4.31	4.15	4.18
薬学演習Ⅲ	4.00	4.00	4.10	4.00	3.80	4.00	3.90	3.80	4.20	3.70
薬学演習Ⅳ	3.67	3.92	4.00	4.17	3.67	3.92	3.83	3.83	4.00	4.00
薬学演習Ⅵ	4.00	4.00	3.85	4.05	3.75	3.80	3.65	3.90	4.20	3.85
からだと生命の基礎原理	4.15	4.31	3.62	3.54	4.00	4.15	4.08	4.00	4.00	4.15
ゲノム医療学	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	4.00
健康食品学	4.00	4.11	3.79	4.00	3.95	4.16	3.89	4.00	3.84	3.89
歯周病学	4.50	4.67	4.50	4.67	3.50	4.50	4.17	4.50	4.33	4.33
遺伝医学概論	4.92	4.92	4.50	4.50	4.33	4.75	4.50	4.67	4.25	4.50
医療英会話	4.77	4.63	4.73	4.77	4.70	4.60	4.47	4.70	4.43	4.40
臨床治験コーディネーター総論	4.60	4.80	4.60	4.70	4.80	4.80	4.30	4.80	4.20	4.20
臨床心理学	4.84	4.91	4.69	4.59	3.97	4.72	4.56	4.47	4.38	4.63
センサー概論	4.11	4.56	4.33	4.56	3.78	3.78	4.56	4.00	4.44	4.44
科学コミュニケーション演習	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
法医学概論	4.78	4.78	4.39	4.50	4.56	4.72	4.28	4.44	4.22	4.22
新薬概論	5.00	4.82	4.91	4.91	4.91	5.00	4.91	4.91	4.82	4.91
教育の理論と技法	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50
平 均	4.49	4.51	4.26	4.31	4.13	4.39	4.20	4.33	4.23	4.21